二次元

ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

「そんな触手で大丈夫か？」「一番いいのを頼む」

cover illustration by 桂井よしあき

成年向け雑誌

立ち読み版

カラーイラスト小説

白百合の剣士 外伝 触悦の檻

筑摩十幸×助三郎

特別付録 ピンナップポスター

いるまかみり／浅沼克明／桂井よしあき

短期集中連載小説

聖戦姫ヴァルキュア☆シスターズ

筑摩十幸×しまちよ

原作:catwalk NERO

大好評連載&読み切り小説

北都凛×長頼

筑摩十幸×こうきくう

黒井弘騎×KAGEMUSYA

酒井仁×笹弘

空蝉×ぼっしぃ

夜士郎×牡丹

カラーマンガ

ぱふぇ

大人気えっちマンガ

超昂閃忍ハルカ

MISS BLACK

魔法少女イスカ ～after school.～

SASAYUKi

ぱふぇ／おおたたけし

琴慈／かろちー

表紙&ピンナップテレホンカード

応募者全員サービス

DIGITAL EDITION デジタル版

vol.56 2011 02

アイドル&変身ヒロイン姉妹
華麗に参上!!
聖戦姫
ヴァルキア☆シスターズ
HOLY PRINCESS THE VALCURE SISTERS
淫闇に堕ちたアイドル
前編
小説／NOVEL 筑摩十幸（ちくまじゅうこう）
挿絵／ILLUSTRATION しまちよ
原作／ORIGINAL catwalkNERO
原作ゲーム最新情報は14pへ！

歩行者天国で賑わう交差点に、突如一台の大型トレーラーが乗りつけた。コンテナ一面を飾るのは赤と青のド派手なカラーリングと萌え萌えの美少女キャラクター。

「なんだなんだ」「これが痛トラってやつか？」

何人かが興味を示し、周囲に集まってきた時、ズズズンッ♪　ドコドコドン♪　ダダダンッ♪

大音響で音楽が流れ出し、同時にコンテナがパックリと割れて、簡易なステージへと早変わり。

「おお、これはまさか」「あの噂の新人アイドル！」

中からスモークとメロディーと照明がドオッと溢れ出し、エンターテイメントの波に乗るようにして二人の少女が躍り出る。

「あぶないあぶないっ！　丸い地球があぶないの」

「きゅうんっきゅうんっ！　九死に一生～～～」

微妙な歌詞とともにステージに立つのは、桜井奈月と桜井朝日。売り出し中のアイドルデュオ『W』の二人だ。出身や経歴など一切謎に包まれ、名前も本名なのか芸名なのかわからない。そんなミステリアスなところも人気の一つだ。

「うおおお、Wのゲリラライブ、キタ――――」

「わあ、ナツキちゃん！　可愛いっ！」

「アサヒちゃんも最高っ！」

昂奮したファンの歓声がさらに野次馬も呼び込んで、辺りはたちまち何重もの人垣が形成される。

「カンケンなんてクソクラエ～～～違法行為もバッチグ～～～だって私たち～～～天下御免の～～～美・少・女ですからぁ～～～♪」

赤を基調にしたコスチュームが姉の奈月。年齢が上のぶん、発育も良好でたわわな双乳がステップを踏むたび、激しく上下に揺れ躍る。ミニスカートから突き出た脚線もメリハリが効いた美しさで、特に太腿などは大人びた色気さえ感じさせる。亜麻色のロングが上品な印象を与え、サファイアのような青い瞳は、見る者を癒やす優しい光を湛えている。

一方爽やかなブルーの衣装に身を包んでいるのが妹の朝日。姉に較べればまだまだ発展途上の少女体型。胸もようやく膨らみ始めた程度で、お尻もまだまだ青い果実といった硬さが目立つ。とは言え躍動感に満ちた健康的な肢体は十分に魅力的だ。少女から女へと移ろう一瞬を凝縮した美しさが、貴重な宝石のような強い輝きを放っている。ブロンドのツインテールは愛らしくも高貴な雰囲気を漂わせ、ルビーのような赤い瞳は、燃えるような意志の強さを現している。

「みなさん、応援ありがとうございます！」

「ポリスが来る前にもう一曲いっちゃうよっ！」

歓声とフラッシュを浴びながら、次の曲に入ろうとした時。

ドォオオオンッと爆音が鳴り響き、周囲のウィンドウがビシビシと振動する。

「なんだ、あれは？」

騒然とする観衆が指さす先、高いビルの向こうに黒煙がモクモクと立ち上っていた。何かが爆発したようだった。

「くっ……ガルドラーダ！　いっつもいっつも、いいところで邪魔してぇ！」

「いくわよ、朝日っ。みなさんも早く避難してくださいね！」

アイドル姉妹は手に手をとって、噴き出す白いスモークの向こうへ姿を消していった。

「グオオッ！　出てこい、ヴァルキュア・シスターズ！　来なければ、こうだぁ！」

異形の魔人がビル街の中心で咆哮すると、ガラスが一斉に砕け、凶器となって人々に降り注いだ。

「俺はベンガー・ツアンツァ！　勝負しろ！」

人間の身体に虎の頭をつけたような異様な姿。しかも左腕はマシンガンになっている。まるで特撮番組に出てきそうな怪人だが、その実力は本物だ。

「抵抗をやめろ！」「武器を捨てて降伏しろ！」

駆けつけた警官が叫ぶが、虎魔人は余裕の笑みを浮かべて一瞥。

「愚か者め。すでに力を行使している者に言う言葉かぁ！　力で止めてみせろぉっ！」

ドドドドドッと左手のマシンガンを一斉射。警官隊をあっと言う間に蹴散らしてしまう。

「もろい！　なんたる脆弱っ！　こんな世界など一瞬で我らガルドラーダが征服してやろう！」

紅蓮の炎を背に受けて高笑いするベンガー。

そのとき！

「月の光で闇夜を照らす！　ヴァルキュア・ムーン！」

「太陽の輝きが命を燃やす！　ヴァルキュア・フレア！」

澄んだ少女の声が、荒廃したビル街にこだまする。ベンガーが仰ぎ見ると、十階建てビルの屋上に二人の少女が起立していた。

「悪しき心を打ち砕く、ヴァルキュア・シスターズ！今、ここに降臨っ！」

赤いセパレートタイプのコスチュームに金のツインテールがフレア。青いドレス調のコスチュームに亜麻色のロングがムーン。

二人は日夜世界の平和のためにガルドラーダと闘う聖戦姫なのだ。少々幼く可愛い感じのフレアに対して、ムーンは大人びた美しさが際立っている。そんな正義のヒロインコンビはどこかWを彷彿とさせるモノがあるのは気のせいだろうか……。

「出たな、ヴァルキュア！　くらえぇっ！」

ズドドドドドドッ!!

ベンガーのマシンガンが火を噴き、屋上の少女たちが立っていたところが蜂の巣になるが、二人の姿

はもうそこにはない。
「てりゃああああっ！」
屋上からダイブすると同時に、息のピッタリ合った跳び蹴りを繰り出す。
「なにっ⁉　ぐおおぉぉっ！」
かろうじて腕をクロスして攻撃を受け止める虎獣人。だが衝撃で十メートルも吹き飛ばされ、左腕のマシンガンは大破してしまった。
「ううう。おのれぇ、出でよ、戦闘員！」
「イ――――ッ！」「イ――――ッ！」
全身黒ずくめの戦闘員がどこからともなく姿を現し、ヴァルキュアを取り囲む。
「俺が回復するまで時間を稼ぐのだ」
「イイ――――ッ！」
二十人近い戦闘員たちが一斉にヴァルキュア・シスターズに飛びかかる。雑魚とは言え、通常の人間を遙かに超えるパワーを備えており、油断ならない相手だ。
「私が相手をしましょう！　ルナーウィップ！」
一歩進み出たムーンの手には短い杖のようなモノが握られ、そこから青い光が鞭となって伸びる。
「いきますっ！　アクアウォール‼」
舞うような優美さで鞭がしなり、空気を切り裂く。その青い軌跡を追うようにして、大量の水が溢れ出した。
「イイ――――ッ⁉」
水の壁が戦闘員の一団を押し流す。聖なる水は戦闘員の邪悪な心を打ち消し、闘う力を奪うのだ。それでも何人かは壁を飛び越え、上空からヴァルキュアに飛びかかってきた。
「甘いですよ。アクアルナーガッ！」
タクトを振るように下から上へ、光の鞭を振り上げるムーン。すると地上が割れ広がり、巨大な水柱が噴き上がった。
グォオオオッ！　荒れ狂う水の流れは巨大な水龍となり、残りの戦闘員たちを一撃で薙ぎ払う。
「おのれぇ……やるな、ヴァルキュアッ！」
圧倒的な力を見せつけられて、ベンガー・ツアンツァが呻くような声を漏らす。
「あんたの相手は私よ！　プロミネンスダガー！」
背後に回り込んでいたフレアが、火の玉のような勢いで突進する。
「ぬう、勝負だっ！　ヴァルキュア・フレア！」
ベンガーも機関銃を乱射し迎撃しようとするが、高速移動中のフレアを捉えることはできない。
「そんなのあたらないよ～だっ！」
瞬間速度は音速をも超え、赤い残像が流星のように尾を引いて怪人の懐に飛び込む。
「てやあぁ！　ヒートサンブレイドォッ！」
抜きはなった短剣が灼熱の軌跡を引いて虎怪人の胸を切り裂く。鉄をも融解させる超高温の刃は表面のみならず、怪人の体内まで抉って焼き尽くすのだ。
「ば、馬鹿な、この俺がぁ！」
ズドォオオンッ！
凶悪な怪人が大爆発を起こし四散すると、周囲から歓声が湧き起こった。
「やったっ！　すごいぞっ！」
「さすがヴァルキュア！　超つえぇっ！」
「エへへ。そんなに褒められると照れちゃうな」
フレアは熱烈な声援に手を振って応える。
「さあ、戻りましょう。次の仕事がありますから」
一方ムーンは冷静だ。お調子者の妹の手を引いて高々とジャンプ。そのまま蒼天に姿を消した。
「今日も楽勝だったね、お姉ちゃん」
Wが所属するマスタープロダクション・ベータ企画部事務所にいるのはヴァルキュア・シスターズだ。どこかへ飛び去ったはずだが、なぜココにいるのだろう。
「ガルドラーダを甘く見てはダメよ」
「わかってるよ、お姉ちゃんってば心配性なんだから」
二人は瞼を閉じ、リラックスしたように力を抜く。姉妹の身体を包んでいた赤と青のスーツが光の粒子となって渦巻き、また別のコスチュームを形成する。そして光が消えた時、そこにはWの奈月と朝日の姿があった。そうヴァルキュアの正体は彼女たちだったのだ。
「奈月さん、朝日さん、お疲れ様でした」
「見事な活躍じゃったな！」
戻った姉妹を、ゴスロリドレスの少女と、緑のカエルのようなヌイグルミが出迎える。
ウェーブした紫髪とアメジストのような神秘的な瞳が特徴の少女はアナスタシア。ヴァルキュアとWの活動を裏で支える名参謀兼マネージャーだ。
「ヌイグルミについては省略します」
「待て、こぉらっ！　儂はなぁっ！」
「どうぞ、これを」
ぴょんぴょん跳びはねるヌイグルミを無視して、ゴスロリ少女はお茶とサンドイッチを差し入れる。
「わぁい！　お腹ペコペコだったんだよね！」
「ダメよ、朝日」
早速手を伸ばそうとした朝日を奈月が制した。
「ええ～～～なんで～～～？」
「ヴァルキュアとしてお食事の前にしなくちゃいけないことがあるでしょ。戦闘の後なんだから」
「ああ～～あれかぁ～～いいけど……ぶっちゃけ、あんま美味しくはないんだよね……」
不平を漏らしつつも、朝日はそこまで嫌がっている様子でもない。頬をほんのり上気させ、モジモジと腰を揺すっている。
「ミネルヴァで勇者様がお待ちですよ。早く朝日さ

んにエナジーを注ぎたいと仰ってましたよ」
「わ、わかってるってば！　もうっ！　シャワー浴びてくる！」
からかわれて耳までまっ赤になった朝日は、事務所から逃げるように飛び出した。

「朝日、ケガはなかったか」
「うん……大丈夫。楽勝でぶっ飛ばしてやったよ」
事務所の奥には仮眠室があった。元は簡素なベッドと少々の家具が置いてあるだけだったが、今では花やヌイグルミなどの飾りつけがされて、女の子らしい可愛い寝室に早変わりしていた。
「俺も少しは役に立っているってことかな」
「調子に乗らないの！　私の実力に決まってるじゃん。あんたの力なんて髪の毛一本程度よ」
いつものように減らず口をたたく朝日を青年は微笑みながら見つめている。彼の名は陸奥マサキ。
「はいはい、お姫様。じゃあ、いつもの感じでいいかな」
「う、うん……って、なんでマサキがリードするのよ。早く横になりなさい！」
仰向けに寝転がるマサキの上に、朝日が互い違いに覆い被さり、四つん這いになる。いわゆるシックスナインの格好だ。
「い、いっとくけど……マサキのことなんか全然好きじゃないんだからね。これはエナジー補給のため、仕方なくやってるだけなんだから」
念を押すように言った後、朝日はズボンのチャックを降ろしていく。ジッパーを広げ、下着を下げると、ムンッと蒸れた匂いが鼻を突く。これからエッチなことをするんだと思うと、それだけで胸がドキドキしてきて体温が急上昇する。
「わ、もうこんなに大きくなってる……」
グンッと反り返った勃起ペニスは雄々しくカリを広げ、太い幹に血管を走らせている。
（初めて見た時はコワイと思ったけれど……）
今では見慣れてきて、カワイイとさえ思えてくるから不思議だ。それはマサキに対する気持ちの変化も大きいだろう。
奈月と朝日は光の国のプリンセスである。しかし闇の皇子レイドルフ率いるガルドラーダ軍の侵攻を受けて、人間界へ逃れてきた。
人間界にはヴァルキュアにエナジーを与え、真のパワーを覚醒させる能力を持つ伝説の勇者がいるという。そして選ばれたのが彼なのだ。
彼と出会う前、朝日はこっちの世界の人間を馬鹿にしていたし、当然マサキにも反感を抱いていた。
しかしこっちの世界のことを教えてもらったり、ガルドラーダに苦戦していたところを助けられたりするうちに、急速に距離は縮まりつつあった。
「マサキってば、本当にエッチでスケベで変態なんだから。一日中勃起しているんじゃないの？」
陰茎を軽くさすりながら、亀頭部に舌を這わせていく。塩苦い独特の味。でも今はそんなに嫌じゃない。
「朝日のことが好きだからそうなるんだよ」
「バカ……ンちゅ……そんなこと言っても……処女は上げないんだからね……ちゅぱ」
「ああ。朝日がその気になるまで、俺は待ってるよ」
マサキは唇をワレメに押し当ててパンティ越しに愛撫してくる。
「ンはぁっ……それ……あ、熱いよぉ」
息遣いがダイレクトに感じられ、恥ずかしさと心地よさがじんわり股間に広がってくる。温かさ、舌と唇の蠢きが敏感なクリトリスを刺激して、腰がクニャクニャに溶けてしまいそう。処女の朝日にとって十分すぎる快感だ。
「アイドルの朝日が毎日俺のチンポをしゃぶってオマンコ舐められて悦んでいるなんて、ファンが知ったら驚くだろうな」
「あうんっ。悦んでないしぃ……ああぅ……エッチなこと言うヤツはこうしてやるぅっ」
仕返しとばかり、朝日もペニスを小さな口にくわえ込み舌をチロチロと這わせていく。
（マサキ……）
優しいマサキは朝日が許可するまでセックスすることはないだろう。でもそれが物足りないと思う時もある。肉体のみならず、心の距離が接近するほどに、そんな想いも募るのだ。その切なさは幼げなワレメに新鮮な蜜を湧かせ、ピッチリ貼りついたショーツにエッチな染みを広げていく。
（でも、もう少しだけ待ってね）
闘いのために、ヴァルキュア・フレアとしてセックスが必要という状況が、かえって朝日を躊躇させる。できることならそんな条件は抜きで、本心から愛している人と結ばれたい。今でもマサキのことは好きだけど、今胸を熱くする期待感がフレアとしてなのか朝日としてなのか。確信が持てるまでもう少し時間が欲しかった。
「はぁんっ、ちゅっ、くちゅぱぁっ……ほら、気持ちいいでしょ……オチンポ馬鹿みたいにおっ立てて、もう射精したいんでしょ？　んちゅくちゅっ」
素直になれない口は意地悪を言いながら、それでも熱烈な情愛を込めて勃起を吸いしゃぶる。
「おお、朝日……すごい……上手くなってる……っくう」
追いつめられたペニスが口の中で熱を増し、血管が激しく脈動する。もうすぐ射精するのだと思うと、淫らな期待でお臍の裏がきゅんと疼く。
「はあぁぁん……射精していいよ……あはぁん……アイドルの私が……あんたのオチンポミルク飲んであげるんだから……ちゅぷっ……感謝しなさいよね

著者近刊　『沙織 侍姫秘録』『黒薔薇の騎士Ⅱ』『奴隷聖徒会長ヒカル2』『淫堕の姫騎士ジャンヌⅡ』『ヴァンパイアスレイブ』『白百合の剣士Ⅱ』『借金お嬢クリス3』『令嬢完全調教』『牝妻蜜猟倶楽部』　好評発売中！

……ぢゅるるっ！」
ひねくれたおねだりをしながら腰を落とし、股間をマサキの顔に擦りつけた。火照った粘膜にマサキの吐息が吹きかけられるたび、燻り続ける官能の火種がカアッと赤熱した。
「おおっ、出るぞ！　朝日っ！」
マサキが腰をはね上げると、勃起が喉深く食い込んで、ドッと爆ぜた。
「んん～～～～～～～うくぅっ!!」
口中に溢れかえる熱濁流と精液臭。息もできないほどの苦しさが、かえって愛しい人の精を受け入れたのだという実感を与えてくれる。
「こくっ……ごきゅ……いっぱいレてるぅ……ごくんっ……あ、あぁぁん！」
無我夢中と言った様子で飲み下し、胃に送り込むほどに官能が燃え上がる。下腹のふしだらなざわめきが爆発的に広がり、幼い性を焼き尽くす。
「ふぁああっ……マサキィ……あぁぁあ～～～～～～～～んっ」
ツインテールを波打たせ、愛らしいお尻をプルプル震わせながら、朝日は虹色に霞む絶頂に登り詰めていった。

まどろみを吹き飛ばしたのは、けたたましい警報音だった。
「西にある工場地帯にガルドラーダが出現。破壊活動を行っています。多くの怪我人が出た模様。至急出動準備をしてください」
アナスタシアの声が静かに響く。声はいつも通り冷静だが、状況はかなり緊迫している。
「もう、休ませてもくれないんだから」
ベッドから起き上がった朝日は、もうヴァルキュア・フレアへとその姿を変えていた。
「もう行くのか」
「うん。ちゃちゃっとやっつけて戻ってくるから待っててね。そしたら……」
「そしたら？」
「な、なんでもないわよ！　エッチなことなんか全然期待してないんだからねっ！」
「一言もそんなこと言ってないだろう」
「もう、うるさいっ、バカバカッ」
アッカンベーした後、朝日は顔をまっ赤にして飛び出した。

「待っていたわよ！　ヴァルキュア・シスターズ！」
破壊された工場の煙突の上に漆黒のゴスロリドレスを纏った少女が起立していた。見た目はアナスタシアにそっくりだが、童顔に浮かぶのは凶悪な微笑み。
「リュードミラ！　罪のない人を苦しめるなんて許しません！　アクアウォールッ！」
ムーンの放った水流が工場に降り注ぎ、火災の勢いを食い止めた。その間に逃げ遅れた人も脱出していく。
「人間が傷つくのはこの世界に逃げ込んだお前たちのせい。嫌なら私に倒されなさいな」
「理屈をこねるなぁっ！」
濛々と上がる黒煙を突き抜けてフレアが突進する。死角をついた完璧な奇襲だったが。
グオオオォォォォォッ！
「！っ」
新たに上がった火柱が行く手を拒む。フレアは空中で急制動をかけて、一旦間合いをとった。
「お前たちの相手は俺だ」
火柱の中、ガルドラーダの魔獣人が腕を組んで立っている。鉄骨もアスファルトも融解するほどの高熱のはずだが、黒豹の頭部を持つ獣人は平然としていた。
「彼の名はパンター・ツアンツァ。これまでの獣人とはひと味違うわよ」
ククッと小さく嗤う魔少女。アメジストの瞳が細められ、薄紫の唇の端に小さな牙がキラリと光る。
「なんといっても、あなたたちの母親、ルーティアが産んだ魔獣人なのだから」
「なっ!?」
「なんですって!?」
あまりのことに一瞬頭の中がまっ白になる。その直後激しい怒りの炎が脳内をまっ赤に染めた。
「よくもお母様を穢したなっ！」
「落ち着きなさい、フレア。怒りに身を任せてはダメよ」
「お説教なら後。アイツは絶対許さないんだから！」
ダガーを振りかざし、パンターに突撃するツインテール少女。渦巻く火炎も吸い取って我が力とし、弾丸のように突き進む。
「来いっ、ヴァルキュアッ！　力を見せてみろぉ」
「ったあぁぁぁ――――ッッ！」
双方、避けようともせず、パワー全開でぶつかりあう。
ドッカアアァァァァンンッ！
凄まじい轟音と閃光。巨大な炎の塊がドーム状に広がり、大地を揺るがせる。
「フレアッ！　うあぁぁぁっ！」
太陽がもう一つできたような超爆発がすべてを呑み込み燃やし尽くす。ムーンが全力でシールドを張っていなければ、工場地帯のすべてが消し飛んでいたかもしれない。
ゴゴゴゴゴゴゴッッ！
爆発が収まった後には巨大なクレーターがポッカリ口を開けており、中をドロドロの溶岩が満たしている。その火の海の中心に黒い人影が一つ。
「あぁぁっ！　フレアッ！」

陽炎に歪む黒い巨体はパンター・ツアンツァだ。その太い腕に、フレアが捉えられていた。意識を失っているのかグッタリして、ピクリとも動かない。
「この程度とは、ヴァルキュアも大したことは……ないな……っぐうっ！」
余裕を見せていたパンターの顔が急に苦痛に歪む。フレア渾身のダガーが、左の胸に深々と突き刺さっている。
「オホホホ！　上出来よ、パンター！　フレアを連れて引き上げるわ」
「ま、まちなさいっ！　ううっ！」
慌てて追おうとしたムーンだが、先程のシールドでエナジーを消耗しており、身体が思うように動かない。その隙に魔少女と獣人は、フレアを連れて炎の向こうに姿を消してしまった。

水晶城。かつて光の国のシンボルとして世界を照らす存在であったが、ガルドラーダに占拠されてから、その姿は一変し、禍々しい闇のオーラが漂う悪の要塞と化していた。
「ようやく我が元へ来たか、ヴァルキュア・フレアよ」
「くっ……レイドルフッ！」
玉座に座った黒い仮面の男を見て、フレアは眉を吊り上げる。闇の皇子レイドルフ。彼こそがガルドラーダ軍を率いて光の国を滅ぼした、恐るべき魔将であった。見た目は若く端正な美青年といった感じだが、戦闘力は桁違いに強く、ヴァルキュア・シスターズの力をもってしても対抗しきれなかったほどだ。
「そこから降りなさいよっ。あんたなんかが座っていいところじゃないんだからっ」
十字架に拘束されたまま、レイドルフを睨みつける。どんな苦境に陥ってもヴァルキュアとしての誇りと闘志はまったく衰えていない。
「フッ。こんな椅子など興味はない。俺が欲しいのはすべての世界を支配する力」
ゆらりと立ち上がるレイドルフ。一歩近づかれるたび、強力なプレッシャーが押し寄せてくる。
「フレアよ、お前の身も心も闇に染め、俺の下僕にしてやるぞ」
伸ばした手がまだ発育途上の微乳をギュッと握り込む。
「あんたの下僕になんかなるもんですかっ。手をどけなさいよ、汚らわしいっ」
「お前の意思など関係ない」
薄く嗤ったレイドルフが唇を寄せてきた。
「いやっ！　んぐぐ……っ」
鋼鉄の十字架を軋ませる勢いでフレアは顔を振りたくる。だが磔状態では抵抗も虚しい。顎を押さえつけられ、強引に唇を奪われてしまう。
（こんなヤツに唇を……）
好きでもない男に唇を奪われて、激しい憎悪が胸を灼く。激情が全身を駆け巡って金髪が逆立つほど。
「ぬうっ⁉」
急にレイドルフがキスを中断する。その唇に微かに血が滲んでいた。フレアが噛みついたのだ。
「ハアハア……次は舌を噛み切ってやるんだから」
「フッ。面白い。それでこそ堕とし甲斐がある」
乳房を撫でていた手指がウェストを滑り降りてスカートの中に侵入してきた。シンプルなデザインの純白ショーツが露わになる。
「や、やめなさいよっ！　そこに触るなぁっ！」
腰を捻っても男の手は離れない。強固な防御力を持つヴァルキュアの聖なる衣を、いとも簡単にビリビリと引き裂いてしまう。
「ああっ！　やめろってば、見るな、バカっ！」
暴かれた聖域は新鮮な果実を彷彿とさせる初々しい魅力に満ちていた。ヘアはほんの産毛程度で、左右から寄せられた肉の花弁が、深いスリットを形成している。闘っている時やステージの上では活発でお転婆な印象があるが、可憐な花園は穢れを知らない少女そのもので、そこには光の国のプリンセスとしての品格が現れているようだった。
「随分初な反応をするな。勇者には毎日可愛がられているのだろう」
「う、うるさい、私たちは、そんなんじゃないっ！」
耳まで赤くなってレイドルフを睨むフレア。気丈な態度の中にも明らかに動揺が現れてしまい、レイドルフがそれを見逃すはずがなかった。
「もしかして……処女なのか？」
「ヒゥンッ」
質問と同時に膣孔をまさぐられ、フレアは喉を詰まらせる。マサキにすらショーツ越しにしか触らせていない大切なところを、荒々しく蹂躙されて悔しさと惨めさがこみ上げる。
男の手指から逃れたいはずなのに、浅く指先を挿入されると、貫かれる恐怖で身体が硬直して動けなくなった。
「クククッ。やはりそうか、これは面白い」
思わぬ収穫を得て仮面の魔将がニヤリと嗤う。
「勇者との契りによってヴァルキュアは真の力を発揮する。それをまだしていなかったとは……愚かなことだ」
「う、うっさい……女の子には色々あるのよ」
強い口調で吠えるフレアだが、内心は後悔で胸が張り裂けそうだった。
（こんなことなら……マサキに……）
素直になれなかった自分を責めても後の祭りだ。大切な人に捧げるべき純潔は今や風前の灯火だ。
「何があったか知らないが、そのお陰でプリンセスの処女を頂けるのだから勇者には感謝しておこう」
うそぶきつつレイドルフは勃起ペニスを握り出す。

二人の魔女を襲う触手陵辱！
や…め 入って
ボクの中に 入ってくる… なぁぁっ！
随分と弱く なったわね
ふふっ カワイイわ
うぐぅっ
このっ
あはは はははは
魔法少女～after school.～
magical girl found
最終話 未来を想起するまで
漫画 COMIC SASAYUKi
原作 ORIGINAL Lilith
©Lilith

あっ！はっはっはっはっ
前回までのあらすじ
セツナとともに白亜に囚われた蛍の救出に向かうイスカ。しかし、蛍を盾にされ、怯んだ隙をつかれた二人は触手に搦め捕られてしまい……。
お姉ちゃっ
お前は最後の最後で可愛がってあげるわ
あの黒いヤツの魔石を使ってるの？
調べてあげる…

ふふ…
私の魔薬の味は一度味わえばそう簡単に忘れられないわよ？
コ
コイツ…
まだ…生きて…
ヨゾラと同じ！
イッパイ出しながら奥まできてるぅっ！
射精
ドクン
ドクン
ドクン
ドクン

人形にしなくても従順な
私のペットに犯してもらいなさい
ズキュウウウッ
はい
おまこ
ぎもちいい
奥!!!
奥お
ゴリュ
ゴリュ

はー
はー
はー
はー
さぁ何人まで
正気を保てるかしら
待て
あ
あ
そ…んな
そこはっ
ぱぁ
お尻の…
穴っ…
はー
はー
はー
フル
フル
フル
うあ
おおおぉ

邪悪な魔王が伝説の女勇者に転生したようです

SATAN SEEMS TO HAVE BEEN REBORN FOR BRAVE GIRL

第三章 恥辱！　勇者はエッチな踊り子さん？

小説／酒井仁（さかいひとし） NOVEL
挿絵／笹弘（ささひろ） ILLUSTRATION

魔王から勇者へ、そして猫耳バニーにジョブチェンジ!?

シリーズ作品好評発売中！

無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
イラスト／池田靖宏

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集しているようです
イラスト／にの子

登場人物紹介

レスティーナ

魔王ブロウ・ブロウが人間の少女に転生した姿。再び魔王として世界に君臨するため行動している。

シュシュ

レスティーナとは幼なじみの魔法使い。無表情で何を考えているのかよくわからない。

ウィリアム

ラスティーナの剣術の兄弟子。実は前世が魔王ブロウ・ブロウの宿敵の勇者アーレスだった。

ケイレン

回復魔法を使いこなす、レスティーナの祖父。ヨボヨボだがスケベ心が旺盛なじいさん。

前号までのあらすじ　魚人の卵を産みつけられ、魔王の力を定着させるレスティーナ。その時ウィリアムの様子が激変、勇者の力を覚醒させるのだった。

1

「なんてことだ……まさか、ティナが魔王の生まれ変わりだったなんて。しかも新たな魔王になる気満々だなんて！」

頭を抱え込んだ青年剣士に、はしばみ色の髪の少女はむっつりと押し黙っている。

「それだけならまだしも、よもやこのボクが！　このボクが勇者アーレスの転生だったなんて!!　ボ、ボクはどうすればいいんだ……」

「……」

「ティナは魔王、ボクは勇者……つまりボクはティナと戦う運命だということ？　こんな、こんな残酷な運命がボクたちを待ちかまえていただなんて、あぁっ、ボクは耐えられないッッ」

「……あのな、ウィル」

だが青年は少女の言葉を遮るように、びしいっ、と幼馴染みの少女――伝説の勇者候補として最有力だったはずの――に指を突きつける。

その眉間には苦渋の皺が深く刻まれ、悲劇的な運命をひたすら嘆いている。

「ボクが本当に勇者の生まれ変わりならッッ！　ボクはキミと……ティナと戦わなければいけない！　互いの命を、存在をかけ、決着をつけなければいけないんだぁッッ」

ぶわぁっ、と青年の目に大粒の涙が浮かび、唇はわなわなと震え続ける。

だが白い剣士服の美少女は、すっかり悲劇に酔いしれている青年を前にがくりと肩を落とし、軽くこめかみを押さえ、言った。

「そおゆう勇ましいことはな、ウィル……せめてベッドから起き上がれるようになってから言った方が格好いいぞ？」

ここはティナたちが宿泊している村の宿屋。

勇者アーレスの紋章を発現させた青年剣士ウィリアムは、どういうわけか宿屋のベッドで病人のように寝かしつけられていた。

魚人の洞窟で勇者の力に目覚めたはいいが、そのまま腰が抜けてしまい、自力で身を起こすことすらできなくなってしまったのだ。

「勇者の紋章が顕現したかと思えば、いまはこの有様とは……一体どうなっているんだシュシュ？」

ぶ厚い魔導書を片手に、ウィルに手をかざしていた眼鏡の魔導師は、抑揚のない声で淡々と事実だけを告げる。

「勇者のパワー……強大な力を、ウィリアムの肉体が受け止めきれていない。力が定着するまでは、しばらく、このまま」

「ということは、本当にウィルがアーレスの転生なのか……やれやれ、厄介なことになったものだ」

さも面倒くさそうにくしゃくしゃと美しい長髪をかき回し、くるりと踵を返そうとする背中に、青年の声が追いすがる。

「ちょっ、どこに行くんだレスティーナ！」

「うるさい、私の勝手だ。それに……お前らはここらで旅をリタイヤせざるを得ないんじゃないか？」

ゆっくり振り向いた美少女勇者――魔王――の顔は、してやったりという笑みを浮かべている。

「私の書いたメモの通りに結構な買い物をしてくれているようだな、ウィル……もうこれから先、旅を続けていくような路銀は残ってないだろう」

「ぎくうっ」

少女の言葉通り、部屋にはウィリアムが買い込んできた明らかに多すぎる食料品や医薬品、無駄に嵩張る土産物などが散乱している。

それは少女魔王レスティーナが純真な青年相手に仕掛けた罠。

およそ役に立たないものを大量に購入させ、旅の資金を枯渇させようという狡猾……というかかなり回りくどい企みであった。

「いくらお前が勇者の転生でも、金がないと旅は続けられまい？　この場は見逃しておいてやる、せめてまともに立てるようになってから、追いかけてくるんだな！　おっと、私の分の路銀はちゃんと別に分けて入れて……」

「……あ……」

「あ、あれっ。お、おかしいな、確かこっちの袋に入れておいたはず……あれ？　あれ？」

自分の荷袋をがさごそかき回す幼馴染みの少女に、ウィリアムは言いにくそうに口を開く。

「あの、ティナ……キミが出かけたあと、ケイレンさまと相談して、路銀はボクが一手に集めて管理することにしておいたんだ。だから、その」

「ちょっ、私の荷物から勝手に金を持ち出したのか、コノヤロウ！　勇者の生まれ変わりのクセに窃盗を働くとは、魔王をも凌ぐ悪辣ッッ」

「ウィリアムは簿記の才能もあるからのう～、剣士の才能がなくとも、会計士くらいにはなれるぞ」

「いやぁ～、算術は昔から得意な方で。こっちの帳面をパーティーの出納簿にしてお金を管理しようとしていたんだよ、ほら」
嬉しそうに広げた帳面には、「食費」「宿泊費」「医薬品」などの項目に混じって、「娯楽遊興費」「福利厚生費」まで丁寧に書き込まれている。
「な、なんだこれは……雑収入としてスライムが飲み込んでいた小銭3ゴールド、私が空き家のタンスでガメたぬののふく7ゴールド……ど、どこで見てたんだお前」
魔王と勇者の運命の邂逅の場には恐ろしくそぐわないものを見せられ、レスティーナの顔が呆れから、激昂の色に染まる。
「だ、大体お前は勇者だろ、ちまちま家計簿とか付けてんじゃないッッッ」
「いや、闇雲にお金を使ってちゃ自堕落なパーティーになってしまうよ、ティナ。そんなのは勇者のパーティーとして……うう、でもボクがついうっかり路銀を使いすぎてしまったんだ……」
「いや、だからそれは私の計画で……って、なんの話なんだこれは！　あぁ～～～～ッッッ、もぉおお～～～～ッッッ！」
ものすごい勢いで論点がずれまくるこの空気を立て直そうと、美少女魔王は再び背を向け、部屋を出ていこうとする。
「ティ、ティナ！」
「もぉいい……旅の資金なんてどうとでもなるんだ。何しろ私は魔王ブロウ・ブロウの転生。たまたま人間に転生してしまったとはいえ、いまは魔王の力を取り戻した！　そう、伝説の勇者ならぬ伝説の女魔王、レスティーナ様なのだからなッ」
ゴォオオオッッ。
禍々しいオーラが、美少女を中心に噴き出し、室内の空気を邪悪に染める。
振り返った少女勇者の形相は、すでに勇者のものではない。はしばみの瞳は鮮血のような光を放ち、可憐な美少女とは思えない圧倒的な存在感を放っている。
「ティ、ティナ……ほ、本当に、キミは魔王の転生……なんだな」
「そうだ、お前ならわかるだろうウィリアム。お前の中に眠る勇者アーレスの血が教えてくれるはずだ。我らの過去世の因縁、逃れ得ぬ戦いの定めを」
間近に見る本物の魔王の迫力にウィルの顔は緊張にこわばり、ケイレンはほほおと感心し、眼鏡の魔導少女はただ無表情。
「だが、当面の目的はただ一つ、私の過去世……魔王ブロウ・ブロウを討ち滅ぼした憎き破壊神を倒し、自分の仇を討つこと。勇者と雌雄を決し、この世を手中に収めるのはそれからだ。運がよかったな、ウィリアム」
捨て台詞を残し、立ち去りかけたその背中に、じゃきっと金属音が投げかけられる。
「……きさま」
「ぼ、ボクが勇者かどうかはどうでもいい……でも、本当にレスティーナが魔王の転生で、魔王としてこの世に仇為すと言うなら……ボクは、その野望をここで食い止めるッッッ」
枕元に置いてあった大剣を構えた青年剣士は、いまにも倒れそうにフラフラしている。
誰の目にも、ウィリアムがまともに戦える状態ではないとわかる。本人もおそらくそれは百も承知しているだろう。
まして相手は魔王の力を完全に覚醒させたレスティーナなのだ。万が一にも勝ち目はない。
（言ったところで、聞くようなヤツじゃないか。ちっ、これだから人間ってのは面倒くさいんだ）
ふと魔王だった頃の記憶が甦る。
勇者アーレスも本当に融通の利かない、一本気で生真面目で、それゆえに厄介な相手だった。
ここでウィリアムを叩きのめしても、彼はどうあっても自分を行かせはしないだろう。完全に息の根を止めでもしない限り。
「こ、これは困ったのう……ティナが魔王だというのは聞いておったが、ウィリアムが勇者の転生となると、わしらは勇者のパーティーを名乗ればいいのか、魔王のパーティーと言えばいいのか、これは思案のしどころじゃ」
心底どうでもいいことで腕組みをして悩む老人を、ティナもウィリアムも完璧に無視する。
青年剣士の顔色は蒼白で、剣を構えるのもやっとという状態。だがその気迫はかつて感じたことがないほど凄まじく高ぶっている。
（剣の腕は私の方が上とはいえ、ウィルも一流の剣士……半端にいなすとこっちがやばい）
す……と後ろに回した右手のひらに、漆黒の魔力を集めるレスティーナ。
勇者と魔王、数奇な運命の元巡りあった両者の激突は必至と思われた、その時。
「ところでティナ――――」
なんの気負いもない少女の冷静な声に、少女魔王は気勢をそがれる。
「な、なんだシュシュ」
「こんな、物語の序盤で、魔王と勇者がガチンコ勝負、それはよくない」
「いや、よくないとか言われても」
ずばり、と黒のフードの少女はびしりと魔王に指を突きつける。
「いまのティナには、魔王分が足りない」
「まっ、まおうぶん!?」
「魔王とは、悪辣で、卑怯で、勇者を罠にかけたり、逆に利用したり、そうゆう邪悪なことをしないと、

著者近況　毎回、作者も楽しんで書いている本作ですが、この人たち、あんまり冒険らしい冒険してませんね。今回は特に……みんなジジイが悪いんや。

ダメ」

妙なことを言いだす魔法使いに、ウィリアムも困惑してシュシュと魔王少女を見比べている。

（シュ、シュシュの言うこともっともかもしれないな……せっかく魔王の力が手に入ったんだ。悪行をきちんと積まないと、魔王の格を疑われてもしょうがない）

まんまと幼馴染みの言葉に惑わされ、レスティーナは真剣に悩み始める。

すでに手に集めていた魔力は消え失せている。

（それに、いまの私の力だけで破壊神を倒せる保証もない。そうだ、ここはウィリアムを一人前の勇者に成長させて、こいつの力を利用してやればいいんじゃないか？　そうすれば、労せずして勇者と破壊神、両方とも倒せるぞ……くくく、なんて魔王っぽいんだ！）

にまにまと不気味な笑みを浮かべる幼馴染みに、魔法使いはうむうむと満足げに頷く。

「しょ、しょーがないなッ」

くいっと捻った腰に両手を当てると、レスティーナは長い髪をくゆらせ、ふくよかな胸を突き出すようにする。

邪悪な魔王のオーラは嘘のように消え去り、いつもの快活で明るい美少女勇者に戻っている。

「当分の間、魔王としての世界征服行為は休止することにする。だからウィルとも一時休戦、それでいいな？」

「……それは、魔王の力を使わない、いや人間に危害を加えないと考えていいのかい」

青年剣士はあくまでも用心深い。ティナはひょいと肩をすくめ、恭順の意を表す。

「かつて存在したもっとも邪悪な魔王、ブロウ・ブロウの名に誓って。魔王として力を振るうのは、あの破壊神の野郎をぶちのめす時だけだ。人間相手には絶対に魔王の力は使わない」

己の過去世にかけての誓いに、ウィリアムの肩からようやく力が抜ける。

大剣の重さによろけ、傍らのベッドにどさりと腰を下ろすと、重い溜め息をつく。

「よかった……ティナに剣を向けるだなんて、こんなのはもう二度とごめんだよ……」

がっくりとうなだれたその顔は青ざめ、憔悴しきっている。

この純朴な青年にとっては、己が勇者の転生であるとか、魔王を倒さねばならないということよりも、愛しく思っていた少女に剣を向けることの方が、よほど精神的にきつかったのだ。

「さて、と。じゃあ私は路銀の算段でもしてくるか。ウィルが回復するまではここに泊まらないといけないしな。とりあえずこのガラクタ、全部売り払ってくるか……ジジイ、手伝え」

「ひい、年寄りに肉体労働を強いるとは、老人はもっといたわらんか」

「うっせ、働かざるもの食うべからずだ」

勇者をただ倒すのではなく、勇者を利用して破壊神を倒すという魔王らしい目論見に、少女はすっかり上機嫌。

祖父の尻を追い立てて謎の土産物を運ばせようとするその姿に、ウィリアムは暖かな眼差しを向けずにはいられなかった。

「ティナ……ありがとう」

「なっ!?　何お礼とか言ってんだよ、ば、ばっかじゃないの？」

思いもかけない青年の言葉に、少女は頬が熱く火照るのを感じてうろたえてしまう。

「べ、べ、別にウィルのために魔王を休むわけじゃないんだからな！　か、勘違いするなよな」

「……」

「な、なんだよ。なに顔赤くしてんだよウィル」

「ほほぉ……これはなんとも見事なツンデレ。さすが我が孫、いやはや天晴れ」

しきりに感心する祖父と、うむうむと強く頷く眼鏡少女に、何かおかしなことを言っただろうかとますます困惑し、赤面してしまう。

「ティナ。ぐっじょぶ」

「シュシュ？　な、なんだよお前ら！　つんでれってなんのことだよ！　あ～もお、わっけわかんないってーの!!」

幼馴染みと祖父のにやにや笑いに居たたまれず、宿屋を飛び出していく、天然ツンデレ少女レスティーナであった。

2

魚人の住処がある入り江とは反対方向、町から離れた森の奥に、レスティーナは佇んでいる。

気のいいおかみさんや漁師たちの集う海辺の町から一歩離れると、そこは普通に歓楽街や貧民窟の集まった集落、さらに街道から大きく外れると、そこはもう鬱蒼と生い茂った深い森。

人など滅多に足を踏み入れない原生林は、むしろ魔物や魔族にとって馴染みが深い。弱肉強食というルールが支配する、荒々しくも生命力に満ちた世界である。

「ふう――――」

むき出しの自然の中に佇む純白の剣士服の少女は、一見すると弱々しい存在にしか見えない。

魔物でなくとも、狂暴な肉食獣が普通に徘徊する森の中は、ただの人間にとっては危険に充ち満ちている。

ぎゃぎゃぎゃぎゃ、と得体の知れぬ怪鳥の声が頭上でけたたましく響く。

著者近刊　『不死の吸血姫がドSのご主人様を募集しているようです』『無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです』『精霊騎士アクエアル1～2』『魔法少女イクシードファイナ』『学園さきゅばすパニック　おしえて退魔先生』『ボクと三人の淫ら妻　若妻饗宴日記』　好評発売中！

樹木や草葉に隠れた血に飢えた獣たちが、無防備な人間を包囲しているかもしれぬというのに、赤褐色の髪の美少女は落ち着いたものだ。
「ふっ……迂闊なヤツだな、ウィリアム」
誰に言うともなく、独りごちる。
「確かに私は、当面の世界征服行為を休止すると言った。だが――その下準備までしないとは言ってはいないぞ。さあ、出てくるがいい、我らが同胞。邪悪なる闇の眷属たちよ」
がさっ。ざざざざぁぁあああッッッ。
さっきまで微塵も感じられなかった猛々しい気が二つ、レスティーナの周囲に出現する。
だが、音を立てたのは最初の一瞬だけ。
成人男性をはるかに凌駕する巨躯にもかかわらず、草をかき分けるかさりという音一つ立てず現れた身のこなし。
人型でありながら、つんと鼻を突く野性的な毛皮のにおい。神経質そうに動く三角の耳、耳まで裂けた巨大なあぎとからにょきりと突き出たナイフのような牙からは、唾液が糸を引いて滴り落ちる。
(ほう、この森を統べるは人狼族か。まだ年若いが、なかなかの力と見える)
レスティーナはまだ気を抑えている。にもかかわらず、彼ら人型の狼――人狼たちは警戒心を強めている。
いい勘だ、と少女はにやりと獰猛な笑みを浮かべると、一気に魔王のオーラを解放する。
「……ッッッ!!」
森に迷い込んできた可憐な少女剣士を、敵か餌か判別しかねていた二匹の魔獣は、ただの一瞬で相手の正体を知り、そして戦慄した。
「グルゥウ……マオウ、ダト?」
「ダガ、マチガイナイ……」
「我が名はレスティーナ・リグボルト。人の身に転生しながら、魔王ブロウ・ブロウの力を受け継ぎし新たなる魔王ぞ! 汝ら、我に忠誠を誓い、我が軍勢の元に集うことを望むか」
華奢で可憐な美少女の口から発せられたとは思えぬ、威厳に満ちた重々しい声に、狂暴な人狼が気圧されている。
魔王とは、単に最強の魔族を意味するだけではない。
魔族、魔物の頂点に立つと同時に、そのすべてを統べる魔の長たる風格と器を兼ね備えてこその存在なのだ。
(くっくく、我が仇、破壊神を討ち滅ぼしたあとのことまで、私はちゃんと考えているんだ。いまのうちに各地に魔王軍の拠点を築き、世界征服の下準備を進めておくのだ)
そのためには、その土地土地を支配する強力な魔族に忠誠を誓わせ、手駒を揃えておくに越したことはない。
「どうだ、我に忠誠を誓うか、人狼族」
「グルゥウ……」
レスティーナの魔王の力は十分感じているようだが、魔獣たちはまだ躊躇っている。
それは彼らがティナの前世、つまりブロウ・ブロウを直接知らないからだろう。前魔王が滅ぼされてからすでに百有余年が経過している。
「ここは、いい森だな――人狼族の勇猛なる戦士、ノーイックのいた頃も、このような豊かな森がそこかしこにあったものよ」
少女の言葉に、人狼たちは一斉に唸りを上げる。
「グォオオオ……ッ。ワレラノ偉大ナル父祖・ノーイック! ソノ名ヲ知ルオマエハ、マサシク魔王ノ遺志ヲ継グモノ!」
ティナが口にしたのは、ブロウ・ブロウに仕えた人狼族の勇猛な戦士の名。
あれほどの魔族ならば必ず一族の記憶に残っているだろうとかまをかけてみたのだが、少女の目論見は見事に当たったようだ。
だが、二体の魔獣の黄色い眼からは、怖れとも警戒とも付かぬ剣呑な光が消えないままだ。しきりに喉を鳴らし、耳まで裂けた口の端から唾液を垂らし、舌なめずりをしている。
(ちっ……私が魔王だということは頭で認めているが、ケダモノの本能の方はままならぬらしいな。こいつら、私に欲情している)
なまじっか美少女であるのも困りものだな、とレスティーナは肩をすくめる。
そう、彼らは若く美しい人間の美少女であるレスティーナに対し、牡として発情していたのだ。よくよく見ると下肢のつけ根の毛皮を押しのけるように、赤黒い肉棒が膨張し始めている。
「まあそれもしょうがないか! 私は強大なる魔力と美貌を兼ね備えた美少女魔王なのだからな!」
すぅ……と目を細め片手をかざすと、「バシュン、バシュン!」と魔力弾が打ち出される。
「グォ!」「グァッ」
神速を誇る人狼が、避ける間もなく打ち倒される。ティナの見た目からは想像もできない電光石火の早業に、人狼たちは言葉を失う他ない。
「グゥ……コ、コレガ魔王ノチカラ……ムッ?」
「クックックッ……」
しゅるり、とリボンをほどくと、ティナは胸元を大きく広げ、巨乳をまろび出す。
さらに脚絆を片足ずつ脱いで、さっさと下着を取り去ってしまうと、獣たちの目はミニスカから見え隠れする乙女の花園に集中する。
「おっと、そのまま寝ころんでいろよ、犬っころ」
手をかざしただけで、不可視の魔力が人狼の巨体を地面に押さえつける。自分から手を出せないとい

う状況は獣をいっそう興奮させ、みりみりと巨大な肉の柱が隆々と天を仰いで勃起する。

「絶世の美少女に転生したとはいえ、たかが野犬に魔王の肉体を下賜するわけにはいかぬ。だが……我に忠誠を誓うならば、その浅ましく屹立したイチモツをかわいがってやらなくもない」

ティナはそっと小岩に腰を下ろすと、ぱっくりと股を開いた。目立たないアンダーヘアはほぼないも同然、ぷっくりと肉厚のむき身のような乙女の美貝が丸見えになってしまう。

「グゥォオオオ……ッッ」

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ……」

見せつけるように腰を浮かせると、獣のペニスに花びらが近づき、人狼たちの興奮を煽り立てる。

口の端にあぶくを溜めてぎりぎりと牙を鳴らしつつ、身体はティナの力によって起こすこともできないでいるのだ。

「さて、ではこういうことをしたらどうなるかな」

す……と脚が伸びて、タイツに包まれた少女の爪先が、ひたりと肉茎の裏側に当てられる。

(す、すごい……こんなに醜く膨張して、魚人の卵管の比ではないな)

人狼の体臭はいっそうきつく、フェロモンが鼻孔に突き刺さってくるよう。つんと尖った亀頭は、いかにも女の肉を切り裂き貫くのに適しているようだった。

「グルル……ガルルゥ……」

(あぁ、見られてる、あんなぎらぎらした目で私のお股を見つめて、このぶっといもので私を犯したがっているのだな)

ぞわわっ。いまだ汚れを知らぬはずのティナの背筋に快感が走る。

触手魔物や魚人の卵管などとは違う、勃起ペニスは牡の明確な獣欲の意志そのものだ。女陰をかき分け、子宮に子種を注ぎ込んで孕ませようという男の本能なのだ。

(い、いや、私までこやつらの欲望に振り回されてどうする。魔王としてこやつらを従え、支配下に置いてこその魔王だぞ。くくく、見ておれ)

「ワフォウゥッ!?」

ティナはもう片方の足も伸ばすと、両脚で茎を挟み込むようにした。

ひっきょう股が開く体勢になってしまい、股間はずっと人狼の視線に晒され続けることになる。

じゅわっ……触れてもいない肉唇の奥が火照り、熱いものが奥から滲んでくるのがわかった。

(いや、いますべきことはこやつらを屈服させ、忠誠を誓わせることだ。集中しろレスティーナ)

ブロウ・ブロウだった頃は自分のペニスがあったものの、他人のそれを弄るのは初めてだ。

だが人狼の興奮の唸り、生命エナジーの動きなどを観察すると、どこをどうすれば肉棒が快感を感じるかというのが自然とわかってしまうのだ。

(あ、あぁ、私いま、魔物のおちんちんを踏みにじって、悦ばせてる……)

自然とティナの息も荒くなり、顔が火照ってくる。ぎゅっ、ぎゅむっと踏みつけるように。あるいは土踏まずの部分で挟み込んで上下にしごくと、ねばっこい透明な汁が滲んでくる。

「ど、どうだ人狼族? 魔王の足にイチモツを踏みつけにされて、よがる気分は」

「ワオッ、グォオオンッッ!」

指先で亀頭を握るように指を曲げ、片足のかかとを睾丸の辺りに沈み込ませると、「びく、びくんっ」と大きく肉棒が跳ね上がる。

「むっ、もうそろそろか……うひゃっ?」

「ウォオオ〜〜〜ンンッッ!」

びゅるる〜っ。どびゅっ、びゅばぁああっ。

まるで白濁の噴水のように、獣の子種汁が噴き上がった。元々強い獣の体臭に、精液独特の臭気が混じり、少女魔王の鼻孔に突き刺さる。

(あぁ……ちんぽ汁のにおいも久しぶりだ。昔はこれを幾多の女に注ぎ込んでやったものだが、いまは注がれる立場になっただなんてな)

人狼たちに自分を犯させるつもりはない。

だが足コキで精を搾り取ってやったという満足感に、首の後ろがぞわぞわと興奮に痺れる。

「グルゥォオオッッ、オ、オレモッ! オレモ魔王サマニチンポヲシゴカレタイゾォオッッ」

揃って打ち倒されたはいいが、放置されていたもう一頭の人狼が血の涙を流さんばかりに慟哭する。

パンパンに張りきった獣ペニスは爆発しそうなほど充血している。

「くっくく、よかろうよかろう。貴様ら同時に、この恐るべき魔王の実力を味わわせてくれよう。貴様らの精力、どこまで持つかな……とぅっ」

なんの予備動作もなく身を起こし跳躍した少女は、ただの一瞬で人狼のそれぞれの股間に足を乗せ、優雅に佇んでいた。

「グムゥウッ、ア、足ノ裏ノ感触ガッッ」

「ウォオッ、マタ漲ッテクルゥウッ」

人間の男であれば急所を踏みつけにされて悶絶しているところだが、さすがは魔物。

ティナほどの体重はむしろ心地良い刺激とばかりに、海綿体がみりみりと充血していく。

「ふん、イチモツを踏まれて勃起するとはさすがケダモノだ。真の主従関係というものを、その身体に刻み込んでやろう、犬ころども」

冷たい眼差しで獣たちを見下ろしつつ、ティナはゆるゆると足首を動かし始める。

「ブロウ・ブロウを継ぎし、真魔王レスティーナの名において、貴様たちを我が下僕として徴用する」

しなやかな足の裏で肉棒を踏みにじられ、人狼たちの喉から快美の声が漏れる。
血に飢えた魔物をも手玉に、いや足玉に取る自身のテクニックが誇らしい。さらに、下着を取り去った足のつけ根に突き刺さる獣たちの視線。
彼らの鋭い嗅覚は、ティナの乙女の香りを嗅ぎ取っているだろう。
その証拠に、毛皮に包まれた下肢のつけ根に生えた赤黒い肉茎は、何度も足の裏で跳ね上がる。
「どうだ、こうすればもっとよく見えるぞ」
挑発するようにれろりと舌なめずりをすると、ティナは膝を曲げてしゃがみ込んでいく。
薄暗い部分に見え隠れする肉ひだの凹凸が、たまらなく扇情的だ。卑猥な格好のまま、タイツに包まれた爪先に獣の肉棒を挟み込む。
「ガルルゥウウォオオッッ！」
鉄線をより合わせたような強靭な肉柱が、少女の足の下でびくびくと痙攣する。牙を食いしばって必死に射精を堪えているようだが、いつ暴発してもおかしくはない。
さらに魔獣たちを挑発するように、ティナは腰のくびれと太ももボリュームを見せつけながら、乳房を揺すってみせる。
「ふふ……ちんぽがまた大きくなってきたぞ」
少女の妖しい笑みは、まさしく魔性。
人間の身体など一瞬で分断できる牙を持った魔獣を前に、毛の先ほどの恐怖も感じてはいない。
「ぐるる……ぐるるぅ、くぅん……」
二体の人狼は、完全にティナの支配下にあった。黄色い眼は獣欲に染まっているにもかかわらず、まるでお預けを食わされた忠実なペットのように、媚を振りまくような甘えた声を漏らす。
ティナの股間から漂ってくる甘い香りを嗅ぎ、くうんくうんと喉を鳴らしながら、ペニスを踏みつけている足指の動きに翻弄される。
牛の成獣を生きたまま引き裂くこともできる腕力も、鋼の鎧も粘土細工のように引き裂く牙も、少女魔王の前では無力だった。
「あ～っはっはっはっ！　どうした、ノーイックの末裔？　たかが人間の小娘の足でイチモツをしごかれて骨抜きになるとは」
「ぐる……グルォオ……」
右、左、右、左。左右の爪先を交互に前後させては、決して挿入することを許されない魔王の密壺を、獣の鼻面で揺すってみせる。
すっかり骨抜きにされた二頭の狼に妖しい笑みを向けつつ、ティナはその鼻面を優しく撫でてやる。
狼たちはぺちゃぺちゃと少女の指をねぶり、恭順の意を示す。
「れろ、ぺちゃ、れるる……マ、魔王サマ」
「ワレラ、偉大ナル父祖、ノーイックノ名ニオイテ、魔王レスティーナニ忠誠ヲ……」
「ダ、ダカラ、モット……モットイチモツヲ、シ、シゴイテ……グァアアッ」
ぞわぞわと込み上げる愉悦に身を震わせながら、レスティーナは人狼たちの上で優美に舞い始める。
「そうだ、その通りだ！　我こそが唯一にして至高なる魔王レスティーナ！」
ぎゅっ、ぎゅっ、ぐい、ぐい、ぐりんぐりんっ。
巧みに足首を捻り、あるいは指の間に茎を挟み込み、縦横無尽に獣ペニスをいたぶり尽くす。
まるで魔物の毛皮の上で波乗りをしているように腰をくねらせ、髪を振り乱す。たっぷりの白濁はにちゃにちゃと足の指にまとわりつき、濃厚な牡のにおいを立ち上らせる。
「はぁ、あんっ。すごいにおい……男の子種汁のにおい、胸いっぱいに吸い込んじゃってるぅう」
はしたなく開かれた太ももつけ根は、触れてもいないのに熱く疼いている。
しっとり滲んできた愛液が乙女の香りを振りまいて、ザーメンのにおいと入り混じる。
その淫ら極まる香りに、魔王の魔力さえ押しのけて腰を浮かせ、イチモツが少女を持ち上げる。
「グルゥウッッ、ナ、ナンテ気持チイインダッ」
「マ、魔王サマノ足ニ、搾リ取ラレルゥウッ」
「と、特別に魔王のおまんこを見ながら、精をこぼすことを許す……ああっ、もっとよく見てぇえっ、おまんこの奥まで見てぇえっ」
両脚で人狼の極太茎を擦り、締めつけ、ぐりぐりとかかとで睾丸を踏みつける。
茎に浮き出た血管の熱い流れが伝わってきて、ティナはいっそう激しく足首を捻って、魔獣たちを責め立てる。
足コキによる逆レイプも同然の痴態に、子宮の奥がきゅんきゅん疼いて快感が止まらない。
「さあ出してみろ！　魔王のいやらしいおまんこを奥まで覗きながら、くっさい魔物ちんぽから、ちんぽミルク出してぇえ～～～ッッ」
「オォオオ――――ッッッ、ウォオオオ――――――ンンン～～～ッッ!!」
がくがくがくっと人狼たちが同時に腰を痙攣させ、遠吠えが重なりあう。
ぐうっと腰が持ち上がり、ティナは思わず獣の逞しい胸板にしがみつく。
どびゅっ、びゅるびゅるびゅる～～～ッッ。
どくん、どくどくっ、びゅばばぁあああっっ。
赤黒い獣茎から真っ白で濃厚などろどろザーメンが、噴水のように迸る。
「ふあぁあっ、おちんぽミルクかけられてるっ、胸にも、顔にまで届いてるぅうっ」
人狼の胸に這いつくばったティナの全身に、勢いよく白濁が叩きつけられる。

熱を帯びた粘液の塊が下肢のつけ根に連続してぶつかって、ザーメンに犯されたような快感が骨盤を貫き走る。
「ひぎっ……おまん、こ、熱……ッ!? おっ、おちんぽミルクで犯されて、いっ、いっひゃう、ひゃうう〜〜〜ッッッ!」
粘液は剣士服の隙間からも染み込んで、全身が精液漬けにされてしまったようだ。
呼吸するたびに肺の奥まで牡の汁のにおいが染みついてしまいそうだ。
(精液のにおいでくらくらする……か、かけられてるだけで、い、イクぅうう……ッ!)
がくがくがくっ、と肢体を痙攣させ、樹液のにおいに包まれながらレスティーナは二度、三度とエクスタシーに達する。
足コキをしただけのはずなのに、少女は獣たちと交わったような満足感を覚えていた。
「はぁ、はぁ、はぁ……魔物に、ぶっかけられてイッちゃうなんて……」
「わふぅ……くぅうん……」
欲望を放出しきって気が抜けたのか、甘えたような声でティナの首筋に鼻を押しつけてくる。
どうやら完全にティナを主と認め、忠誠を誓ったようだ。少女魔王は満足げに微笑みを浮かべ、針金のような毛皮に指を通す。
「よしよし……お前たちは私の忠実なるしもべだ。来るべき時が来れば、魔王軍の尖兵となって人間どもに恐怖をばらまくのだ」
「わおぉんっ」
「だが、いまは時期尚早だ。下手に魔物被害を拡大させ、人間を警戒させるのはまずい。しばらくは森に潜み、力を蓄えておくのだ、わかったな」
二頭の巨大な人狼は、精液まみれの少女を丁重に立たせると、膝を折って恭しく頭を垂れる。

獣を従わせた己の手管にうむうむと頷いていると、ふと視界の端に奇妙なモノが映る。
「……なんだあれは」
それは、二本足でとことこと歩く、ほんの一抱えほどの人形。二頭身にデフォルメされた姿は、どう見ても漆黒のフードを被った眼鏡の魔導少女を模している。
「シュシュ……の、これはゴーレムか」
それは魔導の力によってかりそめの生命を与えられた泥人形。もっと巨大に作れば痛みも怖れも感じない不死の兵士として使うこともできる。
が、これはメッセンジャー仕様のようだ。背中に手紙と思しき巻物を背負っている。ティナはそれをひょいと手にして、くるりと広げる。
「なになに、下記の場所に至急来られたし。破壊神に関する重大な情報が判明し――」
殴り書きの文字はそこまでで途切れている。
常に冷静なシュシュにしては珍しい。よほど急いでいたのか、それとも何かトラブルにでも巻き込まれたというのか。
「ふん……? シュシュのヤツ、また何か企んでるんじゃないだろうな」
前回の魚人の一件といい、あの無表情な眼鏡少女は過分にレスティーナを窮地に追いやっては楽しんでいる節がある。
(シュシュなら魔法で多少のことは切り抜けられるだろう――けど、ウィルが身動きできない状態だし、ううむ、破壊神が絡んでるとあっては、放っておくわけにもいかない、か)
ごぉおおおおおッッッッッ。
すっくと立ち上がったレスティーナの身体が、魔力の炎に包まれる。驚いて飛び退る人狼の目の前で、魔力の炎はザーメンを燃やし尽くすが、ティナの衣服には焦げ一つ付いていない。

「別に、シュシュが心配だとかいうじゃないんだからな! ちょっと様子を覗きに行ってくるだけなんだからな!」
轟っ、と唸りを上げる竜巻が、天然ツンデレ少女魔王の身体を持ち上げる。
唖然とする人狼たちに見送られ、ティナは一直線に町に舞い戻っていった。

3

「で――――」
幼馴染みの伝言に書かれていた場所は、ある「店」だった。
それも歓楽街のど真ん中、見るからに雰囲気のやばそうな、半裸の女性がそこかしこで愛嬌を振りまいている、いわゆるそういう類の店だ。
「この、スケベ男にしか用のない、いかがわしい店のどこに、破壊神の関する重大な情報があるっていうんだ……」
美しい長髪の少女剣士を取り巻くのは、さっきまで半円形の舞台に注目していた店の客。
舞台上ではトップレスの踊り子がたわわな胸を隠すこともなく、レスティーナを物珍しそうに見つめ、うっすら微笑んでいる。
「いかがわしい店じゃねえよ。紳士の集う娯楽の殿堂、『おピンクミュージックホール・ニャンニャン』だぜ、お嬢ちゃん」
ぬうっと背後から現れた大男は、「ニャンニャン」の部分でご丁寧に右手を顔の脇で「にゃん、にゃん」と動かしてみせる。仕草のかわいさに相反して、どこからどう見ても堅気者ではない雰囲気をまとった男だ。
なるほど、舞台上の踊り子の頭には猫の付け耳がついていて、ボンデージ風の衣装といい、尻尾とい

強敵出現にハルカたちは――

ゴアアア

ガン！

外縁通路隔壁突破！

完全に侵入されました！

迎撃！適宜応戦しつつ時間を稼げ

戦闘部隊全班へ通達無理に止めようとするな

施設は作り直せばいいまず死ぬな！

先生！

戻ったか二人とも！

早速だが龍輪功を行ってもらう

え

危険だが他に手がなさそうなのでな

ナリカを

超絶閃忍ベルカ
弓張月「襲来」
MISS BLACK
原作 ORIGINAL アリスソフト
©ALICESOFT
単行本第一巻
好評発売中!
止める方法は…!
ふう…
タカマル…
ううう
ハルカさぁん…
あう!
ううう
出ないよぉ…

すぐ…そこ…っ

ひぎっ

触れるとこまで
きてるのにぃぃっ！

でないっ

でないぃっ

イきたい…っ

っのにぃ!!

——現実的に見て

あのナリカを
武力で止めることは
もう不可能だろう

仮に止められたとしても
どちらか…最悪両方の
「閃忍」を失うことに
なるだろう

そこで龍の者の
もうひとつの力

龍輪功による
浄化法を用いる

「閃忍」に淫力を満たし
ナリカのノロイの力…
瘴気を受け止める

同時に龍の者が
ナリカに龍輪功を行い
浄化・救出する

…ただし相手は
四道封者級
強壮の呪符による
支援はできるが

龍の者の負担は
相当なものに
なるだろう

やります

俺がやらないで——

は…

ハルカ…さん…

ガチッ…

…あっ

ぞく

ぞく

ぞく

ぶる

ぶる

ぶる

やっと見つけたよぅ

い 居たぁ…

ぽっ

ハルカさん
ハルカさぁんっ♥
あっ
なナリカさ――
させて♥
いいっかいだけっ
いっかいだけで
いいからぁ
あう…ぐ
お大き…っ
ひぁあ!?
イく!?
イっちゃうぅ!?

あ――っ♥

ふあぁぁぁあ
でゆうううう
うううううっ♥

ひ!?

つぎ…あぁ

ハルカさん!?

熔けた鉄みたい…っ
お腹が焼ける…！

…なのに
気持ちいい…なんて…

著者近刊
「エンジェルストライカーズ」
絶賛発売中！
マキナを壊す魔性の少女!?
DIVINE 01
ディバインハート
マキナ
～反逆の女神～
第2話 Encounter
小説/NOVEL 黒井弘騎（くろいひろき）
挿絵/ILLUSTRATION KAGEMUSYA

「それで……？　報告はそれだけですか？」
ジオポリス行政区に聳え立つミレニアム日本支部ビル、最上階の一室。豪奢なデスクで片肘を突きながら、男は無感情に言葉を吐き出した。
「失望しましたよ同士。我々は愚かなる今の世界を破壊し、新世界を創造するという崇高な使命を負っているのです。その重責、わかっているのですか？」
「も、申し訳ありません鳴海支部長……」
ミレニアム日本支部長・鳴海――ジオポリスの統括者であり、組織の大幹部でもある初老の男。常に微笑を湛え口調はあくまで紳士的だが、侮蔑混じりに部下を見下す眼光は恐ろしいほどに冷たかった。
「我々ミレニアムのメンバーは、来るべき新世界の支配者に相応しいエリートでなければならない。愚かな旧人類を奴隷とし、その上に立つ千年王国の管理者たる人材が、たかが小娘一人の所在も突き止められないでどうします」
ディバインハートこと来須麻希奈の捕獲は、現在ミレニアムにとって最重要事項だ。だが組織をあげての捜索にもかかわらず僅かの情報も掴めずにいた。
「わ、我々も手を尽くしてはいるのですが、ディバインアークの力が所持者を守っているようで……」
「言い訳は無能のすることです。どうやら貴方はミレニアムの同士として相応しくないようですね」
嘆息し、無造作に男に掌を向ける鳴海。そして、
「な、お、お待ちください鳴海さ……ッ!!」
ヒュンッ！　目に見えない速度で、何かが鳴海の掌から伸びる。そして次の瞬間には、
「ギャアアアアアアアアッ！」
響き渡る断末魔の叫び、噴き上がる鮮血。無能の烙印を押された男の身体は、真っ二つに斬り裂かれていた。
「汚い血だ。やはり無能は中身まで無価値ですね」
男の胴体を跳ね飛ばしたのは、鞭のようにしなる軟体質の触手だった。血染めの触手が再び掌の中に収まり、元の人間の手の形に戻る。己の手で人の生命を奪いながら、微笑の表情は何一つ変わらない。
「創世の宝玉を回収できなければ、総統閣下のご信頼を裏切ることになる……それだけは避けたい」
日本支部の功績は華々しいものだ。数多の犠牲のもとに開発された生体兵器の性能は本部でも高く評価され、組織内でも確固たる地位を築き上げている。
「その上アークの適合者を見つけ出し、神の器までもを完成させたのです。組織の悲願、新世界創世計画はわたしの手で大きく進む……そしてわたしは総統閣下の寵愛を一身に受ける、そのはずでした。が」
創世の宝玉ディバインアークは、ミレニアムの新世界創世計画の中核をなすキーアイテムだ。
その奇跡の力をもってすれば、この世界をリセットし望み通りの新世界を創造することさえできると言う究極のオーパーツ。だが宝玉の力を完全に引き出すことができるのは、運命に選ばれた適合者のみだ。
そして、これも運命だったのだろうか。
世界最高の頭脳の持ち主として組織に拉致された来須博士の娘・麻希奈は、驚異的な適合率を示したのだ。そして麻希奈には宝玉の力を引き出す器として、来須博士直々の改造手術が施されることとなった。アークの力を制御しうる器の完成により、組織の新世界創世計画は大きく進む――はずだった。が、
「ドクター来須、貴方にはしてやられました。そして貴方亡き今も、貴方の置き土産が我々の前に立ちはだかっている。まったく、皮肉な運命だ……」
改造手術の最中、来須博士は造反。脳改造前のディバインギアは脱走し、組織に弓引く反逆者となった。組織の救世主となるはずだった少女は、今や最大の敵としてミレニアムに立ちはだかっているのだ。
この反逆者を捕らえディバインアークを回収することは、組織にとっての急務。だがミレニアムの切り札として開発された改造人間の力は圧倒的であり、組織としても手をこまねいているのが現状だった。
「ですが……フ、フフフフ」
モニターの一つを目にし、鳴海は不敵な笑みを浮かべる。そこには培養槽の中で最終調整を受ける、一人の少女の姿が映し出されていた。
「貴方の置き土産は一つだけではありません。本当に……運命とは皮肉なものですね。フフフフ！」
培養液の中で揺らめく黒い長髪、あどけなさを残しながらも端正に整った美貌。培養槽の中で眠る少女には、どこか麻希奈と同じ面影があった……。

※

市街での戦闘事件は、アカデミーでも大きな話題となっていた。映像記録には何の証拠も残されてはいないが、あれだけ多くの市民を巻き込んだ事件だったのだ。噂にならないほうが不思議だった。
「情報提供者にはシティから褒賞金が出るんだってよ。こりゃ、本当に近くに潜伏してるのかもな」
「未知のテクノロジーで武装した女だって話だけど……バケモノの噂もあるし、少し怖いよなぁ」
噂好きの学生たちの話は、当然、麻希奈本人の耳にも届いていた。
（……流石に、これ以上は隠しきれないか……）
憂慮すべき事態に、当事者の少女は嘆息した。
アークの力による情報操作によって、組織の目を欺いてはいる。だがこのような現状、いつまでも正体を隠し続けていられるものではない。それに――。
（奴らは手段を選ばない。いずれわたしの捜索のために、一般人にまで被害を及ぼしかねないわ）
今は情報に懸賞金をかけている程度だが、いずれ目撃者への尋問や拷問といった強引な方法をとらないとは言いきれない。罪なき人々を巻き込むのだけ

は、絶対に避けなければならなかった。
（潮時……なのかもしれないわね）
麻希奈が市井に潜伏しているのは、ミレニアムの動きを探りながら、本部の所在を掴むためだ。組織の息のかかった企業を潰し、実験台として囚われた人々を助けながら情報収集を続けていた反逆者だったが、未だに有益な情報は得られていない。
そしてそれは敵も同じ――ミレニアムとディバインハートの戦いは、微妙な膠着状態にあるのだ。
（……でも、このままでは……）
こうしている間にも、ミレニアムの計画は水面下で進行している。罪のない人々が、どこかで組織の毒牙にかかっているかもしれないのだ。
「……」
何気なく、麻希奈は窓の外へ目をやった。
抜けるように青い空の下、平穏そのものの空気が街を包んでいる。教室内を見回してみれば、目に入るのは同じく平和そのものの光景。学友たちは楽しげに語らい、今この一瞬の青春を謳歌している。
そしてその中には、麻希奈自身もいるのだ。
（平和、か……）
来須麻希奈として送る日々は、あくまでミレニアムから身を潜めるためのもの。仮初めの日常に過ぎない。
だがそれでも、この街で過ごす日々は、麻希奈にとってはかけがえのないものだった。
もう、自分からは失われてしまった幸福。
だがだからこそ、麻希奈は痛いほど実感していた。
この何気ない日々の尊さを。
人と人が紡ぎ出す絆の暖かさを。
（守りたい……。この平和な日常を、絶対に……）
望むことなく背負わされた使命だった。
少女の双肩には重すぎる、過酷すぎる運命だった。
だが彼女が戦う理由は、それが父から託された使命だから、ではない。
この世界を、かけがえのない平和を、いとおしい人々を守りたい――純真な少女は、自身の意志で、心からそう願っているのだ。
そして、それができるのは自分しかない。ならば、
（多少の危険は、最初から覚悟の上。この状況、逆に考えれば……組織との決着をつける好機！）
何かを決意し、一人席を立とうとする麻希奈。その瞬間、隣席のクラスメートに話しかけられた。
「あ、あのさ来須さん。お昼休み空いてる？　もし良かったらだけど……お昼、一緒にどう？」
「……貴方は」
先日も噂話を振ってきた男子だ。よほど自分に好意をいだいているのだろう。何度も冷たくあしらっているのに、こうして毎日話しかけてくる。
（本当に懲りない人。でも……今でもわたしの話し相手になってくれるのは、この人ぐらいよね）
年頃の男子だ、下心がないではないだろう。だが、こうもアプローチされていれば顔も覚えてしまうし親密にもなってしまう。それに、無邪気で真っ直ぐな彼の性格は、憎めないし嫌いではない。
「あ……。や、やっぱりダメ……かな？」
「……ふふっ」
呆れるぐらいに純粋な好意をぶつけられ、先程まで苦悩していた自分がバカバカしくなる。張り詰めきった何かが緩んで、自然と笑みが零れてしまう。
自分にはまるで似つかわしくない。もう失われたはずの青春の一コマ。だけどそれは今、ここに、確実にある。たとえ仮初めの日常だとしても、この胸の奥に感じる暖かさは、紛れもない本物だ。
（人の心……か。そうよね……父さんが残してくれたこの心があるから……わたし、戦えるんだわ）
自分の戦う理由。いや、戦い続けられる理由。
それを再確認し、麻希奈は小さく頷いた。
「いいわよ。一緒にお昼食べるぐらいなら……」
「え、マジで!?　やった――！」
予想外の返答に、飛び上がるぐらいの勢いで喜びを表す男子生徒。周囲の視線が、二人に集まる。
「ちょっ、こんなことではしゃぎすぎよ！　やめてよ、は、恥ずかしいじゃないの……」
思っていた以上の反応に、顔を俯けて赤らめる。クールな転校生の見せる初心な恥じらいは、普段とのギャップもあっていっそう魅力的だ。
「あ、ごめん来須さん。でも嬉しくって……」
「もう……い、いいわよ。それでどこ行くの？　屋上かしら、それとも校庭？　ベンチもいいか……」
「……来須さんもはしゃいでるじゃん……」
「な、何よ。仕方ないでしょ……初めてなんだし」
予想外の反撃に、いっそう顔を赤らめる麻希奈。
彼女だって、年頃の女の子なのだ。常にクールに振舞ってみせているが、本当は寂しがりで……こんな何気ない青春に、密かに憧れていたのだ。
（いいよね、今日ぐらい……だって）
迷いを振り切った笑顔で、少女は一時の幸福を噛み締める。他愛のない――けれどかけがえのない時間を噛み締めながら、麻希奈は決意を固める。
（これがわたしの、最初で最後の青春なんだから）
この平和を、絶対に壊させはしない。
来須麻希奈は一人の人間として、その心の命ずるままに最後の戦いを決意していた。

※

「あれだけ我々を手こずらせたディバインギアが、こうも簡単に捕獲できるとはな」
「善良な市民の協力には感謝しないとな、ククク」
ミレニアム本社に市民からの通報があったのが数時間前。駆けつけた局員たちに一切抵抗することな

著者近況　タクティクスオウガとモンハンP3の発売日近すぎとか何かの陰謀だと思うんですが。あと冬コミとMTGの世界選手権も近すぎるんですが。こんな熱い冬は久しぶりです。

く、麻希奈はなされるがままに身を委ねた。
そして今、少女は本社ビルのゲートを通り、最上階へのエレベーターに載せられたところだった。
（それはこちらの台詞よ。ミレニアム本社ビル……組織の中枢に、こうも簡単に潜り込めるとはね）
敵地の只中で無数の組織員に囲まれながらも、麻希奈は不敵な笑みを浮かべていた。
虎穴に入らずんば虎子を得ず――自ら所在を敵に知らせ、無抵抗を装い捕まってみせることで、敵陣深くまで潜り込む。それが麻希奈の算段だった。
無論、危険も大きい。だが麻希奈はそれを承知で、勝負に出ることを選んだのだ。少女の決意に最後の一押しをくれたのは、短くとも幸福だった思い出だ。
（守りたい……アカデミーのみんなを、街の人々を。この、平和な世界を……！）
不安がないわけではない。けれど、恐怖はない。
湧き上がる思いが、自分に勇気をくれるから。
父が残してくれた人間の証が――人の心が、熱く燃え上がって力をくれる。
それが何より力強く、そして嬉しい。
（父さん、亜里亜……見守っていて。今日こそ、わたしたちを狂わせた運命に決着をつけるから！）
燃え上がる闘志をぐっと押し殺し、その時を待つ。やがてエレベーターが止まり最上階への扉が開いた。
社長室のデスクには、一人の男が薄ら笑いを浮かべたまま腰掛けていた。
「やぁやぁ、お待ちしていましたよ。ようこそ……ミレニアム日本支部へ」
「……貴方は！」
いやらしい笑みを張りつけたまま、慇懃に語りかける鳴海支部長。その姿を目にした瞬間、麻希奈は全身の細胞が怒りに燃え上がるのを感じた。
「おやおや、覚えておいでしたか。キミのように美しいお嬢さんに覚えていてもらえるとは光栄です」
「当たり前よ、忘れるはず、ないじゃない……」
忘れえぬ記憶が、脳裏の底から蘇る。
スレイブノイドの群れを率い、平和だった来須邸を襲撃した張本人。淫虐の日々の中、何度も自分を辱め――そして、自分を庇った父をその手にかけた憎き相手。その顔を今まで忘れたことはない。
忘れられるはずなど、ない！
「父さんの、亜里亜の、そしてわたし自身の仇！ 会いたかったわ鳴海、わたしの戦いは、貴方に復讐するための戦いでもあるんですもの！」
敵意、殺意、憎悪、怨恨、復讐――湧き上がる暗い感情を、麻希奈は否定しなかった。
それもまた、父が残してくれた『心』だから。
人としての怒りが、戦うための力をくれるから！
「わたしも会いたかったですよ来須麻希奈。どうです、我々のもとに戻る気はありませんか？ 貴方ほどの優秀な方なら、すぐさま大幹部の待遇ですが」
「……ふざけるなッ！」
慇懃無礼な勧誘を、麻希奈は全力で遮った。
元より聞く耳など、あるはずもなかった。
「わたしは貴方を、貴方たちを許さない！ わかっているはずよ……わたしのこの力は、ミレニアムを倒すために父さんが託してくれたものだって!!」
父に託された宝玉が、蒼い輝きを放つ。少女の激情に呼応し、猛々しい光が渦を巻いて荒れ狂う。
「美しい光だ。このまま手に入れたかったが仕方ない……やはり再改造の必要がありそうですね」
パチン、と指を鳴らす鳴海。合図に従い、周囲に控えていた男たちが戦闘形態へと変身していく。
「アークさえ無事なら他の部分がどうなろうが構いません。細切れ肉にしてでも捕らえなさい」
「了解しました鳴海支部長……グオオオオ！」
ケダモノじみた雄叫びとともに、少女に襲いかかるスレイブノイドたち。無数の爪が、牙が、触手が、四方から少女に迫る――が、次の瞬間。
「っはあああああああああああ！」
轟!! 膨れ上がるエネルギーが、巨大な力場となって爆発した。圧倒的な力に呑み込まれ、怪人たちは跡形もなく消し飛ばされていく。爆風の中心には、白銀の鎧を纏った女神だけが立ち尽くしていた。
「ほう、素晴らしい！ アークの力をここまで引き出すことができるとは……これが人の心の力ですか。やはり来須博士の理論は正しかったわけですね」
「……下らない話はそこまでよ。お前に父さんのことを語る資格なんてないわ！」
息を整える時間さえ惜しい。猛る感情の命ずるまま、復讐の女神はアークセイバーを抜き放った。
「終わりよ、鳴海ィィィィィ！」
断罪の光刃が、因縁の怨敵に裁きを下す――刹那、
「ッ!!」
バシィィンッ！ 赤く輝く光の鞭が叩きつけられ、アークセイバーを弾き返した。高エネルギー同士が衝突しあい、バチバチと音を立てて火花を散らす。
（!! 何よこれ……アークセイバーの力を相殺するなんて。まさか、これって……!?）
「ふふ……そうよ。やっぱりお姉ちゃんは賢いね」
素早く距離を取り、状況把握に努めるマキナ。その前に現れたのは、想像だにしなかった人物だ。
「これはアークの力。お姉ちゃんがパパからもらったのと同じ……人を超えた神の力」
クスクスと笑いながら、無造作な足取りで近づく。その姿を目の当たりにし、マキナは声を失った。
「そ、そんな……」
一瞬、己が目を疑ってしまう。けれど見間違えるはずがない、絶対に見間違えるはずなんてない。
あどけなさを残す可愛らしい幼貌に、発達途上の華奢なスタイル。生意気そうな表情と強気に吊り上

著者近刊 『エンジェルストライカーズ』『超昂閃忍ハルカ 堕ちたる上弦 淫辱の刃』『鮮血の聖女エクレア 聖なる執行者』『彗聖天使プリマヴェール Zwei 堕ちる太陽 昇らない月』ほか
好評発売中！

がった目が、まだ子供っぽさの目立つ外見と相まって小悪魔的な魅力を醸し出している。
「久しぶりねお姉ちゃん。ふふ、会いたかったよ」
ツインテールに結われた髪をかきあげ、無邪気に笑う。母親譲りの黒髪は、姉妹揃っての自慢だった。
そう。唯一人の妹を、見間違えるはずがない。
「亜里亜……！」
共に組織に拐かされ、共に淫獄の日々を過ごし——そして、あの日生き別れた唯一人の妹。
目の前の少女は、来須亜里亜に違いなかった。
「うふふふっ。なんて顔してるのよお姉ちゃん？　こうして再会できたのに、嬉しくないの？」
愕然とするマキナに対し、亜里亜はあくまで快活だった。昔と同じく、不器用な姉よりもずっと豊かに感情を示し、屈託のない笑顔で笑いかける。
「わたしは嬉しいよ？　お姉ちゃんとこうしてまた会えて、すごく嬉しいよっ」
（亜里亜……本当に、亜里亜……）
何も変わっていない——あどけない仕草も、無邪気な微笑も、見ているだけで嬉しくなってしまうような豊かな表情も、すべてあの時のまま。
我が侭で負けん気の強いところもあるけれど、本当はすごく寂しがりで甘えん坊で。子犬のようにじゃれついてくる様は、本当に可愛らしかった。
そんな妹を、麻希奈はすごく可愛がっていたし、頼れる姉を、亜里亜はすごく慕っていた。
「良かった……。生きていたのね、亜里亜……！」
組織を脱出して以来、麻希奈は戦いを続けながら、同時に妹の所在も捜索していた。だが情報は少しも手に入らず、最悪の事態を想定せざるをえなかった。それに、自分も同じ境遇に置かれていたからこそわかってしまっていたのだ——あの地獄に取り残され生きていられる可能性など、無に等しいと。
「亜里亜……良かった。本当に、良かった……」
だがこうして、亜里亜は生きていた。最愛の妹との再会に、クールな少女も溢れる涙を抑えられない。
「……良かった、あァ？」
だがその瞬間、亜里亜は相貌を崩した。あどけない美貌が歪み、無邪気な瞳の奥に怖いものが走る。
「そうよね、お姉ちゃんは何も知らないからそんな能天気なこと言えるよね。あれからわたしがどんな目にあったのか……お姉ちゃんに想像できる⁉」
「あ、亜里亜……？」
ギリギリと歯茎を食いしめ、搾り出すように言葉を紡ぐ。実の姉を見つめるその瞳は、狂おしいまでの憎悪と、煮えたぎる嫉妬の炎に燃え盛っていた。
「良いわよねぇお姉ちゃんは！　パパが選んだのはお姉ちゃんだけ、あの日逃げ出せたのはお姉ちゃんだけ！　一人取り残されたわたしは……あれからもずっと、ずっと地獄の中で生きてきたのに！」
細い腕を震わせ、唇を歪ませて語る。叩きつけられる感情の渦に、マキナは言葉を挟めなかった。
「あれからもずっと、毎日毎日気持ち悪い怪物たちに滅茶苦茶にされて。変な機械で身体を弄り回されて男の人たちに代わる代わる犯されて……ああっもう思い出すだけでもおかしくなりそうっ！」
「あ、亜里亜……」
「わかる？　わたしの気持ちわかる？　わからないよね、そうだよねパパに選ばれてこの地獄から逃げ出したお姉ちゃんにはわかるはずないよねッ！」
癇癪を起こしたように叫び続ける亜里亜。
マキナは、彼女に声をかけることができなかった。同じ苦しみを味わい、同じ地獄を知っているからこそ、軽々しく答えることなどできなかった。
「毎日毎日泣き叫んだよ、パパにもお姉ちゃんにも助けを求めて、涙がかれても泣き叫び続けたんだよ！　でもね、でも……ね……」
激情に紡がれる声が一瞬トーンを落とし、それがゆえに恐ろしいほど重く凝り固まった想いを孕む。
「誰もわたしを助けてくれなかった。お姉ちゃんは一人で逃げ出してそれっきり……お姉ちゃんもパパもわたしなんてどうでもよかったんだよね。だからわたしをこの地獄に置き去りにしたんだよね！」
「ち、違う！　亜里亜、それは違うわ！」
父の想いを否定され、マキナはすぐさま反論した。
確かに自分は恨まれても仕方ない。いくら捜索に手を尽くしていたと言っても、結局助けられなかったのは事実なのだから。けれど——。
「父さんは最後まで、亜里亜のこと、ずっと……！」
「変わってないねお姉ちゃんは。優等生でもっともらしいこと言って、頭も良くて綺麗で……だからパパだってお姉ちゃんを選んだんだよね。わたしわかってるもん。わたしなんか誰も必要としてない、だから誰も助けてくれなくて当然なんだよね！」
「あ、亜里亜……！」
我が侭で子供っぽいところもある妹は、一度癇癪を起こしたら全然言うことを聞かない。それは昔と同じだけど、決定的に違うことがある。
少女の中に渦巻く、ドス黒い悪感情。大切な家族に対し、亜里亜は心からの怨嗟を叩きつけていた。
「ククッ、愛が深ければ深いほど、裏切られた絶望はいっそう深く激しいものとなる。残念ですが、彼女にはもう貴方の言葉は通じませんよ」
「……鳴海！　貴方ね、貴方が亜里亜を……！」
いやらしく微笑みながら語る鳴海。従わない者に対する洗脳は組織の常套手段だ。人の心を弄ぶ卑劣なやり口に、マキナは正義の怒りを爆発させた。
「危ないっ鳴海様！」
激情に任せ、再びアークセイバーで斬りかかるディバインハート。だが身を挺して怨敵の盾となった妹を前に、その剣を振り下ろすことはできない。
「っく……亜里亜！　どうしてそんな奴を庇うの、

そいつは父さんの仇なのよ！」
「鳴海様は殺させないよ。誰にも必要とされないわたしを、鳴海様は必要としてくれたんだもん。そして……パパがお姉ちゃんにディバインアークを渡したように、わたしにこれを授けてくれたんだよ！」
見せつけるように、少女は左手に持ったペンダントを高く掲げた。ペンダントの中央では、鮮血色に染まった宝玉が禍々しい輝きを放っている。
「⁉　そ、それは……っく⁉」
キィィィン！　その光を受け、マキナの持つディバインアークも光を放つ。赤と蒼、二つの宝玉は互いに反発し、甲高い不協和音を奏でていた。
「ディバインアークが反応している……な、何⁉　何なの、この禍々しい力は……」
「デモニックアーク……創世の宝玉と対をなすミレニアムの至宝、破滅の宝玉です。我々の同志となってくれた彼女への、わたしからの贈り物ですよ」
戦いを眺めながら、戦場から後退する鳴海。安全な場所から高みの見物を決め込み、慇懃に語る。
（破滅の宝玉……そんなモノが存在したの⁉）
驚愕するマキナ。だが確かに、赤い宝石から感じるのは、ディバインアークと同じぐらいに強大でありながら、真逆の性質を持つ邪悪なエネルギーだ。
創造ではなく破滅をもたらすもう一つのアークの力を、亜里亜はその身に宿していた。
「鳴海様、ありがとうございます。このデモニックアークのおかげで……亜里亜は、うふふふ！」
甘えるような猫撫で声で、鳴海に媚びる亜里亜。無邪気なその仕草とは裏腹、瞳の奥に秘められた狂気は輝きを増す。絶望の淵に沈みきった少女の感情を糧にして、破滅の宝玉がその力を解放する！
「お姉ちゃんを、滅茶苦茶にできるんだもんっ！」
ゴォォッ！　赤い輝きがさらに勢威を増し、溢れ出した光が炎の渦となって荒れ狂う。すべてを呑み込む破滅の炎に包まれて、少女の姿が変わっていく。
「デモニックアークぅ……うふ、うふふふ！　オーバーぁぁ、ドライブぅッ！」
狂喜を含んだ詠唱をキーに、破滅の宝玉が力を解放した。闇の炎に呑み込まれ、可憐な衣服は燃え尽きるように消滅していく。代わりに少女の肌を包み込むのは、艶めかしく輝く漆黒のボディスーツ。ディバインハートのそれと酷似したデザインながら露出度はさらに高く、未発達な乳房や可愛らしいお尻は少しも隠されていない。唯一股間だけはコウモリを意匠した前貼りで隠されているのが、むしろいっそうフェティッシュな淫猥さを醸し出していた。
逆巻く炎が実体と化し、破廉恥極まるインナーの上からアーマーとなって装着されていく。攻撃的なデザインは無機的でありながらひどく禍々しく、まるで悪魔の鎧を思わせた。ダークバイオレットの装甲は破滅の光を浴び、妖しい艶に照り輝いている。
「ふふ……うふふ、あはははは！」
溢れんばかりの力に高揚を抑えきれず、狂気じみた哄笑を上げる亜里亜。首元に埋め込まれたデモニックアークが赤く輝き、素体の隅々にまで破滅のエネルギーを行き渡らせる。血管のようにアーマー内部を通るエネルギー伝達ラインが赤く脈動し、悪魔の鎧をこれ以上ないほど禍々しく彩っていく。
「ふふふふ！　ど～ぉお姉ちゃん……これが生まれ変わったわたしの姿。愛していた家族に捨てられて、絶望の底から蘇った悪魔の姿……」
小悪魔的な、いや悪魔そのものの笑みを浮かべ、小さく舌舐めずりする変身少女。美しかった黒髪は冷たい白銀に染まり、コウモリの羽を思わせるヘッドドレスがツインテールを飾る。
「わたしはアリア……デモニックギア・アリア！」
悪魔の翼そのもののウィングが大きく羽ばたき、腰から伸びる尻尾状のパーツが妖しくうねる。
デモニックギア・アリア――憎悪と嫉妬と絶望の命ずるままに、破滅の力に身を委ねた少女の新たな姿。その禍々しい相貌は、正しく悪魔そのものだ。
「デモニックギア……アリア。そんな……」
「あはははは！　さぁ遊ぼうよお姉ちゃん……昔みたいに一緒にさぁ。せっかく再会できたんだもん、アリア遊びたくってウズウズしてるんだよ！」
愕然とする姉に、デモニックギアは狂笑を上げ襲いかかった。細い指先を包むグラブから伸びた鋭い爪が、破滅のエネルギーを帯びて赤熱する。
「っく⁉」
振り下ろされた一撃を、咄嗟に腕で庇うディバインハート。なんとか攻撃を受け流すも、爪撃を受け止めた銀の篭手は無惨に斬り裂かれていた。
（！　ディバインハートの装甲を一撃で……これが、デモニックアークの力なの⁉）
無敵の装甲を引き裂く圧倒的な攻撃力、強化された動体視力でも追いきれない凄まじいスピード。デモニックギアの性能は、旧世代機であるディバインハートの遥か上を行っていた。
「今のはほんの小手調べ。デモニックギアの力は、わたしの恨みはこんなものじゃないんだからね！」
少女の感情に応え、破滅の宝玉が輝きを増す。悪魔の翼を羽ばたかせ、猛然と攻勢をかけるアリア。
鋭い爪が振り下ろされるたび、悲鳴のような金属音が鳴り響き女神の鎧が斬り裂かれていく。
「や、やめて……やめなさいアリア！　わたしは貴方と戦う気なんてないわ……正気に戻って！」
「あはははは！　ヤだよぉ、だってわたしの望みは唯一つ。わたしを裏切ったお姉ちゃんに、わたしが味わった苦しみを味わわせてあげたいんだもん！」
休む間もなく見舞われる悪魔の爪に、白銀の鎧が少しずつ切り刻まれていく。だが、女神が圧されている理由は単純なスペックの差だけではない。

（こ、このままじゃやられる……でも……！）
マキナは武器を構えることもせず、反撃の機会にもまったく手を出していなかった。ディバインハートには、明らかに交戦の意志がないのだ。
（戦えない……無理よ！　亜里亜を傷つけるなんて……わたし、できないわ！）
当然だ――最愛の妹に、ようやく再会できたのだ。なのに、その妹と剣を交えるなんて、優しく純真な姉にできるはずがなかった。
「ほらほらぁ、どうしたのお姉ちゃん？　少しぐらい反撃しなさいよ、優秀でパパにも認められたお姉ちゃんならわたしを倒すぐらい簡単じゃないの？」
「あ、アリア……お願い、もうやめ……っぐう！」
ドガッ！　防戦一方のディバインハートに、力任せの蹴りを見舞うデモニックギア。防御の薄い下腹部を狙っての重い一撃を加えられ、一瞬呼吸ができなくなる。「く」の字に身体を折り姿勢を崩したところへ、魔少女の猛烈な追撃が襲いかかった。
「そこだぁ……死んじゃえ、ブラッディテイル！」
ブンッ！　大きく腰が捻られ、悪魔の尻尾による強打を叩き込まれる。女神の身体は大きく吹き飛ばされ、思いきり壁に叩きつけられた。
「っぐ、うう！　ア、アリア……っ！」
「あはははっ！　いいじゃん、その声だよその顔なんだよわたしが見たかったのはさぁ！」
苦悶する姉の姿を見つめ、サディスティックな高笑いを上げるアリア。狂気に歪むその双眸は、デモニックアークと同じ真っ赤な血の色に輝いていた。
（あの目……そうか。デモニックアークの力が、アリアの感情にまで影響を及ぼしているのね……！）
ディバインアークが共鳴し、マキナは確信する。
確かに、亜里亜の中には自分への憎悪があるのかもしれない。だがそれをここまで増幅し駆り立てているのは、悪しき宝玉の力に違いない。
脳改造されたスレイブノイドと同じ――亜里亜の心は組織の手によって歪まされ、操られているのだ。
（だったら……わたしの、やるべきことは……！）
小さく息を吸い、目を瞑って精神を集中する。
一瞬の後、再び目を見開いた少女の表情には、これまでのような迷いはなかった。
「アリア……わたしは貴方とは戦いたくない。貴方を傷つけたくなんてない。けれど……」
決意に応え、創世の宝玉が強く輝く。光の刃が突き出し、マキナはアークセイバーを引き抜いた。
「このまま負けるわけにはいかない……そうよ。ようやく再会できた唯一人の妹を救いだす前に、死ぬわけにはいかないわ！」
「は？　わたしを救う⁉　また下らない嘘ばかり……本当はわたしなんてどうでもいいんでしょ。死にたくないからわたしを殺すつもりなんでしょっ！」
姉の熱意にまるで耳を貸さず、増幅された悪感情をそのままぶつけるアリア。その言葉は、たとえ本意でないとしても麻希奈の純心を鋭く抉る。
だが、いやだからこそ。
「アリア……いいわ。来なさい！　わたしが憎いなら……その憎悪のすべてをぶつけてきなさい！」
（助けだしてあげるから……その悪魔の鎧を打ち砕いて、わたしが、今度こそ救ってみせるから！）
心の痛みを噛み締め、戦うための力にする。
これは傷つけるためでなく、救うための戦い。
憎しみではなく、愛するがゆえの戦い。
妹を見つめる眼光は、切ないまでに真摯だった。
「……気に入らない。いっつもお姉ちゃんはそうやっていい子ぶって正論ばかり……あーっもうむかつくむかつくむかつくイライラするうぅウッ！」
そんな真摯な思いに、狂ったように拒絶を示すアリア。癇癪を起こしたように躍り狂う尻尾の先端が引き抜かれ、赤い光を放つ多条鞭へと形を変えた。
「あーもういい、もういいやっ。これで終わりにしてあげる……このデモニックナインテイルで、パパの作ったその鎧ごとズタズタに壊してあげる！」
「……来なさい、アリア！」
女神と悪魔――二つの翼を同時に羽ばたかせながら、二人の変身ヒロインが空中で激突する。
「死んじゃえぇ……デモニックアーク・オーバードライブ！　サウザウンドエクスキューションッ！」
ヒュッ……シュバアアッ！　無数に分かれた鞭の先端が空を裂き、無規則な軌道を描き荒れ狂う。そのすべてが集中し、一斉にマキナに襲いかかった。
「っ……っはあああああ――！」
無規則無軌道回避不可能な狂気の乱打を、しかしマキナは恐れない。眩く輝く光の大剣を両手に構え、荒れ狂うエネルギーの只中に自ら突っ込んでいく。
その瞳が見据えるのは唯一つ――愛する妹を狂気に走らせる、破滅の宝玉の破壊だけ！
「っぐ！　ぐぅ……ああああっ‼」
ビシッ！　バシッ！　ビシィッ！　無数の赤蛇が少女の身体を打ち据える。破滅の力はディバインアークの防御エネルギーさえ食い破り、一撃ごとに少女を守る白銀の鎧はボロボロに破壊されていく。
「っきゃはははは！　気でも狂ったのお姉ちゃん？　防御もせずに飛び込んできてさぁ……耐えられるわけないじゃん、死んじゃうよぉ⁉」
「……っく！　ぐ、う、うあああっ！」
白銀の鎧が砕け散り、光の翼が食い破られる。アーマーだけでなくインナースーツまでもが引き裂かれ、胸部に直撃した一撃に乳房までもを曝け出される。アリアの言葉通りの、命を捨てたかのような無謀な特攻――しかし、マキナは狂ってなどいない。
（負けない、こんなところで負けられない！　だって、わたしは……！）
苦痛に耐えながら、剣を握る手に力を込める。そ

の瞳は真っ直ぐに、愛する妹だけを見つめ続け――、
「アリアぁぁぁぁッ！」
愛する妹を救うため。
ただそのためだけにすべてを投げ打って。
（絶対に……貴方を救ってみせるから!!）
すべての力を、この一撃に賭ける！
「ディバインアーク・フルドライブ！　ジャッジメントスライサ――ッ!!」
眩く輝くディバインアーク。少女の想いを乗せた必殺の一撃が、邪悪な宝玉目がけて振り下ろされる。
「っひ!?」
防御を捨ててまで詰められた至近距離、デモニックギアの運動性能をもってしても避けられない必殺の間合い。愛する妹を救うため、己の命を賭けた捨て身の一撃が、悪魔の縛めを打ち砕く――瞬間。
「うあっ……わ、わたし一体何を……え？　や、な、何するのお姉ちゃん、やめてお姉ちゃん！」
「!?　アリア……正気に戻ったの……!?」
デモニックアークの光が薄まり、狂気に歪んでいた眼光が正気を取り戻す。無邪気な妹の面影を前にし、女神の腕から一瞬力が抜けた。だが、
「……ッくく、あはは！　あひゃはははは！」
その瞬間、アリアはこれまででもっとも邪悪な笑みを浮かべた。一瞬の隙を逃さず、無防備なまま至近距離まで近づいた獲物に、尻尾の一撃を叩き込む。
「引っかかった引っかかったバーカバーカ引っかかったねバーカ！　甘すぎなんだよお姉ちゃんっ！」
「っく……きゃあああああああ――！」
すべての力を振り絞った、満身創痍の状態。アークの加護も鎧の防御もないままに猛烈な攻撃を叩き込まれ、ディバインハートは無惨に空中から叩き落とされた。背中から地面に叩きつけられた衝撃で、辛うじて形状を保っていた鎧もその殆どが砕け散る。ビリビリに破れたインナー一枚纏っただけの姿で、敗北のヒロインは惨めに地面に這い蹲らされた。
「きゃはははは！　好い様ねお姉ちゃん！」
「あうっ、ぐ！　あ、アリア……あぐぅうう！」
ガシッ！　それでも必死で起き上がろうとしたところで、降りてきた悪魔に思いきり肘関節を踏みつけられた。体重を乗せた硬質なブーツでグリグリと踏みにじられ、凄まじい苦痛にマキナは絶叫する。
「ああっ……ぐ、ぐあああああ！」
「んふふふ、いい感触。こりゃ関節までイっちゃったカナ～？　ま、改造人間にとってはこのぐらいどうってことないんだケドさぁ……クフフフ！」
残虐な笑みを浮かべ、姉を踏みしだく魔少女。真っ赤に染まった双眸は、危険な欲情に濡れていた。
「そうよ……私たちはこのぐらいじゃ楽になれない、死なない壊れない解放されない！　教えてあげるわお姉ちゃん……わたしがどれだけ酷いことされたのか、その身体の隅々までたっぷりとねえ！」
「ア、アリア……貴方はどこまで……ああっ!?」
絶体絶命の状況でも、あくまで妹を気遣うマキナ。そんな姉を悠然と見下ろしながら、悪魔の少女はゆっくりと身体を重ねていった。長身の姉を馬乗りになって押さえこむと、剥き出しの乳房に手を伸ばす。
「なっ……アリア!?　や、な、何を……」
「言わなくてもわかってるでしょ？　お姉ちゃんだってわたしと同じことされてたんだからさぁ！」
「……っ。ま、まさか……！」
焦る姉を見下ろし、淫蕩な笑みを浮かべる魔少女。生々しい欲情を突きつけられ、マキナは息を飲んだ。
「覚悟してよね。泣いても叫んでも許さない……滅茶苦茶に犯しまくって壊してあげるから！」
蛇のように舌舐めずりし、熱い欲情の吐息を漏らす。赤く輝く瞳に宿るのは、脳改造されたスレイブノイドと同様の、獣欲に支配された欲望だけだ。
（っ……あ、亜里亜。やっぱり、もう……！）

戦いの中で見せる冷徹さと残虐性、そして獲物に向けられる欲望と肉情。デモニックアークに支配された今の亜里亜は、人の尊厳を捨てた獣も同然だ。
（あぁっ、アリア。こんなの、酷すぎるわ……！）
残酷すぎる運命に、心が引き裂かれそうになる。
血を分けた姉妹は今や最悪の敵同士、そして勝敗はもはや決定的。魔に堕ちた少女は憎悪と欲望の命ずるまま、かつて愛した姉を嬲っていく。
「ふふ、いいわね～お姉ちゃんは。綺麗でカッコよくて、おっぱいもこんなに大きくって。羨ましいなぁ、ムカつくから滅茶苦茶に虐めちゃおっと！」
最初に目をつけられたのは、やはりもっとも目を引く女の部分――未発達な妹のそれと違い、豊かに熟れきったDカップの乳房だ。スーツの裂け目から覗く乳肌は戦闘の疲労でじっとりと汗ばみ、艶めかしく色みを増している。荒い呼吸のたび大きく揺れる美巨乳を、アリアはゆっくりと揉みしだいていく。
「はうっ！　く、あ！　や、やめてアリア……くぅうぅ！　こ、こんなの……おかしい……！」
（そうよ、お、おかしいわ。こんな、女同士で……姉妹で、こ、こんなことするなんて……）
同性、それも血を分けた姉妹で肉体を重ねあうなんて、あまりに異常すぎる。生真面目な少女は背徳感に悶えながら、なんとか妹を拒絶しようとする。
「相変わらず真面目だなぁお姉ちゃんは。どうせ抵抗しても無駄なんだから楽しんだほうがいいのに……知ってるんだよ、おっぱい弱いんでしょ？」
「なっ!?　そ、そんなことない……ん、くぅっ！」
ぎゅ、むにゅっ。真上から体重をかけられて両乳房を押し潰され、五指を埋められて揉み込まれた。
かつての調教で開発された豊満な巨乳は、麻希奈の弱点の一つだ。アーマーどころかスキンスーツさえ失い、何の防御もない剥き身の急所を両方一緒に強く揉まれ、思わず甘い喘ぎが漏れてしまう。

「ふっ……く、うう。や、やめてアリア、くぅ、や、やめなさ……いっ！」
戦闘で火照った乳肌に、グラブの冷たさが心地良い。喘ぎ混じりながらも必死で拒絶するマキナだったが、陵辱の手をはね除ける力は残されていなかった。なんとか身体をくねらせて抵抗だけは示すものの、執拗な責めから逃れることなどできはしない。
「やめないよお姉ちゃん。言ったでしょ、滅茶苦茶に虐めてあげるって。ほぉら次は……ンフフフ！」
「くふあっ……そ、そこ。乳首……んんっ！」
反応して勃起した乳首の先端に人差し指を宛てがわれ、鋭い爪を立てられてクリクリと弄り回された。駆け巡る切ない稲妻に、四肢を痙攣させ感じ入る敗北の女神。肉親同士で淫らな行為に耽っているという背徳感が、いけない快感をいっそう高めていく。
「あはぁっ……お姉ちゃんを好き放題イジメられるなんて夢みたい。ほらぁ、今度はこれでどう⁉」
背徳の愉悦に高ぶっているのは陵辱者も同じだった。嗜虐心の赴くまま、指使いをいっそう激しくするデモニックギア。乳頭を弄り回していた悪魔の爪に力が込められ、そのまま乳首へと突き入れられた。
「ひ、ち、乳首……ひぎ、ぐあああっ！」
ズブ、ズブズブ！ 鋭い鉤爪を乳首に突き立てられ、そのまま乳首全体を潰されながらシゴかれる。駆け巡る虐痛に、少女の身体が大きく仰け反った。
「うぅ～ん、苦痛に悶えるお姉ちゃんの表情とってもステキ！ もっと泣けえ、ほら、ほらほら！」
「ひうっ……ぐ、ああっ！ 痛ぁ……ああぁ！」
ズブ、ギチュ、ズブギチギチ！ 鎧を容易く引き裂くほどの凶器で、剥き出しの性感帯を容赦なく責め立てられる。残虐な乳首責めの激痛に、喉を仰け反らせ絶叫する敗北のヒロイン。人差し指を乳頭に突き刺され、そのまま抜き差しされて乳腺までを虐め抜かれ、涙混じりの絶叫が止められない。
「ひぃ、あ、ああっ！ だめぇ、や、やめてアリア……く、うううっ！ 乳首壊れる……ひぎ、いぃ！」
髪を振り乱して身悶えるたび、Dカップの巨乳がぶるんぶるんと揺れ躍る。豊満さを見せつけるかのような淫乳に、陵辱者は嫉妬混じりの視線を送った。
「ムカつくなぁ、大きなおっぱい見せつけて……でもこれももうアリアの玩具なんだよね、クフフ！」
面白半分にカエルを握り潰す子供の残虐さで、無邪気に微笑む幼き悪魔。人差し指での乳腺ピストンは続けながら、掌全体で巨乳を覆うようにしながら強く揉み込んでいく。
「や……お、おっぱいまで……はぁん、くぅん！」
むにゅ、むにゅ、にゅむり。柔らかな乳肌にグラブが食い込まされ、真上から押し潰すようにしながら揉みまくられる。乳首での痛みとのギャップで余計に快感が際立ち、甘い喘ぎを零してしまう。
「わぁ、柔らかぁい。組織の男どもが夢中になるわけだ……その上感度もすごいなんてとんでもない淫乱おっぱいだね、恥ずかしくないのお姉ちゃん？」
「い、いやっ……そんな。い、言わないでアリア……あはぁぁ、も、揉むの強い……ふぁ、あぁぁ！」
残虐な乳首虐めで被虐の性を煽られながら、いやらしい詰問（きつもん）で羞恥心までもを刺激され、被虐の官能を否応なく高ぶらされる。同時に優しく乳房を揉みしだかれて、甘い乳悦に追い詰められた。妹の指に弄ばれるたび、抑えきれず喘ぎが漏れてしまう。
（ううっ……ど、どうして？ こんな……たったこれだけで、こんなに感じてしまうなんて……）
嫉妬心ゆえの執拗さに、憎悪を剥き出しにした残虐性。アリアの責めは確かに苛烈だが、行為自体は単純な愛撫に過ぎない。いくら弱いと言っても、乳房だけでこんなにも感じるなんて、異常だった。
「逆らえないでしょ？ お姉ちゃんのデータは全部インプットしてあるからね～、どこが弱いのか、どうすれば感じちゃうか、全部わかってるんだから」
困惑する姉を見下ろし、勝ち誇った笑みを浮かべる。赤い悪魔の瞳には、計算高い光が輝いていた。
誘拐されて以来、麻希奈は組織の構成員たちの慰み者とされてきた。恥辱の記録はデータ化され、デモニックギアにインプットされている。マキナの性的弱点は、すべてアリアに見透かされているのだ。
「なっ……そ、そんな。いやっ……う、嘘……！」
（い、いやよ……わ、わたしの全部……恥ずかしいところ全部、亜里亜に知られてしまったなんて！）
記憶から消し去りたいほどの痴態の数々を、すべて妹に知られている。ショックにも似たたまらない恥ずかしさに、顔を赤らめる純情少女。背けられた視線を執拗に追い、アリアは満面の笑みで囁く。
「ううん、嘘じゃないよ。お姉ちゃん美人だから大変だったよね～、毎日毎日何十人の男たちに犯されて。でもさ、最初は抵抗してもすぐに快楽慣れして、どんどん淫乱な身体になっていったよね♪」
「！ い、いや……言わないで。そ、そんな……」
忘れたくても忘れられない淫辱の記憶を、実の妹に穿り返される。たまらない恥辱と背徳感に、マキナは顔を真っ赤にして恥じ入った。
「いつもクールでカッコイイのに、責められると弱くてさ。こうして乳首弄られながらおっぱい揉まれると……ふふ、メロメロに蕩けて逆らえなくなっちゃうんでしょ淫乱な正義の変身ヒロインさん！」
凛々しかった姉が狼狽する姿が楽しくて、アリアは容赦なく責め手を加速させていく。人差し指と親指とでコリコリと乳首をシゴきながら、おっぱい全体を潰すように捏ね回す――マキナが、一番弱い乳責めだ。
「うあぁっ、だ、だめ、だめぇ！ そ、それダメなの、乳首とおっぱい一緒は……ふぁ、あぁぁっ！」
たまらない乳悦に、喉を仰け反らせ喘ぎ悶える淫

DIVINE
01

乱ヒロイン。いつも気丈だった姉は、幼い妹にあっけなく手玉に取られていた。
「ふふ、本当に敏感なんだねお姉ちゃんって。このままおっぱいだけでイカせちゃおっかなぁ？」
「くっ……そ、そんな。やめてアリア……そんな、おっぱいだけでなんて……あ、ああ――っ！」
ちゅ、ちゅっ。勃起しきった乳首にキスを浴びせられ、優しく啄まれた。これまで残虐に痛めつけられていた反動で、純粋な快感がたまらない。しなやかな美脚を痙攣させ、マキナは甘い乳悦に身悶えた。
「ふふっ、本当におっぱい弱いんだね。いいわぁ、お姉ちゃんの淫乱おっぱい、このままアリアのものにしてあげる……ちゅ、んちゅ、じゅるるるっ」
「あ、ああっ！　らめ、乳首そんなに吸っちゃ……キスしながらおっぱい揉むのだめだめぇ～！」
長髪を振り乱し、狂いそうなほどの乳悦に悶え狂う変身ヒロイン。たっぷりと唾液を塗り込まれ、傷口を労るように舌先で舐められるのが心地良くてたまらない。感じはじめたところでおっぱい全体を揉み込まれ、乳房全体が溶けそうなほど感じてしまう。
自身の欲望を充足させるために行う男の陵辱とはまるで違う。快感で屈服させることだけが目的の、同性だからこそできるねちっこい快楽責め。快感だけが際立って、どこにも抵抗のチャンスがない。
（だめっ、全然抵抗できない。このままじゃ、本当におっぱいだけでイカされちゃうわ……！）
ゾクゾクと駆け巡る、絶頂への予感が止められない。子宮は痛いほどに軋みまくり、股間を守るインナーはべっとりと愛液を吸って変色していた。
「い、いやっ……イク！　お、おっぱいだけでイカされちゃう、ア、アリアにイカされ……っ？」
もう限界だ――意識が消えそうになった瞬間、しかし悪魔の少女は狡猾にも責め手を止めていた。
「えっ……あ、は。はぁ、はぁ、はぁ……」
（うっ……ど、どうして？　どうしてやめ……）
荒く息をつきながら、涙に潤む目で陵辱者を見上げる。少女の心に去来するのは、責めが中断された安堵だけではなかった。
「物欲しそうな目しちゃって。本当はおっぱいだけでイカせて欲しかったんでしょ、や～らし～！」
「……ぁっ……そ、そんな……違……！」
恥ずかしすぎる指摘に、耳まで赤く染めて恥じらう純情少女。だがか細い拒絶の言葉とは正反対に、肉体の反応は雄弁だった。快楽に従順な女体はこれまでの愛撫でたっぷりと蕩け、見るもあさましく発情しきってしまっている。大好きなやり方でたっぷりと可愛がられた淫乳は汗にまみれて大きく揺れまくり、桜色の乳首を切なげに勃起させて快楽にうち震えていた。愛液にまみれたインナー越しには、物欲しげにヒクつく秘唇の赤さが透けてしまっている。
「ククク、こんなに濡らしちゃって、何が違うって言うのよ。わたし全部知ってるんだよ、お姉ちゃんがどれだけ変態で淫乱なのか。例えば……ほらぁ」
「はぁ、はぁ、はぁ……あ。や……な、何を……」
生殺しのままの胸は残酷にも放置し、アリアは馬乗りのまま上体を倒し唇同士を至近させた。過去の恥辱を煽られ困惑する姉に対しいやらしく舌舐めずりすると、アリアは強引に姉の唇を奪った。
「うむぅ……う、ううっ⁉　や、アリア……な、何を……んむ、ん、ちゅっ！」
（そ、そんな……キスなんて。女の子同士で……姉妹同士でキスなんて⁉）
予想だにしていなかった行為にマキナは驚愕した。咄嗟に顔を背けキスから逃げようとするも、それ以上の速さで唇を押しつけられ逃がしてくれない。
「逃がさないよお姉ちゃん……ほらぁ。んむ、んちゅ、くちゅる……じゅちゅ」
「い、いやっ……あむ。んちゅ、ん……んんぅ！」
必死で唇を閉じようとしても、イキかけの身体では脱力して逆らえない。舌先で強引に唇門をこじ開けられた。舌を突っ込まれて唾液を流し込まれる。
「ふあ……こく、んむ、ちゅ！　や、やめてアリア……ちゅ、んむ。や、キスはいや……んんうっ！」
同性、それも肉親同士での接吻。考えたことさえない背徳行為を、生真面目な少女は必死に拒絶しようとした。だが強く唇を吸われ口内を可愛がられると、なぜだか力が抜けて抵抗できなくなってしまう。
「はあぁっ……ちゅ、ん、んんっ。ど、どうして……はぁ、んむ。んちゅ……んうぅぅ」
「お姉ちゃん堅物に見えて結構ロマンチストだもんね。キスされながら犯されるの弱いんだよね？」
「な⁉　な、何を馬鹿なこと……んむ、ちゅ、ん！」
否定などまるで無視され、何度も強く唇を吸われ舌先で口内をピストンされる。まるで身に覚えのない指摘に顔を赤らめ拒絶するも、しかし激しいキスを繰り返されるたび確実に意識が混濁していく。
（そ、そんな……嘘。キスだけで、こんな……！）
胸を弄られて屈服させられてしまうのなら、まだわかる。悔しいし恥ずかしいけど、豊満な乳房は最大の弱点だ。決して癒えない過去の傷跡を執拗に穿り返されては、抵抗できなくなっても無理はない。
だが、これは予想外だった。口づけだけで力を奪われ、こんなにも感じさせられてしまうなんて――。
「そ、そんな……こんなの嘘……んちゅ、ん、んんっ。こんなのおかしいわ、キ、キスだけでこんな……ふあぁ、ア、アリア……んむぅ、ん、んんっ！」
背徳感に怯えながらも、力強く唇を吸われると意識がメロメロになってしまう。ジュボジュボと舌を突き入れられれば無意識のうちに反応してしまい、自ら唇を押しつけていっそうの寵愛を求めてしまう。
「ふふ、全部記録に残ってるんだから。どんな下衆相手でもこうしてキスされるだけでメロメロになっ

もうッ
やめろォォ!!
ひっ
あぁぁ
イ…♥
あぁ
またあぁ
出て…るっ
膣内でええ
女スパイが捕らわれて―
いやあッ
や…ああぁ
あぁぁぁ
CodeName:BlackLily
コードネーム・ブラックリリィ
恥辱の潜入作戦
漫画 COMIC ぱふぇ

まだ休むんじゃねーぞ
そら！次ィッ!!
ホラホラ誰の差し金で来たんだよ!?ブラックリリィさんよ
ああッもうやめろォ！これ以上されたらぁ
ひゃうンくうぅんおかしくっおかしくなっちゃうぅぅぅ
あ…あまたぁっ
女スパイが可愛いこと言うねぇ♥
そそのワインは!!
やめ…やめろ！
やめてええぇぇ

媚薬ワインがよく効くようにすり込んでやるぜ♪
やあぁぁだめえっんんン♥
胸え…揉んじゃあぁン♥
嫌なわりには感じまくってるくせによっ!!
く…そぉ声が出ちゃうふぁ
ひン♥
イ…ク
うは♪イキまくってやがるぜ
おっと俺も限界だ♥
だめえええまたイク…
こんなやつ嫌なのにっ
やあぁっ嫌なの…にイいい――♥

き 貴様ら後で絶対…
はー…はー…
殺して…やるから…な…
ずるんっ
ドクッ
おお怖い怖い♪
ああっあ…ああああ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
オラァ！やってみろよハハハハ
やぁぁッもう…犯さ…ないでえぇぇっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ

ホラ　手がお留守だぜ
ひあぁぁ
いや…ぁ熱…いぃ
くぅンっ
またイクっイクのぉ♥
気持ち…良ふぎへぇぁぁ♥
止まらないぃ♥
イクのぉ止まらないのぉぉぉ♥

おか…しい
あれだけ
イッたのに

まだ…
切ない…の

お前の素性
組織・任務の
全てを だ

いや…
いやあぁ
それだけは…
できな…いっ

早く解毒剤を
飲まねば
その疼きは
止まらぬぞ

さぁ素直に
白状したまえ

貴様になど
屈して…
たまる…
か…

あぁ
誰か早く…

助けに
来て…

もう
これ以上

……

二次元
ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

筆狩師エリナ
奴隷人形の学園
第二話 裏切りの再会
母の謎を追って聖天学園に潜入した
エリナ&まどかだが…!?
小説 NOVEL 筑摩十幸
挿絵 ILLUSTRATION こうきくう

「それにしても広い学園ですね」
お昼の休憩時間、二人は校舎屋上に来ていた。混雑する食堂を避けて、サンドイッチとジュースだけの質素なランチだ。
人形の流れ着いた海岸の潮流や、聖天宗の動きから淡島にある『聖天学園』が捜査線上に浮かんだ。しかし政治力を持つ聖天宗に対してAAAの部隊を出動させるには証拠不足だった。
そこでエリナとまどかが転校生として潜入捜査することになった。エリナたちの顔は割れていたが、虎穴に入らずんば虎児を得ず、刃々牙を挑発する意味合いもあった。そういう意味では囮とも言える危険な捜査だが、エリナ自身がやると言って聞かないので真二郎も渋々許可するしかなかった。
聖天学園は信者の子供たちが通う小学校から大学まで一貫した宗教学校である。外部とは一切隔絶され、週に一度の連絡船以外交通手段もない。
白亜の校舎が整然と並ぶ様は巨大マンションを思わせる壮観な眺めだ。面積は東京ドーム四個分、職員含めて一万人を超える学園だけに、一つの小都市と言っても過言ではないだろう。
転校二日目、それとなく校内を探ってはみたが、今のところ手掛かりは見つかっていない。
「……おかしいわ」
人影まばらな校庭を見つめながらエリナは眉根を寄せる。
「エリナさん、何か気づいたことでも？」
「どうしてこの岬エリナが転校してきたっていうのに、なんのリアクションもないのよっ！」
学園の制服に身を包んだエリナは、私服とは違った少女らしい魅力があった。白のブレザーは宗教学校らしく飾りもない質素な感じだが、エリナが着るとなぜか一流ブランドのように見えてくる。確かに普通の学校なら人だかりができているだろう。
「そ、それはまあ、宗教学校ですからファッションとか芸能界とか興味がないんじゃないですか。ほら、テレビもないし携帯も通じないくらいですし……」
対してまどかはいかにもおろしたてを着た新入生のような硬さがあり、あか抜けない印象。初々しい魅力だと言えなくもないけれど……。
「お馬鹿！　刃々牙のことよ」
「ご、ごめんなふぁいぃ～～」
ホッペタをぎゅーっと左右に引っ張られ、まどかは涙目になる。
「それになんでキュウリなんか入ってんの！」
イライラした様子で、嫌いなキュウリを自分のサンドイッチから抜き取り、まどかのサンドイッチに差し込んでくる。
「やめてくださいよ！　キュウリだらけじゃないですか！」
「私の食べかけなんてプレミアものでしょ。食べなさい！」
（とほほ……エリナさんと組んで捜査なんてできそうにないです……）
キュウリサンドをかじりながら途方に暮れていると……。
「ちょっと仕掛けてみるか」
さっさと昼食を片づけたエリナは胸ポケットから筆を取り出すと、スッと床に一筆走らせた。
「クォオオオンッ！」
するとあの狐の絵が浮かび上がってきた。狐は辺りをキョロキョロした後、なぜかまどかのほうに近づいてくる。
「わぁ、狐さん。これが絵だなんて、見れば見るほど不思議ですね」
「ちょっと触らないで。噛みつかれるわよ」
エリナは止めるのだがまどかはかまわず狐の頭をなで始める。
「可愛いですねぇ。名前はなんていうんですか？」
狐のほうも細い眼をさらに細めて気持ちよさそうな顔をしている。触った感覚はまるでないけれど、そんな反応を見ればまどかも嬉しくなる。
「……墨什よ」
「ボクジュウさんですか。よろしくお願いしますね」
まどかが呼びかけると、墨什はクンクンと鼻を鳴らして頭を擦り寄せる。墨什もまどかのことが気に入ったようで、まるで飼い慣らされたペットのよう。
ハッハッと鼻息荒く、頭をまどかの脚の間にねじ込んでくる。
「きゃ、くすぐったいです、墨什さん、あん」
「コラ、墨什！　グズグズしないで行きなさいっ！」
焦れたエリナが怒鳴ると、霊獣はピクンと耳を立てた後、一本の矢のように姿を変え、もの凄い速さでどこかへ飛んでいった。
「頑張ってくださいね……って、きゃあ、エリナさん！　手が、服がぁ！」
気がつくとあちこち墨で真っ黒に汚れていた。
「もとは墨なんだからあたりまえでしょ」
「そんなぁ、先に言ってくださいよぉ」
「もう、しょうがないわね。来なさい！」
襟首をガッシリつかまれ、子猫を運ぶようにまどかは連行されていく。
聖天学園寮のお風呂は天然温泉で二十四時間使い放題である。授業をサボることになったが、どのみちあの格好では出られないし、仕方ないだろう。
「きゃあン、いた、イタイです……もっと……あうん、優しくしてくださいぃ……あきゃん」
「暴れないのっ！　ほれほれっ！」
泡まみれで転がるまどかに、エリナが洗濯洗剤をぶっかけて棒ずりでゴシゴシ洗う。
「だいたいいいみたいね」

仕上げにバケツでお湯をぶっかけると、水死体のようなまどかが全裸でタイルの床にぐったり突っ伏している。
「うう……なんでこうなるの……？」
涙目になって赤くなってヒリヒリする肌をさする。因幡の白ウサギの心境だ。
「墨什が戻るまでやることもないし、クリーニングが終わるまで、のんびりしましょ。ここの温泉はお肌にもいいらしいわ」
バスタオルを巻きつけただけの裸身で、エリナは少しも悪びれた様子がない。見事なバストを反り返らせて笑っている。
「お肌もうガサガサですよぉ……は、はうぁっ！」
呆れつつもバスタオルの上からもわかるスタイルの良さには溜め息が漏れる。エリナの美しさに圧倒されて、何も言えなくなってしまう。
「ン……？」
と、エリナの表情から笑みが消える。まどかの胸に大きな手術痕を見つけたのだ。
「あ、これですか……私、幼い頃刃々牙に襲われて、その時のキズなんです」
「……刃々牙に？　いつ？」
「八年前です。そのときに両親も……それで私はAAAを志願したんです」
「八年前……」
キズは胸だけではなく、よく見れば腕や脚にも縫合の痕があった。それが相当な深手であったろうことは想像に難くない。
「……私も髪を洗うわ。手伝って頂戴」
棒ずりを放り投げて、エリナはお風呂椅子にドンッと腰を下ろす。長い黒髪は川が流れるように白い肌に巻きついている。
「は、はい」
確かにこれだけ長ければ、洗うだけで一苦労だろう。まどかは美術品に触れるような心境で、艶やかな黒髪にお湯をかけていく。次に専用のシャンプーを手にとってモコモコと泡立てた。
「不思議ね……」
「はい？」
「お母様と私にしかなつかなかったのよ、あの子」
「あ……墨什さんのことですか」
「それがあなたにあんなに……」
その表情はこれまで見たことがない穏やかな、それでいてちょっぴり寂しそうな顔だった。
「エヘヘ。昔から動物には好かれるたちで」
一本一本丁寧に髪を洗っていく。滑らかな指通りは素晴らしく、洗っているまどかのほうが気持ちよくなって癒やされるような気がした。
「墨什はお母様から引き継いだ霊獣なの」
「そう言えばエリナさんのお母様も筆狩師だったんですね。ところであのぉ、今さらなんですが筆狩師ってどういうものなんでしょう？」
お湯をかけると髪はそれ自体輝いているかのように神秘的な艶を帯びる。
すべての光を吸い込む深い黒さをもちながら、同時に目映いほどの艶も持つ。何重にも塗り重ねられた高級な漆器を見るようだ。
「私の一族は髪に霊力が宿るの。術者は自らの髪を筆にして退魔の武具とする。それが雪風流退魔術」
「なるほど、髪が力の根源なんですね」
エリナの黒髪をしげしげと見つめる。ただ美しいだけではなく、強力な霊気を感じる。それはおそらく何代にも渡って培われた、退魔の血のなせる業なのだろう。触れているだけでまどかも身体に力が湧いてくるようだ。
「そうよ。髪は女の命と言うけど、私にとっては命以上に大切なのよ」
スーパーロングを少し自慢げに梳き上げる。クセッ毛のまどかには絹糸のような光沢と柔らかさを持つ黒髪は羨ましいの一言に尽きる。
「ありがとう。もう、いいわ」
スッと立ち上がり、エリナは頭を振った。軽く振っただけなのに髪がフワッと舞うように広がり、青白い燐光が根元から先端に向かって波紋のように次々と拡がっていく。
キューティクルなどという言葉では説明のつかない神秘的な輝きで、一瞬髪全体が一つの流体なのではないかと思えるほど。
やがて扇状に波打っていた髪が再び一本にまとまって降りた時には、完璧に乾いてサラサラになっていた。
「あ、身体は洗わなくていいんですか。お背中流しますよ」
「い、いいのよ。夜一人で洗うから」
珍しくドギマギした様子で答え、エリナは浴室から出ていった。

その日の夜。
エリナはなぜかまどかにベッドの使用を許可してくれた。
（あのエリナさんと同じベッドで寝るなんて……！）
ちょっぴりワクワクしながら並んでベッドに入る。同じ布団から美少女の温もりと匂いがふんわりと漂ってきて、同性なのにドキドキしてしまう。
（まさか……レズなんてことは……）
モデルの世界ではそんなことも日常茶飯事だと聞く。（性格は悪いが）美しいエリナに迫られたどうしよう……などと考えていると。
「ぐぅ……ぐぅ……」
いつも通りの寝付きの良さで、エリナは速攻爆睡していた。

「なんだ……心配して損しちゃった」
拍子抜けした気分でウトウトしていると……。
ドカッ！
「きゃあっ！」
いきなり顔面にエリナの裏拳が直撃！
「な、なにするんですか、エリナさん！」
鼻柱を押さえてまどかは起き上がったが、エリナは相変わらず熟睡中。裏拳はたまたま手が当たっただけだったらしい。
「あうう。エリナさん……寝ててもヒドイ人です」
恨みがましく呟くと……。
「なんですってぇっ！」
布団を天井近くまではね上げて、いきなり起き上がるエリナ。
「ひぃぃっ！　ごめんなさいぃっ」
殺されるのではないかと、真っ青になっていると、
「……ムニャ……洗濯板……ムニャ……」
パタンと仰向けにひっくり返り、寝息を立て始める。どうやらただの寝言だったようだ。
「はあ、驚いた。エリナさん、こんな寝相悪かったなんて……てかしれっと悪口言われたような……」
一緒に寝ない理由はひょっとしたらコレだったのか？　とにかく眠気も吹っ飛んでしまい、まどかはベッドから這い出し、手洗いに向かう。
「ハア……いい人なのか悪い人なのか、だんだんわからなくなってきました」
エリナには振り回されっぱなしで、疲れが肩にのしかかる。寝ぼけたまま便座に腰掛けてぼーっとしていると……。
「大変そうだな」
「ええ、まあ。って誰ですかっ⁉」
声をかけられて顔を上げると、トイレの窓の向こうに墨什がいた。偵察から戻ってきたのだろう。
「わっ、狐さん！　痴漢かと思いましたよ」
慌ててパンティを引き上げ、股間を閉じる。
「失敬だな。俺はロリコンだが痴漢ではない」
「どっちも危ないですよぉ。てか喋れたんですか？」
驚いている間に、墨什は閉じたままの窓からスルリとトイレの中に入ってきた。もともと絵だから厚みはなく、どこへでも出入り自由なのだ。
「当たり前だ。俺様はエリート。そこらの使い魔とはワケが違う」
尻尾を自慢げに揺らす墨什。飼い主に似たのか、なんだかとても偉そうである。
「こんな遅くまで調査お疲れ様です。エリナさん起こしてきましょうか？」
「やめとけ。死にたくなかったらな」
本気とも冗談ともつかないことを言う。確かにあの寝相の悪さと性格からすれば、何が起きても不思議ではない……。
「はあ、ところであのぉ……エリナさんってどういう方なんでしょう。どうお付きあいすればいいのか全然わからなくて……」
「どうって、見たまんまのわかりやすい人間だぞ。甘えん坊で、寂しがり屋で……おまけにスゲエファザコンなんだよ」
「？？？」
あまりにもイメージとかけ離れた言葉を並べられ、一瞬思考がフリーズした。文字通り狐につままれたような心境だ。
「え、でも司令とは仲悪そうじゃないですか？」
「あれは照れ隠しみたいなモノだ。母親を取り戻せば神武家との確執も消えて、また家族三人で暮らせる、エリナはそう願っているんだ」
「家族……そうだったんですか……」
お嬢様の意外な一面を知らされてまどかキュンと胸が切なくなる。身寄りのないまどかにも親と離れて暮らすエリナの寂しさはわかる気がした。
「那海は美しく強く、退魔の腕前もエリナ以上だった。本当に惜しいことをした」
「そんなにすごかったんですか。それがどうして？」
「ん……それがな……」
それまでの軽妙な口ぶりから一転、霊獣は重々しく口を開いた……。

エリナは父の膝の上に乗ったまま、車外の景色を眺めていた。大好きな父の膝の上が、エリナのお気に入りのポジションである。
「那海……さすがに……実戦は早いと……」
「この子も……いずれ退魔の道を歩む……幼いうちから……鍛える必要があるの……私もそう……」
父と母は何やら難しいお話をしているようだが、エリナは外の景色に夢中だった。
たなびく雲の向こうに赤い月が出ていた。血のようにまっ赤な。それが凶兆であることを幼いエリナは知らない。
そこからしばらくエリナの記憶は消失している。眠っていたのか気を失っていたのか。気づいた時には、辺りは火の海だった。そして自分を抱いている父も重傷を負っているようだった。
「パパ！　どうしたの？　ママはどこ？」
父の腕の中で頭を巡らせると、燃え盛る車の反対側に母の姿を見つけた。
「ママ！」
千早がボロボロに引き裂かれ、乳房や太腿が露出している。白い肌の上を鮮血が赤い筋となって流れ落ちていく。
「ググググッ」
グッタリした母を背後から巨大な黒い影が抱きかかえていた。頭には二本の角が突き出し、耳まで裂けた口からは鋭い牙がのぞく。血走った眼球が爛々と輝き、捕えた那海を値踏みするように視線を這わ

著者近刊　『沙織 侍姫秘録』『黒薔薇の騎士Ⅱ』『奴隷聖徒会長ヒカル2』『淫堕の姫騎士ジャンヌⅡ』『ヴァンパイアスレイブ』『白百合の剣士Ⅱ』『借金お嬢クリス3』『令嬢完全調教』『牝妻蜜狐倶楽部』　好評発売中！

せ、ごつい掌が乳房をいやらしくまさぐっている。
「くっ……那海をはなせっ！」
深手を負った真二郎が血を吐くように声を絞り出す。しかし父がすでに闘える状態でないことは、幼いエリナにもわかった。
「あなた……逃げて……」
「那海っ！　そんな、お前を残していけるものか」
「お願い……エリナを……守って……」
それが母の残した最後の言葉だった。
グワッ！　ズドォオオオンッ！
那海の黒髪が逆立ち、それはそのまま灼熱の火柱に変わる。
「グゥオオオオオッ！」
母もろとも炎に包まれた怪物が凄まじい絶叫を放った。
「ママ！　ママァッ！」
母の姿が小さくなり急速に遠ざかっていく。どんなに手を伸ばして、もう届かない。

「……ママ」
エリナはゆっくりと瞼を押し開ける。明け方らしく、窓の外から淡いオレンジ色の光が差し込んでいる。あの夢を見るのは久しぶりだった。そしてそんな日は一日中気分が重くなるのが常だが……。
ふと視線を落とすと、まどかがカーペットの上に子猫のように丸まっていた。
「なんで床で寝てるのよ」
愛らしい寝顔を見ているとなんだかおかしくなってくる。柔らかな頬をツンツンと突くと、まどかは迷惑そうに顔をしかめ、くるんと寝返りを打つ。
「フッ。変な子」
エリナは微笑み、少女に布団をかけてやった。
「オイ。エリナ」
と、物陰から墨什が姿を現す。気配を消している時はエリナですらわかりにくい。
「あら、戻っていたの？」
「ああ、いいネタだぞ」
尻尾を振りながら、自慢げに鼻を鳴らした。

次の日の放課後、エリナたちはいつも通り屋上で作戦会議をしていた。
「墨什が斑目を見かけたのは西校舎の裏辺りらしいけど、目立った施設はある？」
「礼拝堂があります。でも礼拝堂にしては電力消費量が大きいですね。怪しいかも」
モバイルを操り、まどかが素早く答えを返してきた。さすがは天才ハッカー、すでに学園のデータベースに侵入していたのだ。
「へえ、少しは役に立つじゃない」
エリナが感心していると――――。
「おい」
気がつくと五人ほどの男子生徒が昇降口に立っていた。学園には似合わないガラの悪そうな連中だ。
「誰よ、あなたたち」
まどかをかばうようにして一歩前に出る。腰に片手を当てピンと背筋を伸ばした姿勢は凛々しく、男たちを前にしてまったく怯まない。
「風紀委員の鬼塚だ。ここで何をしてるんだ」
精悍な顔をした一番背の高い生徒がギロリと見下ろしてくる。皆かなり鍛えているらしく、制服の上からも筋骨隆々とした体躯が見て取れた。
「ハ？　何をしようと私の勝手でしょ」
睨みあいながら不良少年たちを観察する。多少は鍛えているようだが、一流の退魔師であるエリナにとって、人間の生徒など何人いようと脅威ではない。
問題は彼らの目的だ。刃々牙と関係があるのか、それとも単純にエリナたちを気に入らないのか。
「こそこそ嗅ぎ回るネズミを退治しろと言われてなぁ、ちょいと痛い眼に遭ってもらうぜ」
少年たちが手に武器を握る。ある者はナイフをちらつかせ、ある者はチェーンを振り回す。
「なるほど。あくまで生徒同士の揉め事として片づけたいわけね」
「お前ら行けっ！」
鬼塚以外の四人が一斉に飛びかかる。凶器が銀色の閃光を放って、美少女の肌を食い破らんとする。
「遅いっ」
狂刃が交錯し走り抜けたあとに、エリナの姿はすでにない。黒髪を翼のようにたなびかせて、空中に高々とジャンプしていた。その姿は少年たちには天使のように映っただろう。ただしその天使は凶暴だ。
「っはぁぁっ！」
そのまま身体を回転させ、水平に広がった脚線美が、コンパスの描くような精密な真円軌道を空中に生み出す。
ギュガァァッ！　ズダダダンッ！
「ぐはぁっ！」
狙い澄ました蹴撃に側頭部と顎をクリーンヒットされ、少年たちの身体がぐらっと傾ぐ。
「てぇいっ！」
さらに着地と同時に地を這うような脚払い。頭を硬い床に打ちつけて、少年たちは昏倒した。
「くっ、この！　舐めるなよっ」
仲間を瞬殺され、鬼塚が怒り狂って突っ込んでくる。だがそれは勢い頼みの無茶な突撃。
「フンッ。醜いわねっ！」
ノーモーションで繰り出すパンプスのつま先が、踏み込んだ鬼塚の膝をトンッと突いた。
「うお！」
それだけで大きく体勢を崩す風紀委員の首筋に、鋭い手刀が振り下ろされる。
鬼塚はカエルが潰れたような呻き声を上げ、無様

に屋上の床に突っ伏した。
「はわぁ、いつもながら鮮やかですねぇ」
五人をあっと言う間に片づけたエリナをまどかは羨望の眼差しで見つめている。
「これくらい楽勝……」
「あぶないっ！」
ドンッと突き飛ばされ、エリナは大きくよろめく。そのすぐ脇を、男子生徒のナイフが通過した。
「なっ⁉」
飛びのいて距離をとると、倒したはずの男子生徒たちは全員起き上がっていた。
無言のまま、特に構えをとるでもなく、ユラユラと頭を揺らしながらこちらに近づいてくる鬼塚たち。それまでの闘気剥き出しの闘い方からうって変わって何も感じさせない、異様な感覚。眼も虚ろに見開いたまま、エリナたちを見ているのかどうかすら判断できない。
「くっ！　気色悪いのよっ！」
先手必勝、一番近い少年に当て身を喰らわせ、さらに顎に掌打をカチ上げた。
少年は受け身もとらず派手にひっくり返るのだが、すぐさま何事もなかったかのように起き上がる。ゾンビを相手にしているような手応えのなさだ。
「なんなのよ、コイツら」
「ま、まるで人形みたいですぅっ」
まどかの言葉にハッとする。
生きた人間を人形化し操るバンヴォーラ。これはまさにそれではないのか。
「ふんっ。それなら手加減する必要はないわね」
「だ、ダメですよ、エリナさん！　操られていてももとは普通の生徒さんなんですから」
まどかに止められたが、構わずエリナはポケットから筆を引き抜く。
「私の邪魔はさせないっ！　黒天無我ッ！」

振るった筆先から墨汁が迸る。それは黒い霧となって少年たちの視界を奪った。
「今よっ！」
まどかの手を引いて一気に包囲を突破する。だが非常階段も大勢の生徒に埋め尽くされており、ここを突破するのは困難だ。
「跳ぶわよっ！」
「えっ⁉　きゃあぁぁぁぁっ！」
まどかの襟首をつかんで手すりを飛び越える。いくら退魔師でも五階建て校舎の屋上から落ちれば、ただでは済まない。だがエリナの脚は空中を飛ぶように歩き、何事もなかったように校庭に着地した。
「すごいです。どうやったんですか？」
「あらかじめ書いておいたのよ」
スカートが捲れ、太腿に書かれた呪術紋様が露わになる。筆の力で肉体を一時的に強化したのだ。
「走りなさい、まどか！」
校舎から新たにバンヴォーラとなった生徒たちがワラワラと出てくるのが見えた。一体どれだけの生徒が人形化されてしまったのか。とにかくのんびりしている暇はない。
「このまま礼拝堂に向かうわよ」
「え、でも……」
「売られた喧嘩は必ず買うのが私の流儀なの」
プランは狂ってしまったが、相手が仕掛けてきたからにはもう一気にケリを着けるしかない。裏門を蹴破り駆け抜けていく。

礼拝堂内部はお香の薫りが立ち込め、一見荘厳な雰囲気。外の喧噪が嘘のように静まり返っている。正面には高さ五メートルはあろうかという巨大な男神像が起立し、周囲を十体以上の女神像が崇めるように取り囲んでいた。いずれも宝石や金で飾られているが、エリナには下品な成金趣味に見える。

（ここの気……なんて強い……）
エリナが自分を取り囲むように筆を振るうと、白い光が彼女の上体を包み込んだ。
キュイィィィンッ！
光は純白の千早となり、あらゆる邪気を防ぐ。母から受け継いだ技だが、エリナがこれを使うことは滅多にない。それだけ危険が迫っているということだ。
「あなたも準備なさい、まどか」
千早と制服の組み合わせは奇異ではあるが、それをバッチリ着こなしてしまうところは、さすがトップモデルである。黒髪から放たれる霊力で袖や裾がゆっくりとたなびく様は、まるで一羽の白鶴が舞い降りたようであった。
「それにしても悪趣味ね」
異様なことに、周囲をよく見ると広い堂内の壁一面にガラスケースが並べられ蝶の標本が飾られている。何百何千という数の蝶はもちろん生きていない。銀色の虫ピンで胴体を貫かれ、赤や青の極彩色の羽を広げた美しい屍を晒しているのだ。
「……まどか？」
ハァハァと苦しそうな相棒を見てエリナはハッとする。まどかの制服の背中が大きく斬られ、血でべっとり濡れているのだ。
「ハァ、ハァ……ドジっちゃいました……」
「まさかあの時私をかばって……？」
思い当たるのは屋上で奇襲を受けた時だ。傷はそれほど深くはないけれど、止血は難しい。このまま出血が続けば危険だ。
（私のミスだわ……これじゃあ、あの時と変わらないじゃない……っ）
探し続けた母も憎むべき宿敵も目の前だというのに、激しい葛藤が胃の辺りを灼き焦がす。
「美とは久遠なるモノ……永久こそが美」

どこからともなく低い声が透徹し、締めきられた堂内で妖しくエコーする。
「誰っ？」
「貝や蝶も生きて動いている間は真に美しいとは感じない。貝殻や標本となってこそ、美を得るのだ。移り変わる景色も、絵画や写真として切り取られてこそ、つまり永遠を与えられてこそ、価値を持つ」
「出てきなさいっ！」
正体不明の声にいらつきながら、エリナは周囲を警戒する。礼拝堂に入る前に感じた闇のパワーはさらに強くなり、肌はジットリと汗ばんでくる。
「エリナさん……」
まどかの声も微かに震えている。これから厳しい闘いになるだろう。そのとき彼女を守りきれるか、エリナ自身にもわからなかった。
「ようこそ岬エリナ。待ちわびたぞ」
男神像の台座の辺りから、黒い影がムクリと起き上がる。小山のように巨大なシルエットに、二つの大きな赤い眼だけが爛々と輝いている。
「儂は黄義年。聖天宗教祖である」
ポッポッと周囲の燭台に灯が灯り、黄の姿が次第に露わになる。
「ひっ」
思わずまどかが悲鳴を上げるほど、その姿は異様だった。脂身の詰まった袋をそのまま床に置いたような体型は、首や胸、腹という区別が識別困難なほどブヨブヨに太っている。手も脚も皮下脂肪に埋まり、ほとんど見えない。おそらく自力歩行もできないだろう。
（何よ……コレは……）
座ったままでも二メートル近い体高があり、小山を見上げるよう。体重も一トン近くあるのではないだろうか。スタイルの維持にいつも気を使っているエリナにとって存在自体が許しがたい。ヌラヌラの油を塗ったような肌からは、腐肉のような異臭が漂い、思わず顔をしかめた。
「さあ、儂のもとへくるがよい。永遠の美と安らぎを与えてやろう」
地獄の底から響くような声が、エリナの鼓膜を舐めていく。それだけで鳥肌が立つほどの不快感。同じ空気を吸っていたくない男だ。
「この私に美を語るなんて勘違いしているようね、ヒキガエルさん。私があなたに永遠で安らかな眠りを与えてあげる」
ざわっと黒髪が波打ち、エリナの霊力が増大する。聖なる波動が髪から頭頂へ、そこから体幹を伝わって身体の隅々に行き渡る。同時に手の中で握られていた筆をクルリと一回転、シュンッと槍のように巨大化した。
（でも……）
ここで黄と闘うべきか、まどかを連れて逃げるべきか。いまだにエリナの心は揺れている。
「何を迷っている、エリナよ。お前を呼び寄せるために色々手を尽くしたのだぞ」
心を見透かしたように黄が嗤う。顔面の脂肪が折り畳まれて、眼が挑発的に細められる。
「そんなことは最初からわかってるわよ。あれだけ目立つエサを撒かれれば、バカでも気づくわ」
「フフン……ならば、答えは出ているではないか」
「言われるまでもないっ！　墨什！」
いつもの素早い一筆書きで狐の霊獣を召喚する。
「いくわよっ！」
「了解だ」
まどかを残したままエリナは墨什とともに黄に向かって走り出す。突進しながらさらに筆を走らせると、黒い鞭状のモノがエリナの周囲に何本も出現した。
「雪風流縛索術（ばくさくじゅつ）っ！　柳泉（りゅうせん）っ！」
ギュララァアァァァッッ！
十本近い黒い鎖が放射状に展開し、鞭のようにしなりながら獲物に襲いかかる。天地左右から迫る縛索は脱出不可能だ。
「ふんっ」
だが黄に届く寸前、鎖は見えない障壁に阻まれて跳ね返されてしまった。
「そんなもの！　てえいっ！」
踏み込んだエリナが筆の穂先をバリアーに叩きつける。鎖と壁の呪力が激しく激突し、七色の火花を散らす。
「この程度か？　今度はこちらからいくぞ」
黄がニヤリと嗤うと、背後の男神像がゆっくりと起き上がり始めた。
「ぐおおおっ！　エリナァァ！」
咆哮する石像の顔が、眼鏡をかけた痩せた男の顔に変化する。先日海岸で闘ったキザ男にそっくりだ。
「あなたは斑目!?」
「いきますよぉ！　天誅っ！」
魂を物体に乗り移らせる憑依術。巨岩そのものの拳が真上から退魔少女に振り下ろされた。
ズッドォォオオオンッッ！
直撃は避けたものの、爆風と破片をもろに喰らって、エリナは十メートル近く吹き飛ばされる。そのまま壁に激突し、ガラスと蝶の羽根が舞い散った。
「フハハァ！　母親には遠く及ばなかったなぁ！」
石像斑目の巨大な掌が失神したエリナを鷲づかみにしようとしたその時――――！
「むっ!?」
少女の身体は煙のように指の間を通り抜け、黒い一本の線になった。
「キシャアアァァッ！」
黒狐が跳躍し、斑目の喉笛に喰らいつく。鋭い牙は岩の肌をいとも簡単に切り裂いた。

「ぐぉおおぉぉっ！」
斑目は地響きを立てて転倒し、祭壇を押し潰す。様々な神具や神像が崩壊し、瓦礫の山と化した。
「ぬぅ、ばかしおったかっ！」
怒り心頭の黄が睨む先で、エリナは新たな術を展開していた。
「開け！　異空の門っ！」
いくつもの呪術紋様が合成され、扉の形に切り取られた空間は外へ通じる通路となる。
「すみません……エリナさん……」
「いいのよ。私のために誰かが傷つくなんて、もうたくさん……」
まどかを支えるエリナの表情は、苦い過去を噛み潰し、精一杯の優しさを浮かべ不器用に微笑んでいる。それはモデルの時の造られた笑みとは違う、エリナの本心からの微笑みなのだ。
「逃がしませんよっ！」
「ッ！」
背後から声をかけられエリナは筆を構えたまま反転する。黄金色に輝く女神像たちが動きだし、飛びかかってくるのが視界に入った。いずれも斑目が憑依術で操っているのだろう、女体に男の顔がついている様はなんとも不気味だ。
「しつこいのよっ！　ハァッ！」
ドシュッ！　ザシュッ！　ズバァッ！
退魔の本能が神速で筆を振らせ、鋭い槍となった穂先は女神像を次々に撃破していく。
「これでおしまいっ！」
最後の一体にトドメの突きを繰り出せば、筆は最高の手応えで女神像の胸を貫いていた。だが……。
「うう……エリナ……」
「！」
どこか聞き覚えのある女の声で呼ばれ、エリナの動きが止まる。それはエリナの中の古い記憶を揺さぶり、魂を鷲づかみにした。
「まさか……」
女神像の黄金の箔がパラパラと剥がれ落ち、下から白い人肌が露わになる。
「……会えてよかった……」
「あ、ああ……」
凍りついたまま、紅の瞳だけが丸々と見開かれていく。
ムチムチした太腿、ほどよくくびれた腰、豊満な完熟の乳房。金箔が剥がれ落ちるにつれ、どこか見覚えのある女の肢体が浮かび上がる。
「エリナ……私の愛しい娘……」
ガクンと膝から崩れ落ち、顔面を覆っていた金面が縦真っ二つに割れ落ちた。
「ママッ⁉　そんな……」
その顔はずっと探し続けた母に間違いなかった。
溢れる感情でブルブルと身体の芯が震え出す。辛い修行も苦しい闘いも乗り越えてこれたのは、今日の日を信じていたからこそだ。それなのに、その母親を手にかけてしまったのだ。
「いやぁあぁぁぁぁっ！　ママ！　ママァ！」
パニック状態になり、迷子の子供のように取り乱すエリナ。大粒の涙がポロポロとこぼれ落ちる。
「エリナ……さん……」
普段の凛々しさも太々しいまでの強さもそこにはなく、まどかも唖然とするばかり。
「はあぁっ！　縛索術、雷陣！」
「きゃあぁぁっ！」
突然那海の手から強力な結界が放たれエリナを捕らえる。目映ゆい紫電に撃たれて意識が吹き飛び、黒髪の少女はその場に卒倒してしまう。
「エリナ、これでまた一緒に暮らせるのね。嬉しいわ」
「はあはあ……っくぁ……お母様……」
いつの間にか赤い仮面をつけ、平然と微笑む那海。驚いたことに胸の傷も見る見る塞がっていく。
「クックックッ。素晴らしいだろう。これが永遠の命、バンヴォーラだ」
「なんですって……」
人を操るだけではなく、まさに不死身、不老不死なのだ。バンヴォーラの技術を甘く見たことが悔やまれるが、もう後の祭りだ。
「エリナさんっ！」
助けようと思ったのか、まどかが異空の門から出てこようとしている。
「墨什……はあはあ……まどかを……お願い」
「わかった」
最後の力を振り絞って命令すると、黒狐はまどかの身体に巻きつき、そのまま扉に引きずり込んだ。
「ああっ、放して……エリナさ……」
扉は断絶され、声は途切れた。まどかの姿はもうどこにもない。
「逃げたか。だがこの島からは出られまい」
気にもかけず、黄はエリナのほうに向き直った。
「お前にも永遠の美を教えてやる。世界一美しいバンヴォーラに改造してやるぞ。グハハッ！」
黄の不気味な狂笑が堂内にこだまする。
「うう……」
気がつくとエリナは地下牢のようなところに監禁されていた。幸い着衣に乱れはないが、両手は背中で手錠を嵌められている。
「ここは……礼拝堂の地下なの……？」
重厚な石壁はどす黒く、脂が染み込んだような独特の湿り気を帯びていた。それはおそらくここに監禁された何百人という女たちの痕跡だろう。今にも石の隙間から女たちの悲鳴が聞こえてきそうだ。
「気がついたかね、岬エリナ」

「！」
斑目が鉄格子の向こうで嗤っている。その横には気をつけの姿勢で起立する母の姿があった。ビデオで見たまっ赤なランジェリーと仮面を着けている。
「羞恥心と闘争心を忘れて欲しくなかったのでね、服はそのままにしておきましたよ」
地下牢に入ってきた斑目が、いやらしい目つきでまどかの身体を見つめる。人を人とも思わない、商品を見るような眼だ。見られるだけで何十匹ものナメクジが這い回るような嫌悪感を感じた。
「それはどうもありがとう」
キッと睨みつけるものの、武器を奪われ後ろ手に拘束されていては、ほとんど抵抗できない。
「さすがエリナお嬢様だ。自分の母を手にかけるだけのことはある」
イヤミっぽく頬を歪め、那海を手招きする。
那海はどこか遠くを見るような表情でぼんやりと立っており、あの時のような邪悪な気配はない。
「バンヴォーラの初期タイプは肉体の保持に重きを置いている。このように老けることもなく、当時のままに美しい」
たわわな乳房をいやらしく揉みほぐす。熟れた乳脂肪を包む白い乳肌は、十代の乙女のような張りと肌理の細かさを維持している。
「その反面、情緒面の劣化は防げず、命令通りにしか行動できなくなる。今はこの仮面で補っているが、これでは面白みに欠ける」
どんなに身体をまさぐられても那海は反応を見せない。あのビデオやエリナを襲った時も、そのように操られていたということなのだろう。
「我々は気づいた。真のバンヴォーラには半永久的に壊れない強靱な精神の持ち主が必要だと。そこで君が選ばれたのだよ」
縁なし眼鏡がギラリと光り、蛇のように先割れた舌が、薄い唇を舐め上げる。
「それは光栄ね」
虚勢を張るものの、内心は穏やかではない。人間を生きた人形に改造する。そんな恐ろしいことが可能なのか。しかし目の前の哀れな母の姿を見せられては信じざるを得ない。何しろ心臓を一突きにしても平然としていたのだから。
「しかしあまりに強固な精神は改造に不向きだ。そこで君の母親に手伝ってもらうことにした」
パチンと指を鳴らすと、スイッチを入れたように那海の瞳に光が宿った。
「ウフフ。エリナ、会えて嬉しいわ」
「マ……お母様……」
優しい声をかけられて、懐かしさがこみ上げる。だが騙されてはいけない。すでに母の魂はこの世になく、操られたままに動いているにすぎないのだ。
（でも……）
頭でわかっていても、心はかき乱される。しゃべり方も微笑みも以前のままで、失われた時をあっと言う間に埋めていく。
「あなたには教祖様の素晴らしさを知ってもらいたいの。そして私と一緒に聖天宗に帰依しましょう」
「何を言っているの！　そんなことできるわけないじゃない！　あんなイボガエルみたいなやつ！」
「新しいお父様に失礼よ、エリナ」
激怒する娘を諭すように囁きながら、ゆっくり近づいてくる。急接近する胸の谷間から懐かしい香水の匂いが漂い、それを嗅いだエリナの脳裏に幼い頃の母との記憶が蘇って、ますます混乱させられた。
「お、お父様って……何を言っているの」
「教祖様は私と再婚してくれると約束してくださったの。そして是非あなたを家族の一員として迎えたいと仰ったわ」
「な、なんですって⁉」
あまりのことに全身の血が逆流し、天地の感覚が失われるほどエリナは混乱させられた。
「あの化け物と結婚するために私を……⁉　そんなこと、絶対認めるもんですか！　お父様はどうなるのよ！」
「あんな退屈な男のことなんか忘れたわよ。だって教祖様のオチンチンは奥の奥まで届いて、私が一番感じるところをたっぷり可愛がってくださるの。そして最後はお腹の中がまっ白になるくらい、精液を注いでくださるのよ」
それが本心なのか操られているのか、仮面に隠された表情からは判断できない。
「パパを裏切るようなこと言うなんてっ！　うう、やっぱりあなたはお母様なんかじゃない！」
脳裏に蘇ってくる猥褻な映像を振り払うように頭を振る。母のあんな姿は二度と見たくない。
「あなたも教祖様のオチンポを味わって女の悦びを知れば、きっと私の気持ちがわかる」
「私はそんな風にならない。あんな化け物に屈服するくらいなら死んだほうがましよ」
「昔のエリナはもっと素直ないい子だったのに。やっぱり片親だとよくないのね」
アップにした髪から細い棒状のモノを抜き取る那海。それはエリナから奪った筆だった。
「さすがいい筆ね」
「う……まさかそれを……⁉」
筆は現実と虚構の壁を取り払い、無から有を生み出す。一時的とは言え人体に作用し、能力を引き上げたりもする。それを悪用されたらどうなるか、その力を知っているだけに、激しく動揺してしまう。
「そうよ。あなたの身も心も淫らに造り替え、その状態で永久に固めてしまうの。素晴らしいお人形さんのできあがりよ」
唇を窄めてフウッと筆先に息を吹きつけると、穂

先がルージュと同じ朱色に変わった。
「お母様がこの筆の力で徹底的に躾けてあげるわ」
軽く筆を一振りすると、天井から黒い紐が降りてきて、エリナの手錠に絡みついた。
「放しなさいよ！　あんたのことなんか、もう母親だと思ってないんだから！」
両手を後方に吊り上げられて強引に立ち上がらされる。さらに両脚も床から生えてきた黒紐に絡みつかれ、肩幅に開いた状態で固定されてしまう。腰を曲げお尻を突き出した惨めな格好だ。
「まずはここから調教してあげるわ」
背後に回った那海は制服のスカートを捲り上げる。淡いピンクのショーツが露わになるが、それもすぐに膝まで引き下ろされた。
尻タブを掻き分けられ、アヌスの窄まりを暴かれる。淡いセピア色の蕾は放射状の皺を深く刻んで収縮し、注がれる視線に震えている。モデルとして視線を浴びることには馴れていても、排泄器官まで見られるのはやはり恥ずかしい。
「可愛いお尻ね。でもお父様に気に入ってもらうにはもっと淫らにならないと」
紅い筆先がお尻の谷間に侵入してくる。
（何をする気なの？）
腰を振って逃れようとするけれど、母の手に押さえられ、ピクリとも動かせない。赤い穂先がピタッとアヌスに押し当てられ、妖しい紅を塗り込んでくる。
「うぁっ……つ、冷たいっ！　っくぅ！」
皺の一本一本をなぞるように、穂先は丁寧に蠢いてエリナの肛門を排泄器官とは思えないほどふしだらなモノへと変えていく。
「ウフフ。中にも塗ってあげるわ」
アヌスにズブリと筆を突き立てられ、エリナは悲鳴を上げてしまう。どんな陵辱や拷問にも耐える自信はあったが、まさかお尻を責められるとは思いも寄らない。
「うっぅ……そんなことしても無駄よ……くっ」
筆は染み出る紅を潤滑にして、クルクルと回転しながら奥へ奥へと侵入してくる。細い筆とは思えないほど、お尻で感じる圧迫感は大きかった。
生まれて初めての肛虐に蕾はキュッと窄まって異物を喰い締めるが、侵入を防ぐことはできない。それどころか、紅を塗られた肛門粘膜からくすぐったいような奇妙な感覚が湧き起こり、エリナを混乱させる。
（なに……この感じは……？）
深く挿入された筆が直腸内で暴れ回り、腸襞に紅を染み込ませる。次の瞬間にはスウッと引き抜かれ、排泄感にも似た刺激を肛門の内側に塗りつけた。
「無駄だって……ンあっ……言ってるのに……もう、やめなさいっ！」
筆を往復されるたび、失禁してしまいそうな掻痒感とくすぐったさに、懊悩させられる。初めは冷たかった筆もジワジワと熱く感じられてきた。
（お尻が……お尻の中が……熱くなって……）
穂先に腸内を舐められるたび、ビリビリと電気にも似た甘覚が直腸に満ちてくる。電流は腰椎を駈け上がり、背筋を異様な痺れでゾクゾクさせた。
「これであなたのお尻はとっても感じやすくなったわ。オマンコと同じくらいにね」
「はぁう……なんですって……はうぅンっ！」
筆をチュポンと引き抜かれ、思わず変な声が出そうになる。確かに那海の言う通り、肛門は異様に敏感になっていた。
「フフフ。実の母親にアナルを責められて随分色っぽい顔をするじゃないか。感じているのか？」
「ち、ちがうわ……こんなことなんでもないし、お尻なんかで感じるわけないでしょっ！」
口では拒否しても、母の手で責められたアヌスはズクンズクンと疼き、括約筋が弛緩して力が入らない。下半身全体が甘く痺れてしまい、両手を吊られていなかったら、へたり込んでいただろう。
「しっかり定着したようね。その紅はもう一生とれないわよ」
ピクピク震える蕾はさらに赤みを増し、ぽってりと充血している。まるでゼリーを煮詰めて造ったように柔らかそうで、プルプルと震えながら艶めく紅を光らせている。排泄器官とは思えないセクシーな色気が匂い立ち、陵辱者たちの眼を楽しませた。
「さあ、休んでいる暇はないぞ」
斑目が正面に立ち、ズボンを引き下ろす。美人母娘の色香に刺激されたのだろう、ペニスは鋭い仰角で立ち上がっていた。
（あれが……男の……）
モデルの現場では異性の裸を見ることも希にあったが、勃起状態の男根を生で見るのは初めてだ。赤銅色の剛棒は二十センチを超える長大なモノで、飛び出たエラなどは、毒蛇を彷彿とさせる。さらに全体にヌメヌメした粘液に包まれて、不気味さに輪をかけている。
「準備はもういいでしょう。斑目様にお尻でご奉仕するのよ」
「お、お尻でって……」
性の知識があまりないエリナには、なんのことか理解できず、困惑の瞬きを繰り返す。
「肛門で私のチンポをくわえるんですよ。処女は黄様に捧げるのでね」
背後に回り込んだ斑目が眼鏡のレンズを怜悧に光らせる。剥き卵のような尻タブをつかんでグイッと押し広げた。
「なっ⁉　そんなの気が狂っているわっ！」
黒髪を振り乱しイヤイヤと首を振る美少女筆狩師。

セックスは愛しあう男女の愛の営みであり、享楽のために、あまつさえ排泄器官を使っての行為など信じられなかった。

エリナは腰をロデオの馬のように跳ねさせて、必死に肛虐から逃れようとする。しかしウェストが鋭角にくびれているせいで、お尻は実際のサイズ以上にボリュームを感じさせ、セクシーなベリーダンスは斑目を楽しませてしまう。

「お尻でなんて死んでもイヤよ！　無理矢理したら舌を噛み切るんだからっ！」

エリナは全身の力をお尻に集中させ、徹底抗戦を主張する。燃えるような赤い瞳が、斑目を肩越しに睨みつけた。だがそれは刃々牙の残虐嗜好を煽っただけだった。

「舌を噛んでもすぐに黄様が治療してくれますよ。奇跡の力でね」

ガキッと万力のような力で少女の腰を押さえ込み、鋭い切っ先をアヌスに押し当てる。

「うぁっ！　やめなさいぃっ！　ンあぁぁ～～っ！」

括約筋を拡張してくる挿入感は筆とは比較にならない。丸太の杭を打ち込まれ、身体を真っ二つに裂かれていくようだ。

「ククク。暴れても無駄です。もう先っぽは入ってしまいましたよ」

斑目の言う通り、肛門粘膜は十分に広がって野太いペニスをくわえ込もうとしていた。どんなに締めつけようとしても括約筋は弛緩したまま、侵入を阻めない。苦しさや圧迫感を感じつつも痛みがそれほどないのが、かえって恐ろしい。

（こ、これもお母様の……筆の効果なの？）

困惑している間にも結合はさらに深まり、最も太いカリの部分がズブリと潜り込む。

「ひうっ！　くうあぁぁ～～～んっ！」

無理矢理拡張された肛門粘膜から爆発にも似た衝撃が走り抜け、エリナは背筋を反らせた。尻タブがエクボを刻んで強張り、太腿がガクガクと震え出す。

（そんな……私の初めてが……刃々牙に……それもお尻なんかで……っ）

筆舌に尽くしがたい汚辱感が、内臓の圧迫感とともにこみ上げてきて心臓が苦しくなる。

退魔師のエース、ナンバーワントップモデルとして君臨してきた自分が、こんなアナルレイプで初体験を迎えるとは死にも勝る屈辱であった。

「おお、とろけるようですよ。これがエリナのケツマンコですか」

「ハアハア。出ていきなさい、この変態！　あなた如きが触れていい身体じゃないんだからっ」

白い犬歯を噛み縛ってなんとか押し返そうと息むのだが、括約筋の蠢きは甘えるような甘噛みにしかならず、男を悦ばせるだけだ。

「わ……私にこんなことするなんて、絶対に許さないっ……殺してやるわ……ううむっ」

「ククク、いい顔です。その強靱な精神力こそ我々の求めていたもの……それっ！」

ズンズンと突き刺され、剛棒は次第に深く根元まで埋まってくる。

「うあぁ……はぁっ……はぁっ……うっくぅ」

我が身に食い込んだ肉棒の熱さと大きさを粘膜に感じ取り、犯されてしまった実感を噛み締める。お腹いっぱいに詰め込まれ、今にも張り裂けそうな圧迫が腹腔を満たしている。これほど大きなモノを呑み込んでしまった自分が信じられなかった。

しかも苦痛はほとんどなく代わりに何か異様な感覚が湧き起こる。粘膜を揺さぶり脊椎を伝播し、脳にまで響く甘美な痺れ。

「もう馴染んできましたか。さすが筆の力は素晴らしいですねぇ」

ズッ……ジュブッ……ズズズッ……グチュンッ！

（何……これは……？）

奥深く突き上げられた時には、身体から魂が浮き上がるような浮遊感が、そして引き抜かれる時には、底なし沼に引きずり込まれるような自堕落な寂寥感が襲ってくる。それを何度も繰り返されるたび、痺れは次第に大きくなり、身体の芯を戦慄かせた。

「もう斑目様のモノを美味しそうにくわえ込んで、お母様も嬉しいわ。最初はきついかもしれないけどすぐに気持ちよくなるわよ」

結合部を覗き込んで那海が微笑む。紅く塗られた肛門は驚異的な柔軟さを見せて見事なまでに広がっていた。異常な出血は見られず、染み出した腸液がお尻の谷間を濡らしていく。

「はあ、はあ……これしきのことで私をどうにかできるなんて思わないことね！　馬鹿馬鹿しい！」

それでも肛門を犯されたくらいではエリナの心は折れない。屈辱を怒りに換え、さらなる闘志を燃やすのだ。

「強情な子ねえ。もうちょっと気分を出させてあげるわ」

筆を縦に二度ほど振ると、天井から黒い触手が二本ほど伸びてきて、エリナの胸に絡みついてきた。

千早を左右に掻き広げ、制服を引き裂いて白い胸の谷間を徐々に露わにしていく。

「ああぁっ！　やめてやめてっ！　胸はだめっ！　絶対にだめよぉっ！」

それまで毅然としていたエリナが激しく拒絶の悲鳴を迸らせた。紅潮していた美貌はサアッと血の気を失い、感情の乱れがまなじりを吊り上げる。いかなる危機にも冷静に対応していたエリート退魔少女とは思えない取り乱しっぷりだ。

「モデルのクセに何をそんなに恥ずかしがっているの？　オッパイを見せたほうが殿方は悦ぶのよ」

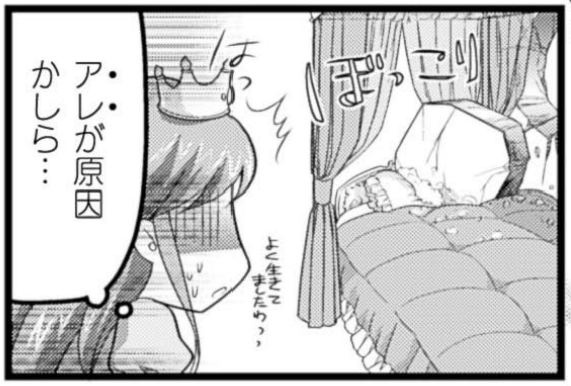
人格変身!? CHANGE! 姉妹姫

おや、姉姫のようすが……

お忍び禁止

漫画COMIC／嘉納(かのう)あいら

朝からドッキリ!!



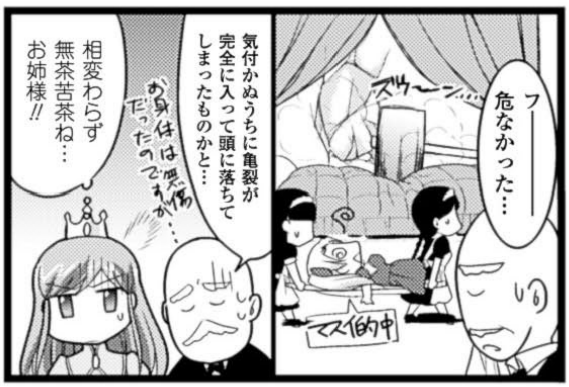
人物紹介

ルピィ
ダイア国の自由奔放・気ままなお姫様。エメラルダの姉。

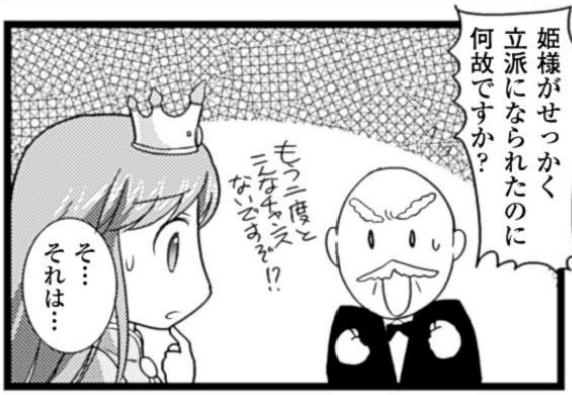
エメラルダ
ダイア国のお姫様。しっかり者。実は男。

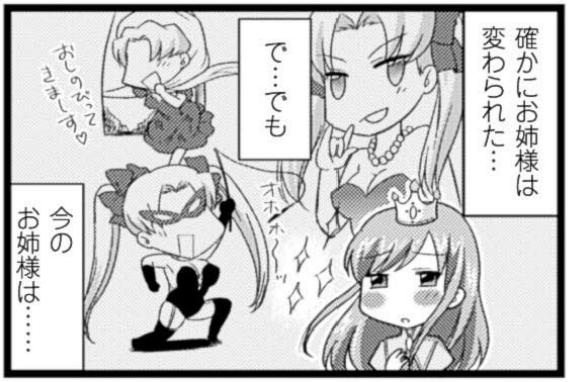
ありえへん言葉

最後の手段



実を言うと…


姫様がせっかく立派になられたのに何故ですか？
もう二度とこんなチャンスないかもしれませんぞ!?
そ…それは…


確かにお姉様は変わられた…
で…でも
今のお姉様は……
おしのびってきましょう♡
オホホ～ッ

本当のお姉様じゃないの!!
普段のお姉様が本物でしょう!?
エ…エメラルダ様…

じ…爺が間違っておりました!!非常に残念ですが姫を戻しましょう！
オ…オフウッ!!
本当は私の存在が薄くなるのが癪なだけですけど…

絶体絶命!?

その日の夜
ニヤッ

こ…こんな事をしていいのでしょうかもし姫様に何かあったら…
大丈夫です！軽くショックを与える程度に叩くだけですわ

折角…こんなお美しく生まれ変わられたのに…
トホホ…
今がチャンスですわ！

お姉様！お覚悟!!
ル…ルピィ姫ー!!

天使や魔族から守ってやろうとしただけなんだぞ…
ミノッ…
お前たちを創ったのはボクなんだぞ…!!
役者は揃い最終決戦へ!
なのに何だよ!
天使と魔界の穢れた鎧
前編
『サキュバスディストーション!』好評発売中!
漫画 COMIC おおたたけし
お前たちまで天使や魔族と同じ様に裏切るのかよ!
いままでだって独りだったんだ
これから永遠だって独りで生きてやる!!
もういいよ!

全部
きゃあああっ
お姉様！

消え
ちまえ
――っ!!

て…
天と地が…

世界が
破れた…!!

魔王…!

久しいな
エグザニエル

5千年の
牢獄は
どうだった

よく見てろよ
魔王

お前は殺せなく
なったけど

これから
そこの邪魔者と
いっしょに
お前の世界を
虚空に還して
やるからな…!!

まちなさい
エグザニエル!

お姉様は
ボクが守り
ます!

マルアークの長老たちの
力を借りて!

天界最強の秘術

この聖魂相転移（セフィロト・スタンピード）で!!

こ…この技は…!

長老…フィラエルを核にして…!!

このまま逃げていなさいフィラエル!

その術はあなたの魂を燃やし尽くしてしまいます!

ボ…ボクは…

魂を虚数励起し始めた…!

このガキ本気で槍と戦う気だな!

お姉様を守ります!!

おー♥これでおわりだ♥

あれってお互いの命を高振動エーテルにして宇宙の外側に吹き飛ばすヤツじゃん

あの技ではエグザニエルをたおせません!

え?

槍の記憶の中にありました

彼は一度あの技を受けた事があるのですよ!

私が槍に近づけばエグザニエルを止められるものを…!

……まったくもー…
あんたがあいつに近づけば…マジで何とかできるワケね
私は彼以外で唯一人あの槍を使えるのです…
…くっ…
じゃあさ…
とっととこのバカ騒ぎとめて来なさい！
!!
あっ
ひゃうう

な…
何をするんですっ！
すぐはなしなさいっ
魔王のヨロイ貸してあげるって言ってんのよ
仲間を助けたいなら魔界の穢れに耐えるしかないと思うケド？
く…っ
す…好きにしなさい…っ
うぁあぁっ!!
あー そのヨロイ今弱ってるから聖水出しちゃダメよ
ちゃんと精液出せば修復されるから遠慮なくイッパイ出しなさい♥

あっ
くっ
むきっ
ひいっ
なっ…何で私のおち■ちん絞ろうとするのですかっ
バカねー人間の精液だとどのくらいの量が必要だと思ってんのよこのヨロイ
ぐ…
んぁあぁーっ

学園にはびこる悪を正す肉弾派女教師が
チンピラどもの白濁にまみれる！
超武闘派女教師 冴子
小説／NOVEL 北都凛（ほくとりん）
挿絵／ILLUSTRATION 長頼（ながより）

「ずいぶん楽しそうだな。私も混ぜてもらおうか」
早乙女冴子は唇に薄い笑みを浮かべて、黒縁眼鏡の奥で瞳を光らせた。
視線の先には、ひとりの男に寄ってたかってリンチを加えている生徒たちの集団がある。
放課後の見まわり中、階段下の踊り場で暴行現場に遭遇したのだ。
十人の男子生徒たちは、ネクタイをだらしなくゆるめて、ブレザーの前をはだけている。シャツの裾もズボンから出し、まるで素行の悪さを自慢しているかのようなスタイルだ。
ここは龍門館学園。不良の巣窟として世間から後ろ指をさされている男子校だ。
「体力が有り余ってるんだろう？　ほら、私が相手になってやるよ」
こちらを見た途端、不良たちの濁った目が好色そうな光を放ちだす。
「フンッ……ガキのくせに色づいてるんじゃないわよ」
冴子は顎をはねあげて黒髪のストレートを揺らすと、猫のようなアーモンド型の瞳で生徒たちを見まわした。
欲情した視線を向けられることには慣れている。露骨に眉を顰めて嫌悪する一方、密かに満更でもない気分を味わっていた。
自他ともに認める爆裂ボディを前にして、盛りのついた十代の牡たちが黙っていられるはずがない。
白いブラウスを突き破りそうな張りのあるバスト。奇跡のように細く引き締まったウエスト。紺色のタイトスカートにはむっちりとしたヒップが浮かびあがっている。
しかも、タイトスカートのスリットからは、黒のガーターベルトが覗いていた。黒いハイヒールも、牡を悦ばせるアイテムのひとつだろう。
任務の性質上プロフィールは非公開だが年齢は二十代前半。その魅惑的な肢体には大人の色香が漂っている。
もちろんサービス精神でこんな格好をしているわけではない。男を油断させる目的と、冴子自身の趣味が合致した結果だった。
「群れないと喧嘩のひとつもできないのか。男のくせに情けない」
冴子はいつも持ち歩いている〝指し棒〟を、思いきり振りおろした。
キーンッという鋭い金属音とともに、伸縮式の指し棒が一気に伸びる。途端に銀色に輝く本体から、暴力的な匂いが漂いはじめた。
それもそのはず、一見普通の指し棒だが、実は超合金製の特注品だ。数々の修羅場をともに潜ってきた冴子の相棒だった。
「おいおい、女ひとりで俺たちアベンジャーに勝てると思ってるのか？」
不良グループ・アベンジャーのリーダー、二年生の中森進也が一歩前に進みでた。
毛先を遊ばせた髪と、耳に開けたピアスの穴が特徴的だ。端正な顔立ちだが、やることはえげつない。喧嘩がめっぽう強く、恐怖によりチームを支配しているという。
「さ、早乙女先生……気をつけてください」
掠れた声が聞こえてくる。生徒に暴行を受けてうずくまっている学年主任の好井学だ。四十六歳の社会科教師で、七三にきっちり分けた髪がいかにも神経質そうだった。
「こいつら一筋縄では……うぐぅっ」
「つるせえんだよ！　ジジイっ」
警告しようとした好井が苦しげに呻く。不良のひとりが、腹部を上履きのつま先で蹴りあげたのだ。
その瞬間、冴子の指し棒が空気を切り裂き、目にもとまらぬ速さで不良の脇腹をしたたかに打ちつけた。
「ぐはっ！」
確かな手応えがあり、不良の身体がくの字に折れ曲がっていく。骨折しないように手加減したが、それでもダメージはかなり大きいはずだ。
冴子は涼しい顔で、残りの九人をぐるりと見まわした。
「覚悟してかかってきな」
挑発するように手招きする。その途端、リーダー以外の下っ端どもが、いっせいに飛びかかってきた。
「女ひとりが相手でも集団か。クズどもめっ」
冴子は一歩も引こうとせずに、生徒たちの間を一気に駆け抜ける。
「ハッ！　セイッ！　トォッ！」
勝敗が決したのは一瞬だった。すれ違いざまに指し棒を振り、全員の急所を打ち据えたのだ。
「ふぅっ……」
小さく息を吐きだすと、背後で八人の生徒がバタバタと崩れ落ちた。
ある者は腕を押さえ、ある者は脚を擦り、またある者は腹部を抱えこむようにしてうずくまっている。
いずれにせよ、すでに戦意を喪失しているのは間違いなかった。
「さあ、どうする？」
冴子は残っているリーダーの中森を、眼鏡のレンズ越しに見据えた。
「くっ……やるじゃねえか」
挑発に乗らなかったところはさすがだが、一瞬で仲間を倒されて焦りの色が浮かんでいる。
中森は奥歯をギリッと食い縛ると、腰を落として拳を握り締めた。
（こいつ、喧嘩慣れしてるな）
冴子も気を抜くことなく、指し棒を持つ手に力をこめる。
と、そのとき、廊下の向こうから大きな声が聞こえてきた。
「これ、みなさん。なにを騒いでいるのですかぁ！」
校長の村尾重吉が、血相を変えて駆け寄ってくる。普段は温厚な性格だが、今は禿げあがった頭頂部まで真っ赤に染めあげていた。
「チッ……おまえら、行くぞっ」
中森が声をかけると、負傷している生徒たちは互いに手を貸しながら立ち

あがった。そして逃げるように、階段の踊り場から去っていく。

最後尾の少年が、こちらをじっと見つめてくる。冴子は険しい表情のまま、彼のことをにらみ返した。

「おい、深津、なにやってんだ！」

リーダーに怒鳴られて、その線の細いひ弱そうな少年――深津芳春は慌てて走っていった。

「ちょ、ちょっと早乙女先生っ」

村尾に腕を引かれて、冴子は階段の陰に連れこまれた。

「校長先生、面白いところだったのに、どうしてとめるんです？」

「困ります。やり過ぎですよ」

声を潜める村尾の顔には、はっきりと困惑が浮かんでいる。それも当然のことだろう。冴子が臨時教師として赴任してから一週間、ずっとこの調子なのだ。

教員としてあまりに言動が規格外な冴子に他の教師たちは反感を持ち、辞めさせるべきだという声が職員室で頻繁にあがっている。

以前生徒を退学にした教師が、見せしめと称してアベンジャーの連中に暴行を受け、半殺しの目に遭った。そのとき他の教師たちも巻きこまれて被害を受けたのだ。

その一件以来、生徒を退学にしろという声はあがらなくなっている。この学園の教師たちは今を無事にやり過ごすことしか考えていなかった。

世間から「事なかれ主義」「サラリーマン教師」と揶揄されても、誰も立ちあがろうとしない。

そこで派遣されたのが、早乙女冴子だった。

「私が来たからには、アベンジャーを徹底的に叩き潰してやります」

冴子がニヤリと笑えば、校長は顔面を紅潮させて捲したてた。

「いくらあなたが文部育成省から派遣された特務教師でも、これ以上の騒ぎを起こされたら、とても庇いきれませんよ！」

特務教師とは大きな問題を抱えた学園に赴き、隠密に事を解決する教師のことだ。

凶悪化する学生の犯罪を抑止するため密かに作られた文部育成省の〝特別事例教育対策局〟に属し、ときには超法規的手段を用いることも許可されている。

しかし、特務教師はあくまでも陰の存在で、公には認められていない。そのため校長以外は冴子の正体を知らなかった。

校長が溜め息をついてその場を去ると、暴行を受けていた好井がどこからか戻ってきた。

「早乙女先生、助かりました。ありがとうございます」

卑屈なまでにペコペコと頭をさげて、コーヒーをご馳走させてくれという。

身体を動かして喉が渇いていた冴子は、ちょうどいいとばかりに社会科準備室についていった。

渡されたマグカップから湯気が立ちのぼっている。香りを楽しんでからひとくち飲むと、一風変わった苦味が口のなかにひろがった。

初めての味わいに小首をかしげたとき、机の端に置いてあるカラフルな錠剤が目に入った。

「好井先生、この薬は？」

「ああ、それはさっき中森が私を殴ったときに、落としていったのです」

好井は錠剤を手に取ると目の高さに掲げて、しげしげと見つめた。

「なんの薬でしょうねぇ。悪い薬じゃなければいいのですが……」

それを聞いた瞬間、冴子の眼鏡がギラリと光った。

実は数ヶ月前、この学園に合成麻薬を売りさばいている生徒がいるという情報が入り、すぐに内偵が送りこまれたのだ。疑わしいグループのメンバーとリーダーは浮上したが、確かな証拠は掴めていない。

そこで冴子が派遣された。この錠剤はおそらく合成麻薬に違いない。決定的な証拠になるはずだ。なんとしても中森を問い詰めて、吐かせなくてはならない。

「中森の奴、どこにいるのかわかりますか？」

「あの連中なら、いつも体育倉庫に入り浸ってますけど……。まさか、早乙女先生、ひとりで行くつもりですか？」

「被害者は刻一刻と増えています」

冴子は錠剤を預かると、すぐに体育倉庫へと向かった。

体育倉庫のスライド式の扉を、勢いよく開け放つ。すると、真正面に置かれた跳び箱に中森が腰掛けていた。

「よお、冴子先生。我がアベンジャーの本部にようこそ」

特別驚く様子もなく、余裕の笑みさえ浮かべている。まるで冴子が来るとわかっていたような雰囲気だ。しかし、手下たちの姿は見当たらなかった。

「なるほど。タイマンってわけね。望むところだ」

冴子は不良生徒をにらみつけて、タイトスカートのウエストに挟んでいた指し棒を手に取った。

「少しは骨がありそうだな。久しぶりに楽しませてもらおうか。イッツ・ショウタイム！」

指し棒を一気に伸ばし、戦闘態勢を整える。アーモンド型の瞳は、女豹のように鋭い光を放ちはじめていた。

「いつでもかかってきな。小僧」

腰を落とし、左半身に構える。左の掌底を胸の前に置き、右手で指し棒を握り締めていた。

負ける気がしない。一対一での闘いなら絶対の自信を持っていた。

「フッ……おまえ、本当に教師かよ」

中森も怯む様子がなかった。格闘技の経験があるのか、それともただの馬鹿なのか。

「遠慮なくいくぜ！」

中森は跳び箱からおりて無造作に構

えると、いきなり右ストレートを打ちこんできた。
しかし、百戦錬磨の冴子が怯むはずもない。左の掌底で難なくパンチの軌道を逸らし、すかさず指し棒を振りおろした。
タイミングは完璧だ。相手の肩口をしたたかに打ち据えたかに見えた。が、寸前でかわされる。そして、逆に左のボディブローを打ちこまれた。
「うぐっ！　ば、馬鹿な……」
重い痛みがひろがり、思わず片膝をついてしまう。
（おかしい……身体が……）
こんな若造に負けるはずがない。突然の眩暈に襲われて、踏みこみが甘くなったところにカウンターを食らったのだ。
「なんだよ、思ったより弱いな」
中森が鼻で笑いながら見おろしてくる。屈辱がこみあげるが、身体が言うことを聞かなかった。
妙に全身が火照っており、息もあがっている。なぜか力も入らず、右手から指し棒が落ちてしまう。
「クソッ……どうなってる？」
「これまでの借りを、じっくり返させてもらうぜ」
中森は跳び箱の裏に隠していた縄を取りだすと、ニヤつきながら歩み寄ってきた。
「おまえが何者なのか、その美味そうな身体に聞いてやる」
「どういうつもりだ。触るな！」
悔しいが、どうにもならない。両手首をひとまとめにして、縄で縛られてしまう。さらに縄は天井の鉄製の梁にかけられ、サンドバックのように吊りさげられてしまった。
「くっ……こんなことして、ただじゃすまないわよ！」
冴子は脱力した身体を懸命に揺すり、目の前に立つ不良グループのリーダーを眼光鋭くにらみつけた。
「へえ、まだそんなに抵抗できるのか。たいしたもんだ」
中森は体育倉庫の扉を閉じ、床に転がっていた指し棒を拾いあげる。
「フフッ、嬲りがいがありそうだな」
妖しい笑みを浮かべると、指し棒の丸みを帯びた先端で、顎のラインを撫でてきた。
「ンっ、なにをする……ンンっ」
思わず顔を背けるが、指し棒は執拗に追ってくる。その冷たい先端が、触れるか触れないかの微妙なタッチで皮膚の表面を掃いていく。
「くっ、やめろ……ンううっ」
たったそれだけで、くすぐったさに似たゾクゾクするような刺激が走り抜ける。
歯を食い縛って耐えるが、悪戯が終わることはない。指し棒は顎から首筋へと滑りおりてくる。
「いい加減にしろ……うくっ、どういうつもりだ！」
「大きい声を出しても無駄だよ」
中森はさも楽しそうに唇の端を吊りあげると、指し棒で首筋を上下に擦ってきた。
決して痛みを与えることなく、ねちねちと撫でまわしてくるのだ。さらに指し棒の先端が、ブラウスの胸もとにおりてきた。
「すごい巨乳だな。これだけ大きいと嬲りがいがあるぜ」
「うっ……それ以上したら、本当に許さないぞ！」
どんな言葉を浴びせようとも、不良の行為を中断させるのは不可能だ。
服の上からとはいえ、乳房を撫でまわされる屈辱とおぞましさが膨れあがっていく。
「泣いても喚いても無駄だっての」
指し棒は乳房の周囲を旋回して、ゆっくりと頂点を目指しはじめた。
「ほら、もうすぐ乳首だぞ」
「や、やめろ……あうっ！」
思わず艶めかしい声が溢れだす。布地越しとはいえ乳首に触れられ、嫌悪感だけではなく、なぜか快美感までもがひろがった。それでも強気な態度を崩さず、眉間に縦皺を刻みこむ。
「中森っ、どういうつもりだ！」
大声で怒鳴りつけるが、冴子の言葉は完全に無視された。
左右の乳房を同じように弄ばれ、指し棒の先端が下降する。そして、ブラウスの上から臍をグリグリとほじられてしまう。
「ンっ、やめ……ンンっ」
吊られた身体を捩らせると、中森が低い声で「ククッ」と笑った。
「冴子先生、感じるだろう？」
「はうっ……な、なにをした？」
脇腹をなぞられて声が漏れる。
やはりなにかがおかしい。間違いなく全身の感度があがっている。まるで薬でも盛られたかのようだ。
（薬？　まさか……あのとき……）
嫌な予感がこみあげてきたとき、体育倉庫の扉が開かれた。
「どうかね。そろそろ限界だろう？」
顔を覗かせたのは、学年主任の好井だった。吊られた冴子を見ても驚かず、妖しい笑みを浮かべていた。
「好井先生、どういうことですか！」
疑念のこもった瞳でまっすぐに見据える。すると好井はおおげさに肩を竦めて語りはじめた。
「あなたが好き勝手に暴れまわるおかげで、商売あがったりだ」
「なにを言って……商売？　まさか、好井先生が？」
冴子が眉を顰めると、好井が不気味な含み笑いを響かせた。
「もうおわかりでしょう。私がアベンジャーの連中に命じて、合成麻薬を売りさばいていたんですよ」
黒幕は好井だったのだ。おそらく先ほどのコーヒーに、合成麻薬を入れられたのだろう。身体に力が入らないのも、妙に過敏になっているのも、すべて薬の影響に違いない。
「まさか君が噂の特務教師とはね。本当に存在しているとは驚きですよ」

著者近刊　リアルドリーム文庫『新妻【贖罪】　私は牝になる』『隷嬢たちの放課後　テニス部員と図書委員長』『ミハエル女学院　隷奴の祝祭』　好評発売中！

姫君一行ご到着！

——コオ様お足元にご注意下さい

ええ

……それにしても……

いくら封印されていた洞窟とはいえ

なんて湿っぽくて澱んだ空気かしら

耐えられませんわ

あら私達が帰ってしまうと困るのは

あなた方ではなくて？

じゃあ帰っていいのよ？

聖なる鈴の啼くセカイ

第9話 開く者達

漫画 COMIC 琴葱（ことじ）

さ
無駄口を叩いてないで
はやく道案内の続きを
お願いしますわ

『聖鈴』を
手に入れたら

すぐ我が国へ
戻らなければ…

ふ…
ふふふっ

うふふふふ
ふふふふふ

アアイリさん
落ち着いて…

ほら
しんこきゅー

あんな奴らこそ
洞窟突破に
関係なかったら

嘘情報で
迷わせて
樹海のもくずに
してやるのに…！

まあ
まあ

巻物も像も
すぐバレちゃい
ましたものね

さすが
姫様お付きの
魔法兵団です

ねぇ
エマさんも
シルビス国の
人なんでしょ？

その
封印された
通路って
解除できないの？

も…申し訳
ありません

昨日も
説明しましたが

巻物によると
シルビス国の
男性の魔力にしか
反応しないらしい
ですので……

その隠し通路ってこの前淫茎地獄の向こう側にあった陣の所だよな？

あそこでまた手こずるのか…

たぶんねー…ってそろそろその淫茎の――…

…あ！

ん？

ボコッ

何をちんたら歩いておりますの

急ぎますわよ

強っ!!

ブラーン

あれが魔術を具現化した魔法兵団の剣…！

初めて生で見ました…♥

神々しいですっ!!

すげえな王族に仕えてるだけあるぜ

あらコオ姫様も素晴らしい魔術の使い手なんですよ？

どうでもいいわよっ!!

ザグッ
——ここですわね
私と『聖鈴』との間に立ち塞がる最初の邪魔者…
確かに強力な印ですわ
でも鍵となる像を手に入れた私には些細な存在…
ちょっと!! それ貸しただけだからねっ!
あんたらしか開けられないから仕方なく……
開きなさい
はっ
ザザ!!
私の道を……

ちょ…っ!?
あ…!!
ゴゴゴゴ
壁が…っ!!
……っ!!
ぷるっ
な…っ…!?
何を驚いていらっしゃるの？
これで扉は開かれましたわ
他の冒険者達が追いつく前に早く奥へ――…

あ……
な
…なに…？
どうしましたのあなた達…っ！
…はな…放しなさいっ…!!
コ…オ様…
…オ…さ
…コ…オさ…
……
え…どうしたんでしょう 皆さん
まさか反魔術で…？
なんか様子が――
あ!!
今のうちに先進んじゃおうよ!!
ね!!
それだ！
え――っ!?

ほら急がないとあたし達も巻き込まれちゃうわよっ！
あ…アイリさ…っ
……!!
待ちなさ――
あ…あなた達いい加減になさいっ！
あっ！
あぁ…んっ
…っ…
あ…っ!!
す…ぐあの者達を追いかけませんと…!!
や…！
あっ
あっ…♥
ぐにぃ
つぅ
や…あ
ぐにぃ
…あ…!!

淫らな肉人形に堕ちた
京子を待つものは――？
SLAVE DOLL
スレイブドール
紅眼の女特務捜査官
Mission Final
宴の夜、すべては終わりを告げた
小説／NOVEL 空蝉（うつせみ）
挿絵／ILLUSTRATION ぼっしい

登場人物紹介

黒崎京子（クロサキキョウコ）

国家警察特務機関の工作員“ドール”。しかし実は、反政府組織『イージス』指導者の恋人で、機関に洗脳されていた。

ジャン

京子と恋人関係にあった同僚。京子に彼女自身の正体と過去を告げ、射殺するが…。

前号までのあらすじ　西暦2150年。世界大戦の折に確立された義体化技術により、発展を遂げた小国マルタ。義体化で肉体を強化した特務機関の“ドール”黒崎京子は、相棒のジャンとともに反政府組織『イージス』の殲滅に向かう。だが、組織の首領と対面したとき、謎の記憶のフラッシュバックに襲われる京子。そして、瀕死の首領の前でジャンに抱かれながら告げられる真相。京子はかつて『イージス』の一員であり、特務機関に拉致されて、義体化改造と偽りの記憶を刷り込まれたうえで、組織壊滅作戦に参加させられていたのだ。恋人を殺され、失意と快感の中でジャンに胸を撃ち抜かれる京子…。

――待っている。

（なにを？）

――迎えに来てくれるのを、待っている。

（誰が？）

待ってる――ずっと、ずっと。

「そぉら、お待ちかねの食事だ。好きなだけ吸い出して食らえ」

声が聞こえた。誰の――この身を所有する、マスターのものだ。

ツンと鼻を突く異臭。前回自分が染みつけた唾液と汗とが混ざりあい、こもって饐えた生臭いにおいがする。だが、もうこれにも慣れてしまった。

むしろ、においのきつさで相手の昂奮度合いが測れ、よりいっそう空腹と性欲とを増進させる。思わず溜めた唾を飲み、その生々しい音が彼に聞こえなかったか、恥じらいながら上目遣いに見つめる。

視線の先に、にこやかなあるじの顔と、それをさえぎるように反り返る凶悪な肉の棒があった。

（私を作り、育んでくださったマスター。そして、私が生きていく上で欠かせない食事を与えてくださる無二の人）

待っていたのは――これ？

愛しい人の裸体、特にふくよかな腹部をなで、すり寄りながら跪き、差し出された肉の剛直に舌を這わせる。

いつもの儀式。もうずっとこうして日々の食事を恵んでいただいている。この身が摂取できる唯一の栄養源――男性の、子種。精子。ザーメン。

「ご奉仕、いたひまふ……ぁむ、れちゅっ……ちぅ、ちゅりゅるるぅっ」

慣れた手つきでそっと幹を支え、スライドするように舌を這わせた。天井の豪奢なライトが、特務のスーツを照らす。そうして黒光りするシルエット。突き出た胸と尻をなで擦るのが、特に彼のお気に入りだった。

「くく、もう勃てているのか」

相変わらず感度がいいと、褒めていただく。その言葉にいっそう胸の奥がキュンと震え、鼓動は一足飛びに高まって、腰の芯まで突き抜けていった。

「は、はいっ。我慢できずに乳首、ぽ、勃起……っ、させてしまいましたぁ、ァァ……」

大切な人が喜んでくれるのだ。嬉しくないはずがない。浅ましい告白も、心許していればこそ。父にも等しい彼の前では、すべてをさらけ出す。隠し事などする必要はないのだ。

「れぢゅっ……ぇろっ、へは、ぁっ……」

キスでベトベトにした亀頭。その割れ目部分へと舌を突き立て、ほじくるみたいに何度もつつき回す。尿道まわりをさらになめ回すことも忘れなかった。

「お、ぅ……さっそくソコかっ、よほど私の精が欲しいと見えるっ」

「は、ひ……欲しっ、れふぅぅ……♪」

弱い部分を責められて弾んだ肉の切っ先から、濃いめの粘つくカウパーが染み出す。すぐさま啜り飲み下して、腹の底がジンと熱を溜め込む。

啜る際の刺激でますます凶悪な角度に屹立したあるじの肉棒は、狂喜し、ビクビクと跳ね回っていた。

「――見えているかね」

父であり、恋人であり絶対の支配者でもある人。マスターが誰かに――ベッドのちょうど真向かいで拘束され、絨毯に正座で座る男に語りかけている。

「……見えてますよ、全部。ね」

ふてぶてしく笑みを浮かべながらも、どこか投げやりな印象を抱かせる言葉を吐いた男の身体は、特務のスーツに包まれていた。

（私と揃いの、黒のスーツ）

その両腕をギターケースのような形状の拘束具で肩先まで覆われ、脚もどうやら縛られているようだ。だが、猿ぐつわを噛まされていない彼の口は達者すぎるほどに達者だった。

「年に似合わず旺盛なせいですかね。その頭」

マスターの禿げかかった頭部を指して、毒づいている。どす黒い怒りの感情が、先刻まで悦びに浸っていた胸を染め抜き、臨戦態勢を取ろうとする。

「……構わん。お前は続けていろ」

深紅に彩られた瞳を標的へと振り向けかけた矢先。ぐいと後頭部を抱き寄せられて、肉棒を根元まで咥え込まされた。

「もごっ……！　んっ、んんぅぅっ……」

喉元を力一杯叩かれる苦しさ。気道を塞がれる苦しさ。そんなものはほんの一瞬だった。

――はッ、はァァッ……。

馳走を前にした犬さながらに鼻を鳴らし、与えられた食事の元――雄々しく、硬く反った剛直へとむしゃぶりつく。

（マスター……お父様が言うのだから……だから、大丈夫）

仮にあの男が拘束を解き、武器などを持って襲いかかってきたところで、強化義体であるこの身ひとつあれば、軽く粉砕することができる。

絶対の信頼により得られた安堵とともに、視界端に捉えていた男を意識の外へと追いやった。もう、あんなやつのことなんてどうでもいい。今はただ。ただ――。

「えるるっ、ちゅっ、ちゅぢゅぅぅっ」

ただ、愛しい人の肉にすがり、溺れて、食欲と性欲を満たしたい。

「お、ぅっ、そう、だ、そのまま……」

ベッド下に跪く胸元をもみしだきながら、愛しい人が歓喜の鼻声をこぼす。乱暴な手つきでもまれた右胸がキュンと鳴る。あっさり位置を見破られつまれた勃起乳首は、ドキドキと高鳴って目眩まで誘発した。

鼻息で前髪を揺らされる。ただそれだけのことすら愛しく思え、ますます舌の動きを速めてゆく。弱い部分、感じる部分。すべて知り尽くしている。毎日毎夜。三度の食事の時はもちろん、休日には日がな一日中しゃぶらせていただくこともあるのだから。

「ふぁ、ぃ……んちゅっ」

まずは亀頭。ここにキスをされるのがたまらなく好きなマスターは、軽く口づけるとグイグイ髪をつかんで奥まで押し込もうとする。

「んごっ、も、ごッ、んふぅぅンン♪」

ドスンと喉奥を叩かれる甘美は、もはや癖になってしまっていた。

「ははは、喉を突かれてイキかける女の顔なぞ、そうそう見られんぞ？」

また、あの男と会話をしているようだった。マスターのものでない熱い視線を、肌に感じる。情熱と、なんだかよくわからないごちゃごちゃとした感情を織り交ぜた執拗な視線。不思議と、嫌悪は湧いてこない。それどころか、スーツに覆われた素肌がいつも以上に火照りゆく感じすらしている。

（イキかけの顔を見られた、から……？）

瞳がぐるりと上向き、それでもなお肉棒に吸いつき離れぬ窄まった唇からはよだれを漏らし。羞恥と昂揚で火照った頬をへこませて、チューチューと粘ついた水音を響かせる。

卑しい表情を見られていると実感することで、より昂奮する。知っているからこそ、わざと顔を傾け、背中向こうの彼にも垣間見えるように仕向けた。

（あ、あぁ……ビクビク、脈……打ってる）

ダイレクトに伝わるあるじの悦び様が嬉しくて、スーツの男の声など耳に入ってきもしなかった。そもそもが、ねっとりと絡めた舌と幹の間で糸引く唾液の粘濁音で、室内は満ちている。意識してもいない男の声など、聞こえようはずもない。

（ぁ、は……今日も……ホカホカ、ぁっ……♪）

右手で腰に抱きつき引き寄せて。そうして根元まで咥えた幹を喉で扱き立てながら、空いた手でぷりぷりの玉袋をもむ。

「う……ッ、おほぉぉっ。相変わらず、いやらしい手つきだ……ぁ」

上目遣い。主人に対する絶対服従の意志であり、彼の昂奮をひと息に煽ることのできる端的かつ最適な方法を併用し。

薄皮に包まれたふたつの玉を擦り合わせるように優しくこねてやれば、ますますたぎった肉の幹が喉奥で暴れてくれた。

（自然と、手が動く……知ってる。男の悦ぶところ全部……知って、る……ぅ♪）

父でもある彼の元で目覚めて一年あまり。それより以前から、この身体は卓越した性的技巧を習得していたのではないか。

『――京子（キョウコ）』

不意に、誰かに呼ばれた気がした。

――誰に？　そもそも京子という名は一体、誰の――この身に名など、ない……はずだ。

（だって、名前で呼ばれたことなんて、ない……）

名前がないことに疑問すら抱いたことがなかった。それよりも、食欲を満たせと、頭の中で命令が響き渡る。染み出す唾液が示すように、卑しく、浅ましく、本能のままに。

「ぐ、ぅ……そろそろ……だ」

（あ、くる……ぅ……！）

自問自答をさえぎるベストのタイミングで、父の感極まった声が響き、ドクリと猛った肉の幹が膨れ上がる。窄め、擦り寄せた頬裏肉が押されて拡がる。

それを合図に跪いていた腰を浮かせ、M字開脚でつま先立つ。こうするといつも「まるで犬がお預けを食っているようだ」と、あるじが悦んでくれることを知っているから。

今も真上から見下ろして、なんとか股布が食い込み浮き上がる肉厚のスジマンを覗こうとしている。愛しい人の荒々しい鼻息と視線とを感じる。

（ふぁ、あァァッ……み、見てる、ケ、ケダモノを蔑むみたいな目でぇぇッ……）

背後の男もまた、食むように生地を食い込ませた桃尻へと鋭い視線を突き刺してきていた。

（股に、尻にも……視線、感じるぅぅ……ねっとりと、絡みつくような、やらしい視線がぁ……！）

特務のスーツではさえぎれぬ性欲まみれの熱視線を股間の前後両面で余すことなく受け止めるたび。舌は染み出た唾液で滑りを増し、糸引きながら牡の幹を這い進む。

ドロドロに溶けた喉奥で居座る亀頭を受け止めて、泥濘ごと締めつけては歓待し。開いたばかりの股からもジュワリと分泌したての蜜が染む。

「いい顔だっ……はは、間延びした鼻下がみっともないぞ、ッッ、おぉぉッ！」

「んぼっ！　ぶぢゅりゅっ！　ぢゅっ、ぢゅづづ、んッぢゅうううぅ〜〜〜！」

著者近況　試行錯誤とチャレンジを繰り返してきた本作も、いよいよフィナーレと相成りました。最後の最後まで挑んでおりますので、ぜひ。お楽しみいただければ幸いです。

ぬちゃぬちゃと粘濁音を聞かせながら、貪欲に肉棒を啜る。その際にどうしても鼻下が伸びてしまう。卑しい肉奴隷の証――女ではなく牝である印。この顔を彼が好きだと知っているから。また自身も見られて恥じらいながら昂れると理解しているから、あえて。媚び、蕩けた瞳を上向けて晒す。

（もっと、もっと私を……見てぇぇぇっ）

必要とされる喜びと、肉自体が欲する、たぎるような悦びと。両方に悶え、溺れながら舌を動かし続ける。ペニスに浮き上がる血管を舌先で圧迫し、父もまたたぎる肉欲に身を貫かれていることを確認し、竿に這わせた手をスライドさせてシコシコと扱く。もう一方の手は玉袋全体を包んだまま、繰り返し繰り返し。親指の腹で中央の色の違う縦スジ部分をなで上げ続けた。

「うぐ……！」

性感帯をしつこく刺激されて、上ずった声で牡が鳴く。

「ふぅ……ン、ンゥゥ……♪」

父の手で乱暴にもまれた右胸の奥がキュンと切なくうずいて、牝もまた甘い声を忍ばせた。

（掻きたい、掻きむしりたいィィィッ……！）

がに股の芯がジワジワ染み出た蜜で蒸れ、無性にむず痒い。汗ばんだ熱と淫液が密閉されてこもり、特殊スーツにまで染みついて、なお股布を食い込ませる。

（う、しろもぉ……♪）

ヒクヒクとしきりに開閉する尻穴を覗かせる、臀部のほうも同様だった。妙にねちっこい熱を帯びた若い視線を浴び続け、火照っている分よけいに熱がこもり、深く食い込んだ布地が谷間と肛門を締め上げる。尻の丸みを汗が滑り落ち。

うるさいくらいに昂った胸の先が、スーツの裏地と擦れあい、また同時に喉元を牡の幹で扱かれた瞬間。再度眼球がぐるりと回り、半開きのまぶたからみっともないイキかけの面を晒した。

「ふもっ、んっ！　んももおぉぉぉ～～～♪」

胎の奥と脳天を貫いた甘撃に耐えきれず。否、我慢しようともせずに、まるで発情した牝牛のごとき鳴き声を、ペニスを咥えたままの唇が発してしまう。

「くははははは！　いいぞ！　今日のお前はいつも以上に恥じらいがないっ！　ぷ、くくっ、まったくとんだ牝牛めがッ！」

ぎゅむっ、ぎゅっ、ぎゅむぅっ！

（ひゃぁぁぁいいいっ、ちっ、乳首ぃっ！　ネジネジぃイイぃぃぃっ！　痛気持ちイイっ……！）

スーツ越しでもはっきりと位置のわかる勃起乳首を二個いっぺんにねじり、つねり上げられ。五倍増の快感電流が、乳腺を通り抜けて心臓へとダイレクトにぶち当たる。

「乱暴にされるのがイイのだろうっ⁉」

罵られ嬲られながら受け容れる被虐の悦楽。そして目眩と、意識の混濁。

勝手に染み出た唾液を潤滑油に舌先が滑り、あるじの陰毛をベトベトにするほどなめ掃いた。

「おごっ！　んぶぢゅぢゅぢゅりゅぅ！」

気道にまで侵攻した牡肉がぬめった肉の感触をじかに捉え、好き放題に弾んで、カウパーを吐き散らしては擦り込んでいく。

息苦しさと圧迫の不快感に眉をひそめながらも、なお強い空腹感と支配される悦びとにはまり込み。吸引を中断し離れようとは、少しも考えなかった。

（はや、く、早くぅ！　らひてっ、らひてぇぇ！）

濃くてドロドロと喉元を滑り落ちる、白濁の食事が欲しい。何度も唾液と掻き混ぜ流し込まなければなかなか胃にまで落ちていかない、粘り気の強い臭い汁が――。

「ぐぅ、おッおォ！　じゃからそんなに亀頭ばかり……こ、この欲張り娘がァ！」

出っ腹を揺すって、マスターが歓喜の鼻声を上げる。舌の上で転がした亀頭も、ビクビクと飛び跳ね、また大量の先走りを噴き上げてくれている。

もう、間もなくだ。すべてが終わればあのおなかに枕代わりに、甘えさせてもらおう。

びぐんっ、びぐびぐっ！

期待に踊らされて舌を蠢かせれば、すぐに熱く爛れた鼓動を解き放って応えてくれる。

しきりにクリクリと乳首をこねる乱暴な手つきも、荒く真上から降り注ぐ鼻息も。脂ぎった汗の滴りさえ、この身を焼き尽くすほど愛おしい。

（もっと、もっとぉっ……もっとたくさんッ私を愛してぇぇぇぇっ……！）

絡めた舌先でまんべんなくまぶした唾液が、唇からこぼれて出るたび。間髪いれずに左手で玉袋にまで擦り込んでやる。ヌチャヌチャと卑しい音色が鳴り響く。

そうして得た密着感。相手の温度と鼓動とで昂奮を図ることができる、求められていると実感できるこの瞬間が、たまらなく好きだった。

「ふ、ふひィッ、イクぞ、出すぞぉぉぉっ」

牡豚がごとき鼻声で、愛しき人が吠え盛る。

限界を知らせ舌の上で暴れる肉の切っ先を、声のビブラートに合わせて段階的に、喉の肉でくるむように押さえつけ締め上げた。ぬめる先走りを搾り取り、なおその奥に溜まるより濃い白濁を求めて扱き、絡め、締めつけて――互いの肉が溶けあうかのような密着感を貪るように堪能し。

（あ、ぁ……く、るぅ……！）

陶酔しきって霞む脳裏に、牡の臨界を伝える鼓動が白熱のシグナルとして伝わった。

「ひ、ひひっ、そぉらっ……！　食ら……えッ！」

『……！　……ッッ！』

著者近刊 『戦乙女ヴァルキリー2　ヒルデガード～堕つる大地～』『戦乙女ヴァルキリー2 アリーヤ～孕む残月～』『淫舞の巫女姉妹 弐 孕みし者のさだめ』『恋人は女神さまっ』『プリンセスラバー！ 藤倉優の恋路』 好評発売中！

（な……に？）
マスターの悦びの声に混じって、誰か別の声が聞こえた気がする。同時に、窄めっぱなしの尻肉とその谷間へと注がれる熱視線を思い出して――ドクリ。昂りきった胸先がスーツと擦れ、腰骨が蕩け、視界が霞むほどの衝動を味わわされる。
――どびゅぶぅぅぅっ！
「むぐぅぅっ⁉」
背後に気を取られながらも熱心に絡め続けた舌先に、第一陣――ぷりっぷりのゼリー状白濁汁が突き刺さる。
（ひあぁぁぁぁぁ♪　これっ、これぇぇっ……！　この、苦クサい味なのおぉぉぉっ）
マスターの精は義体化ペニスのおかげで、いつも特濃で粘つきだって格別だ。上下の歯の間で放たれた白濁が糸を引いて垂れ下がる。プチプチと濁液の弾力を噛み締めながら、軽く、まだ吐精に夢中な幹へと歯を突き立てれば。
「ぬおふぅ⁉　ひっ、ひひひぃ～ひひひ！　そんなにうまいかッ！　くれてやる！　一滴残らずッ！」
ぼびゅ！　びゅるぶッ！　びびゅぶぶ！　びゅッびぐぐぶびゅッ！　びぶうううぅぅぅッッ！
「んぶッッ♪　ふゥ……ふゥッ、んふぅぅンン！」
美味しい、おいしい、オイシイ――！
（いくらでも、おなかがたぷつくまでぇっ……もっともっと飲める……ぅぅぅ♪　奥までぇっ、流し込んでええええぇぇぇッッ！）
粘っこくて絡むゲル状汁を嚥下する、その都度。同期して高鳴る胸の先が故意に収縮させたスーツに締めつけられて悶絶した。頭の芯と腰の芯。両方でひっきりなしに白熱の花火が爆ぜ散り続ける。
「ぢゅっぢゅるるっ、ン……んふぅぅぅおォォ♪」
イク――くぐもった声で告げて、よりいっそう股をガバリ。広げて突き出し、唇を亀頭まで引いて、浅ましい牝豚の身をあるじが見下ろせるように。
ぷしゃ、ぷっ……びぐびぐびぐッッ！
揺らぐ足をつま先だけで支え、M字の股根に浮かぶ濃い絶頂汁の染みを見せつける。
後ろの男からは、きばって窄んだ尻肉のフォルムがひと際あらわとなっているのだろうか。想像だけでさらなる高みへと一段上り詰め、また。
（イクッ、またっ、お食事しながらっ、ミルク飲みながらイカされちゃうぅぅぅ♪）
息苦しいのも構わずに啜り飲むのは、白濁のみならず。こぼした唾液、そして目尻に浮かぶ嬉し涙に、鼻孔から漏れた鼻汁まで。混濁する脳裏に混濁する液のネトつく感触を染みつけ、牡汁の噴出する脈動に合わせて下肢から止め処なく、暗く蕩ける愉悦とともに絶頂汁を漏らし続けた。
どぶっ……びゅっ、びゅるる……。
（ふゥ、ぁ……♪　まだ、出て……るぅ……）
こぼさずに飲み干さなければならない。竿に残る汁まで搾り取ってから、空となった精子臭い口中を晒す。そこまでが、ミッションだ。
それに、ずっとこれを待っていた。マスターが出してくれた大事な、大事な食事なのだから――。
「口一杯に溜め、味わうように舌で転がしてから飲むんじゃぞ……！」
鼻息の荒さに反比例して徐々に鎮まりゆく逝りの勢いを寂しく感じながら、最後の一滴まで。すでに汁と汗でヌルヌルの両手両指を駆使して搾り取り、命じられるまでもなく日々の習慣を実行してから、にこりと微笑。
「ごひふぉうひゃまれひらぁ……♪」
ご馳走様でした――まだ砲身を咥え手放さぬまま謝礼をし、満面の笑みを浮かべる。癖づけられた一連の所作を完璧にこなし終えるころには早くも、口中のペニスが再び硬度を取り戻し始めていた――。
テロ組織「イージス」の壊滅から、はや三年。その三年は長いようで早く、ただただ空虚に、無為に過ぎ去った。
（そう、ただ日々が過ぎゆくだけの三年だった。あれに比べて……）
今こうして過ごす時間のなんと歯痒いことか。
「ふぅあァァ……っ」
爛れた嬌声の響く広々とした室内。高級ホテルの一室で拘束されたまま事を見届けるジャンにとっては、怠惰な三年よりもずっとここ数日のほうが長く険しいものに思われた。
部屋の中央に設えたキングサイズのベッドがちょうど真横から見渡せる場所。無駄に豪奢な絨毯の上に正座状態で座らされ、両足首は足枷で、後ろ手に回された両腕はギターケースのような形状の拘束具ですっぽりと二の腕まで覆われて固定されている。
「ん？　どうしたね。腰掛けたままの姿勢が辛いのなら寝転がってくれて構わんよ」
ベッドに腰掛けた初老男が笑う。
国家のトップシークレットである強化義体技術の一部を、陰でイージスにも提供し内乱を長引かせた元凶。特務機関の標的。強化義体の生みの親でもある科学者は、不敵に出っ腹を揺すり、ニタニタと気色の悪い笑みを浮かべ、視線を寄越し続けていた。
その男の前に、もうひとつ。懐かしくもあり、忌まわしくもある存在が、直立不動で立っている。
「マス、ター、ァァッ……」
妖美なる肢体を漆黒の特務機関用スーツで覆い、甘えた声で鳴く、牝。かつて女捜査官であった彼女を、知っている。
凛々しさの欠片もなく嬉し涙とよだれと、先だってぶちまけられた精液の残滓で濡れ光る顔をさらに歪め――かつて、黒崎京子という名を持っていた肉

人形は媚びた声音を吐いていた。
記憶を消され、ただ廃棄処分を待つだけだったはずの、かつての恋人の抜け殻に。今は、肉欲の虜としてプログラムされた紛い物の魂が宿っている。
「しかし驚いたよ。まさか君がここまで追ってくるとはな」
「特務の仕事は国家の安定を図ることですよ」
国家に仇なす禿頭の初老男に、それとなく揺さぶりをかけてみる。
「ハッ。てっきり君はこの人形が恋しくて追ってきたのではないかと思ったが」
どうやら自身が罪に問われる危険性など微塵も感じてないらしい。
「戦いなくしてここまでの強化義体技術の進歩も成し得なかったのだ。ククッ……結果的に国家の安寧を招くことになったのではないかね？」
正面に向きあって立つ女の尻を見せつけるように抱き寄せ、なで回しながら、また男が笑っていた。
（己の能力を誇示したかっただけだろうが――）
詭弁の奥に見え隠れする、科学者の虚栄心と自己顕示欲の強烈さに、吐き気すら覚える。
「そう……ただ必要なプロセスを踏んだに過ぎん」
あるいは自身を納得するために編み出した言い訳を、真実だと信じ込もうとしているのか。
「ふぁ……っ、ン……」
喘ぐ女の表情を独占する悦びに打ち震えながら、
「私にとってのコイツは、最新技術の詰まった、動く見本品（サンプル）に過ぎんがね」
性処理も兼ねているが――脂ぎった額の汗をぬぐって、科学者は言い放ち、再び性行為に没頭し始めた。
「むぢゅっ、ぢゅぢゅぢゅぅぅっ！」
抱き寄せた女の股に顔を埋め、擦りつけて、鼻先で恥丘を押し込みながら舌を這わせる。
「ん、ァッ♪　そ、そこっ、奥まで感じてしまいます、ぅぅ……♪」
女の背に隠れて全貌を視認できずとも、その女自身の嬌声や反応から、容易に行為の全容はつかめた。
かつては、自分自身そうしてあの身体を抱いた経験があったがゆえに――。
（あれは京子じゃない。アイツは、俺がこの手で）
射殺した。その後にいったんは蘇生したものの、記憶を抹消されて、今後の強化体のサンプルとなるべく肉体だけが保管されたのだ。
だから、あれは京子なんかじゃない。そう思えば思うほどに、在りし日の彼女のぎこちない微笑みが――目前で別の男に尻を振る、卑しい牝の姿と折り重なる。
「やはりこの衣装じゃなぁ。ひひっ、ほれ」
「ひぁぁんっ」
スーツ越しにも位置が知れるほど勃起したクリトリス――意図的にスーツを薄くしていることもあるが、おそらくそこも肉体改造により膨張率を操作されているのだろう――を突かれたらしい京子の身体が、背を反らし甘い声をはね上げる。そのうなじに舞う黒髪も、あの日、この手で撃ち抜いた日と寸分違わず（たが）同じ長さのまま。まるで時が止まっていたかのような錯覚を植えつけられる。
「指に吸いつくようじゃ」
そのように皮膚組織を改造した己の腕を誇ってか、それとも卑しき独占欲からか。女の尻の向こうから視線だけ寄越した男が、自慢げに言い放つ。
君も楽しんだのだろう――そう言われているようで酷く、奴の手でもみひしゃげる尻肉を見つめるほどに嫌悪と憎悪が胸を突く。
「くぅ、ふっ、ぁ！　そ、こ……っ、お尻は、ぁ」
男の指が偶然を装い、尻の谷間を滑り下りてアナルへと触れる。過敏に尻と背筋を揺らした女の姿を見せつけてくれてでもいるつもりなのか。男は執拗にスーツ越しの尻穴を責め立て、突き立てた中指をツプツプと浅く出し入れまでしてみせた。
「ぢゅるぅっ！　ふふ、相変わらず汁気が多い。もうスジがくっきり浮いておるぞ……むぢゅるぅっ」
「ふぁ！　ぁあ、いぃっ……申し訳、ございッ、イイぃっ……ませぇんっ……」
喘ぎ喘ぎ謝る女の声のリズムに合わせて、しゃぶりついた初老男の舌がスジ状に浮いた割れ目をなめしゃぶっているのだろうか。
（チッ――！）
冷静さを望む心境に相反して、ギリ、と歯噛みの音が残響する。胸糞が悪くなるほどとぐろを巻く悪感情に比例するように、漂う女の甘ったるい臭気が濃密となり、鼻を突いた。懐かしいにおいにつられて、否応なしに腰の奥が昂り出す。
「ひァ……ッ、〜〜〜！　クリトリス、クリクリっ、きくぅぅ……！」
揺らぎ甘い香りをまき散らす女の尻に、シワまみれの指が十本。根を張るがごとく食い込み、所有物だと主張するように目一杯抱き寄せていた。脱力し身を預けた女の蕩けながらも弾んだ声が、あるじへの強い信頼感を示している。
――かつて、特務がそうしたように。目の前の男の手によって記憶操作を施され、プログラムという名の拘束具でがんじ搦めにされているのか。
「んぢゅるっ、ぢゅづづづづづ！」
女産型の尻が、男の舌と指の動きに合わせてまた左右に躍る。唾液たっぷりの舌で股間をなめられ、ほじられてふやけた声を紡ぐ彼女の姿は憐れなほどに淫猥で、蠱惑的だった。
（見届けて、やるさ――）
それが一度は彼女を壊し、殺した自分の役割なのだと、心底で言い聞かせ。決して背中以外は見せぬ彼女の、揺らぐ尻肉を穴が空くほど見つめ続ける。

昂る胸の鼓動に合わせ腰の奥で鳴り響く肉の鼓動は、目眩がしそうなほどに甘美で、舌を噛み切りたくなるほどに屈辱的だ。

ハッ、ハァ――自然と、荒ぶる吐息が漏れてしまう。耳聡い初老男の勝ち誇った視線と嘲笑が頭ごなしに降り注ぎ、否応なしに肉の鼓動はさらなる高みへと上り詰めていく。

「んはッ……！　マス、タぁっ、も、お……もぉっ」

「んん～？　もう、なんだ」

理解できているだろうに、わざとはぐらかしながら男の舌がビチャビチャと湿った音色を響かせる。女は焦れたようにひと際尻をもじつかせ、それでも人外の膂力で暴れることなく、従順に男の腕の中に身を預け続けた。

「は、ひッ……おね、がいですっ……もぉ、イかせてっ、イかせてください、ィィッ……」

尻の谷間がスーツの生地を食むようにひと際食い込ませ、執拗な懇願も相まって貪欲さを印象づけられる。

「いいだろう。では、いつものアレを」

「は、ぁい……ンンンっ」

すぅッ――。

（……！）

悦びと喜びに溺れた女の特殊スーツの臀部。そこだけがくり抜かれたみたいに消失し、汗ばみ、赤らんだ尻肉そのものが出現する。昂奮と羞恥のためのみならず、今日だけでも両手で数えきれぬほど平手でぶたれ腫れた双臀には、彼女が科学者の所有物である何よりの証が黒々と刻みつけられていた。

谷間に食い込んだ純白の、股間の谷間のみようやく覆う極少ショーツ。その両脇、左右の尻たぶにコウモリが翼を広げたがごとき漆黒の文様――刺青が彫られている。

「こいつを彫った時には、何度も漏らしたもんだ。なぁ？」

「ひぁんっ、くすぐった、ぁ、いィですぅっ」

初老男の指がくるくると、幾度も幾度も刺青を掻く。その都度胸焼けがしそうなほどに甘い響きを吐き、漏らしながら。

「そ、うですぅ……ズキズキ気持ちよくってぇ……何回もイッて、も、漏らしてしまいましたァッ」

男の腹の下で悶える黒髪の女が、浅ましく突き出た舌より滴るよだれごと、淫堕な告白をぶちまけた。

へその下あたりから尻たぶの下弦まで。その部分だけが切り抜かれたかのように露出した女の尻が、あるじの手でもまれ、歪に、淫らに形を変える。

「ひぁぁ、っん！」

身体を前のめりに、くの字に畳み、たっぷりとした乳の先を男の頭に乗せた女が浅ましく尻を振った。

「ふん、またこんなに腫らして。相変わらずはしたない穴じゃのぉ」

「は、はァ……ぁいッ、いつも、イヤらしいおつゆをこぼしてしまう、いっ、卑しいオマンコですぅっ、ぅあ、あぁぁンンっ！」

揺れる乳の突端――スーツ越しにもはっきりとわかる勃起乳首を、自らくねることで執拗に、何度も禿頭と触れ合わせ、少しでも多くの肉欲を貪ろうと足掻いている。突き抜ける肉の甘美に蕩ける舌を突き出し、震わせて牝が鳴く。

（ぐぅ、ぅッ――）

また。相変わらず。いつも。

行為の日常性、常習性をうかがわせる一言一句に、逐一反応し、苛立ちを強めてしまう己が惨めでならなかった。

女の身から極薄の特殊生地が消失した分だけ、心の防壁までもが剥ぎ取られてしまった。そんな錯覚にすら襲われて、屈辱がよりいっそうへその奥に根を張り巡らせる。

「ぁひ、ィあ！　あっあぁあっ！　っひ、くふ……うぅぅ、も、イキっ、まっ、あァァはぁぁぁ～！」

おそらく男の舌の蠢きに合わせて艶声がリズムを刻む。合わせてもじつく肉厚の尻たぶに浮かぶ、追従の証。コウモリの両翼をしきりになで、もみ潰しながら、肥え太った豚のごとき鼻声と蜜を啜り飲む粘濁音とが、絡まりあいつつ室内を埋めていった。

「ぢゅ、ぢうぅぅぅ！　れるぅっ！　れぢうぅぅっ！　ほぉれ、イケ！　いつものように……いや、いつも以上にはしたなく潮噴いて果てるがいい……！」

ヂュパヂュパと、ショーツごと蜜を啜る音が勢いを増す。時折リズムが変わるのは、舌を膣口に突き立て、内部までむしゃぶりついているせいか。

「ほじほじっ、きくぅぅ……!!」

男の執拗なスジなめに負けず劣らずの貪欲さで、女は乳首を主人の頭に擦りつけ、股間を顔面へと押しつけていた。

女の尻が窄まり、引き攣れて、にじんだ汗を振り落とす。もう、じきだ――かつて毎日肌を重ね合わせた経験から、気づかされてしまう。もう、間もなく、彼女は、俺ではない他の男の手と舌で絶頂に導かれるのだ――。

「れぢゅりゅるるるるっ！　んぽっんぶぢゅぶるるるっ！　ぢゅっぽぢゅっぢゅづづづづぅぅぅ！」

クリトリスをついばんだまま、初老男が肺一杯に息を吸い込み、同時に噴き出た蜜汁を胃袋に収めていく。

びくンッ！　びぐっ！　びぐびぐっ！

「やぁはっ！　ぁひ！　ひっ、い、イィィッ！　いぐふぅぅぅ――――！」

あまりにもあっけなく。それでいて底抜けにイヤらしく。牝の香りを振り撒きながら、残響する女の絶頂の証。切なく、甘く、悦びに満ちたその声はし

つこいくらいに広い室内に響き渡った。
「ひぁあぁぁ！　あッ！　あ～～～……!!」
揺れておぼつかぬ足取りで、牝は主人にすり寄り、しがみつく。前のめりに身を預けた彼女の横顔から表情が垣間見えた。
（ッッ――！）
安堵と至福に満ち足りた、見慣れてた顔だった。かつては毎日毎晩この手で抱き締め、腕の中から覗かせていてくれたはずの――他の誰もが見たことがないはずの――この身だけが知っているはずの。
「むぢゅるるる！　んぶはっ！　ぢゅっ！　ぢゅぶぢゅ！　ん～ぢゅづづづぅっ！」
「はひぃッンンン！　イっ、へまふうぅぅ……！」
ろれつ妖しく舌を回し、よだれを吐きこぼしてなお尻を振る。男に押しつけた尻の谷間、おぼつかぬ脚の股根からは啜り飲みきれなかった蜜汁と混ざりあい、黄ばんだ汁までもが滴り落ちてゆく。
「むぼっ！　まぁだじゃぞっ、まだっ……ほぉれ、ほれほれっ！」
ぢゅりゅるっ！　ずぼっぶぼぶぽォッ！
「ひゃひッィィィ……～～～……！」
容赦なく、肉まで啜る勢いの牡に責め立てられて女は続けざまに潮を噴く。
（なんて、ツラしてんだよ――！）
自ら振り撒いた唾液でベトベトの赤ら顔。肉欲に蕩けた瞳を振り向けて、京子に似て非なる女はあるじに鼻声で応えていた。
見るまいと思っても視線を外せない。胸に渦巻く憎悪と嫌悪の増幅に比例して、ガチガチに張り詰めた逸物がスーツを内から押し上げる。惨めな昂揚に侵されて、自尊心は砕けて散った。
「さて。それでは……」
「は、はぁ……ぃっ……♪」
ひとしきり噴き散らしたのち。ようやく解放された女の肢体は、自らの意思で再度男の出っ腹にすり寄っていく――。
「ァ――はぁ、ぁ――……！」
自らの指でめくり寄せたショーツの脇から、ズブズブと。胎の奥が満たされていく感覚に浸りながら、あるじの上に腰を落とした。
あっさりと膣の底にまでたどり着いた肉の切っ先が、悦び勇んで鼓動を放ち、子宮を揺さぶり立てる。女としての至福を味わわせてくださる、唯一無二のマスターへの恋慕が限りなく噴出し、汗と、嬌声と、蜜液とともに全身から染み出していった。
「ふんっ、欲深なやつだっ……」
喇りながらも、嬉しげに肉の棒を猛らせて、絡む膣肉のヒダをゆるゆると擦り立ててくれる。
「ふわ……っ、ぁ！　申し訳っ、ございまぁぁっ！　ございませんっ……ンンぅ！」
焦らす腰つきにまんまと乗せられ喘がされ、淫らな腰振りダンスを引き出させられる。それすら「あるじの求めに応えている」という従属の喜びを芽生えさせてくれる至上のスパイスとなりえた。
（ぁ……また……見ているっ、あ、熱い、執拗な目で……ぇ）
マスターに騎乗位で跨がる裸身と、ちょうど相対する真正面。ベッド下の絨毯に拘束されて正座で座る男。相も変わらずの彼の熱視線がスーツに覆われた肌に、下着からはみ出し剥き出しの結合部へと突き刺さる。
不思議な瞳をしたやつだと思った。憐れむようでもあり、慈しんでいるようにも見える。それでいてねっとりと熱を孕み、特務スーツの奥の素肌へと染み入ってくる。
この視線をじかに味わいたくて、今の体勢を選んだのかもしれない。そう思わされるほどに、やたらと彼の視線は肌に馴染み、切なさ混じりの快愉へと身を引きずり込んでゆく。
「ハハッ、好きなだけ見てもらうといい」
ベッド下の男に脚を向ける形でシーツに身を沈ませたマスターが、心底嬉しげに言葉を紡ぐ。
（私を見せびらかして……あぁ、私を自慢してくれてるんだっ……）
侮蔑に満ちた声の響きすら、愛おしい。
「はぁ、ぁイッいィ！　見てっ、もらいますぅぅ！　んぁッあッあぁぁッァ――」
真下のあるじに蕩けた瞳で応じてから視線を再度真正面へと戻せば、不敵な――それでいて妙に憂いと苛立ちを帯びた男の視線と衝突する。
パンパンと肉同士がぶつかる淫堕な音色。わざと腰を派手にくねらせ、絡まる淫音で自らとマスター、そして彼。部屋に潜む者すべての耳朶をくすぐった。
「漏らさぬように、締めておけ……！」
「ふぁひっ、はッ、ァいッ……！　オマンコ締めたままっ、ズコズコいたひっ、まふぅぅっ」
汗のにじむ手のひらで尻を乱暴につかまれ、つねり上げられる。小さく鋭い痛みと甘美に腰震わされて漏れ出かけたのは、蜜壺にたっぷりと溜め込まれた愛液のみならず。掻き混ざる粘着質の水音。その源は大半、先だって胎が膨れるほど注ぎ込まれたマスターの子種。白く濁り、濃く粘る白濁液がもたらしたものだった。
「……年も年でしょうに。ポックリとイっちまっても、医者は呼べませんよ」
猿ぐつわを噛まされていない虜囚の口は滑らかだ。男が拘束された四肢をこれ見よがしに揺すって見せつけ、皮肉めいた台詞を吐き捨てる。
（じっと……っ、見てる、ぅっ……あいつの視線がアソコに……垂れかけの子種をはしたなく啜って引き戻す私のっ、股の奥をぉっ……！）

大量の蜜と注がれ滴った子種とで湿り、水着のように肌に吸いつくショーツに、真新しい蜜が染む。
マスターへの侮辱に怒りを覚えるよりも、熱視線を浴びた子宮のうずき――腰の芯からむずむずと甘くくすぐる焦れったい刺激への歓喜が先に立った。
「腹上死かね？　ありえぬ話ではないな。この穴は具合がよすぎる。――だが、まだまだ食い足らんよ」
鼻でせせら笑い。一糸纏わぬ裸体の腹を、つかまれたままの尻に押しつけてくれる。
「くゥンッ、あ……！」
応じて尻を擦り寄せ、腰を回せば、凶悪な角度で張った肉傘のエラが膣肉の上部を擦り。切なげに吐息を漏らせば、あるじは優悦に浸った声を弾ませた。
「だが、毎夜毎晩この人形とベッドを共にした君の言葉とは思えな。ジャン君」
黒髪を無造作に引っ張り上げられて、わざと快楽に咽ぶ面を虜囚に見せつける。
「ぁひっ、いっ、イイっ。はや、くぅっ……もっと、奥までずぷぅーってきてぇぇっ」
あるじより放たれた言葉を聞き取れぬほどに。マスターからの所有物宣言に、拘束された男のいきり立った視線。そのどちらもが女の身の奥底までも火照らせ、蕩ける快楽で思考回路を麻痺させてゆく。肉棒を挟み込んだ膣肉から、ネチッこい蜜を染み出させる。
「うぐ……ふ、ふははっ。とんだ欲深娘だッ」
禿げた頭頂をなで擦りながら、にやけた面を堂々と晒し、人形の持ち主は自信に満ちた様子で肉棒を弾ませて腰を振り続けてくれる。
「ァァ……くふ、ゥんっ、ご主人様のおちんぽぉっ……イィッ、ですぅぅっ」
その上で、突き上げられながらただただ、啼く。人としての矜持すら失くしただらしなくふぬけた顔つきで、ケダモノじみた鳴き声を上げて――。

服従する悦び。肉体と心にプログラムされた至上の喜悦にまみれ、沈みながら、何度も。何度も肉棒のカリと、折り重なる膣ヒダとをすり合わせた。
「お、おォッ……どうせ、生身の君ではドールには勝てまい？」
ドクンッ――また、強烈な牡の鼓動が胎の奥で轟く。嬉しくて、腰と脳髄が蕩けるほど心地いい。
（そう、だ……あの男は敵、だからぁっ……命じられれば、いつでも殺す、コロスぅぅぅっ）
マスターは「廃棄処分だったところを拾ってやったのだ。当然だろう？」と、出っ張った腹を揺すりさも楽しげに、笑い、昂奮し。よりいっそう硬直した怒張で牝の穴を突き、掻き、ほじくり回す。
キュンキュンと鳴き声を発するようにうねる子宮から、また。大量の蜜汁が腿まで滴り付着する。汁気を吸い尻の谷間や股間へと食い込む下着の感触にすら腰が震え、歓喜の喘ぎが迸り。
「そ……らっ、もっと締めんか！　この！」
一度精を注がれたことでほぐれ、真新しい牡の味を欲して引き攣れている膣穴。朝から晩まで乾く間もなくぬかるんだ肉の洞穴を我が物顔で蹂躙する牡の切っ先が、トロトロの膣ヒダを強かに掻きむしり、止め処なく分泌した蜜液が掻き混ざる。
「い、イッれふ……っ！　奥まで届いてぇ……っ、子宮の入り口をこじ開けようとして、ぇぇっ！」
きつい肉洞でより自己主張するように猛々しく膨張した肉の幹が鼓動して、内側から圧迫される。その、息苦しさと同時に味わわされる「胎を満たされる」至福の悦びに息詰まる。執拗に叩かれ、すり鉢のごとく擦り立てられる子袋の扉もまた、貪欲に亀頭の先の割れ目へとキスをした。
「お、ぅ……！　そんなに精が欲しいかっ!?」
「は、はぁいっ、ほ、欲しっ、れすっ、うぅ！　マスターのっ、こだねぇぇっ……！」

あるじの喜びを悦びとし、いついかなる時でも従属する。突かれ、躾けられるたびに胸の奥が高鳴り、幸せを延々と注いでくれるのだ。
（それだけが私の、幸せっ……だからぁぁっ！）
子を産めぬ身体だと理解してはいても、女としての本能が悦び、勇んであるじのペニスをひと際深く咥え込む。汁気たっぷりのショーツが、真下からの突き上げに合わせ淫らな水音を響かせた。
その有様のすべてを、じっとあの男が――床の上で微動だにせず見つめ続けている。
（なぜ、だろう……あの男に見られてると思うと）
より強く。膣内ですがり蠢く肉壁の動きが体感できるほどに、ギチギチと胎の中の男根を締め上げてしまう。
「どこに欲しいっ」
バシバシと尻を叩かれて、匂い立つような汗を噴きながら、舌を突き出して躊躇なく叫ぶ。
「中、ァァッ……おなかの奥にっ、中にぃぃっ。たくさんっ、たぷたぷするくらいっ、そっ、注いでくださぁいッ、くぅあぁぁぁンッ！」
即答だった。言葉の先を読み、あるじの悦ぶ台詞を吐いて――そうして、肉欲の虜たる牝人形らしく、甘美に震える尻を振る。
（そうだ、もっとその目で私を……見ろッッ）
抜き身の刃を思わせる冷たい輝きに満ちた瞳。その中にわずかばかりの感情が揺らめいている。人を寄せつけぬ空気を纏っているふてぶてしい虜囚の視線が、なぜだか無性に欲しくてたまらない。
「そうか、中に欲しいかッ！　ふははっ、孕めるわけもないのになァッ」
吠えながらも腰振りの激しさ衰えぬあるじが、狂気じみた哄笑とともに唾をまき散らす。
「は、はひぃっ。ほ……しい、ですぅぅっ」
昂奮した肉棒がひと際膨れ、悦んだ膣肉が締め上

がり、自ら牡肉の感触をより強烈に感じ取る。狂おしいほど胸躍る身を揺すって髪を振り乱し、涙ながらに懇願した。

ジッ――。

（――!?）

甘美と陶酔の中、不意に脳裏に浮かぶビジョン。

『子供……か』

見知らぬ田舎街で、遊ぶ子供と連れ添う母親を見かけ、羨ましげにつぶやいた誰かの横で、あの男が――今まさに虜囚となっている彼が微笑んでいる。

ジジッ――!

『そうだな……まずは男の子で、でも、女の子も欲しいかな』

違う声をした、髪の長い女の横で、希望に満ちた表情で未来を語る若者の姿。

まるでテレビ映像をザッピングしたみたいに次々まぶた裏に浮かび上がる光景。それは妄想などでない、リアルな質感を備え。見知らぬものばかりなはずなのに泣き出したくなるほどの哀切が揺らぐ胸の奥で湧き立つ。

つながる股根からあふれる肉欲と歓喜。脳裏を埋める混乱と苛立ち。戦闘人形には不必要なそれらが混然となって煮えたぎり。狂ってしまいそうな感情の渦の只中で、すべてを忘れようと、ますます腰は激しく上下に弾んでゆく。

「ひぁ、あ、あッ！　あッ……ひ！　ンくぅぅ！」

虜囚の彼が、絨毯の上で噛んだ唇から赤い血潮を滴らせている。赤の他人の痛みが昂る胸の鼓動に同調して、むず痒い甘美にすり替わるような気さえして――。混濁する感情は、募り募ってしびれるような肉の愉悦と溶けあい、全身の毛穴という毛穴から茹だるような熱を伴って噴出した。

（ひは……っ、ぁ！　じりじりっ、身体の奥から灼けつく、ようでぇっ……！）

同時に焦らされた胎の芯が多量の蜜を噴き上げてマスターの亀頭へと吸いついた。絡む蜜汁の粘り気も手伝って、まるで子宮自体がドロドロと溶け出したかのような気さえする。

「子種を欲しがって中がうねってきおるわッ！」

よだれをこぼしながらくねる牝尻を押さえ込まれ、ことさら緩やかなピストンを見舞われた。掻き出した蜜汁でぬらついた砲身に、凶悪に張った義体化済みペニスのカリ首まで。交合に咽ぶ肉棒はおろか、そこにすがり絡みつく牝の肉穴の有様までを、わざと彼に見せつけているのだ。

耐え難いうずきにそれでも耐えて見下ろした先で、ニヤついたあるじは、腰を二、三度浅く回し。

「ククク、そんなにあの男が気になるのなら……！」

――ずぶぢゅぅぅぅッ！

「くひッ……イィィンッ！」

目一杯強く腰を押し出されて、よたよたと四つん這いの四肢が前進する。

「京……子！」

見知らぬ名を口にする、その虜囚の目の前まで追い立てられ、視線は自然と特務スーツに押し込められた股間の膨らみへと向かった。

「っふ、ふふ。お前の乳で慰めてやるんだ」

（こいつの、この、硬いのを。私の……胸で）

溜まった唾を飲み込んで、高鳴る胸の鼓動を意識する。欲しくて欲しくてたまらない。自覚すると、もう歯止めが効かなくなった。

「よ……せっ」

乾いた声を漏らす男を無視して、その彼のスーツを力任せに裂き、股の部分のみを露出させる。勢いよく飛び出た勃起ペニスを、むわりと拡散した熱気、臭気を吸い込みつつ握り締めた。

（ドクドク脈打って、乳が灼け、るぅぅ……っ！）

自らの意思で剥いた胸元に導き入れた、肉の棒の熱に感嘆し。貪るように左右より押し包む。

「どうかね。こいつの乳マンコは？」

優越に浸りきったあるじの声に意識が惹かれる。そのことに、なぜかこの時は苛立ちを覚えた。

「そう、簡単に終わってはな……！」

肉も心も。隅々まで味わい、辱めて、食らいつくすつもりなのだ。

「くぅぅ……ぁあァァンッ！　切なっ、です、ぅマスタァ……っ、性処理穴の奥が、マスターの種欲しがってッ、キュンッキュンしてるのォォォッ！」

そんな男に媚びた声を震わせ、尻を振る。同時に乳谷に挟んだ虜囚のものを、激しく上下に擦り立てた。谷間に垂らした唾液と、男の漏らすカウパーとが混ざり響く、淫靡な粘濁音。あるじに突かれるたび、結合部から漏れた空気が無様な音色を奏でていた。

こもる媚熱と鼻先漂う甘ったるい臭気にまで侵されて、何度も何度も頭の中が明滅した。

「もっと奥までぇ……おっ、お願いしますぅッ！」

束の間、脳裏に巣食うノイズが突き抜ける肉の悦楽に押し流されて掻き消える。どっと押し寄せる解放感に浸りつつ。

ぶぢゅっ、にゅぢゅぶぶぅっ！

たまりかねて腰を8の字に回し、そのまま大きく持ち上げた尻をドスン――。

「ひきゅぅぅぅンッ……♪」

へそ下から脳天まで突き上がる電撃のごとき甘美に、舌を出し喘ぎ狂う。こぼれた唾液は乳に滴り、挟まる肉棒の滑りと密着感が一気に増した。

ぼたっ、ぼたたっ……にぢゅぢゅぢゅぢゅぅっ！

「ぐ……ぅ！」

「遠慮せずにぶちまけるといい。私もすぐにこの肉マンコの中でっ……！」

眉をたわめた男のうめき声。勝ち誇るあるじの声。

白染め姉妹巫女

漫画 COMIC／かろちー

家路を急ぐ、清純な巫女――

ユキったら

ちゃんと掃除してるかなー

…

サボってたらお預けにしてやろ

ザッ

っ!?

なっ…ユキっ!!
貴方何を…
妖かし使い…!?
あっ
あっぅぅ…
やっとお戻り？
あやめお姉ちゃん
まぁ仕方ないわよね
未熟な巫女じゃ
…っ!?
ユキの…!!
さっきからこの子
お姉ちゃんお姉ちゃんって
それしか言わないの
つまらないったらないわ
おねぇ…ちゃ…

ユキを放しなさい!!
この化け物っ!!
ぴくッ
あっ
ブルブル
ジュブッ
ブシュルッ
化け物だって…?
トスッ
なっ
聞き捨てならないわね

しま…っ!!

ぐっうあぁぁっ
この…

なんて力…!!

ユキちゃんじゃぁあんまり
歯応え無くてねぇ…

今度はアンタが
相手して
くれるんだねっ!!

ギィッ
ギィッ

今度はこちらからっ！
っ!?
な…にを…っ!!
無駄無駄動けないよ
トカッ

そこの絞りカスよりは楽しませてくれるんでしょうね
キュッ
えらく暴れるからちょっと手加減ミスっちゃって
ユキ…っ
あっ…う…

でもあんたが今する事は
グイッ
自分の心配だよ
ズッ
っ…!?

じきに自分から欲しがる
ドッ
淫らな巫女にしてあげるわ
プッ
クチュ

ゴボッゴボッ
ギッボ
なに…これっ…!?
フフ…
口の中を弄る様に…!!
グプッ
グブッ
熱っ…!! 液体が…
ゴポッ
あっ お腹に入って…
ギュルン
ゴポォ
ゴポポ
体の中に無理やり押し込まれていく…
クプッ
コポッコポッ

イセリア英雄戦記
the legend of the Iserya war
第11話 淫辱のノイル砦
小説/NOVEL 夜士郎(よしろう)
挿絵/ILLUSTRATION 牡丹(ぼたん)
帝国と砂漠都市の侵攻を防ぐため、
北の国境へと向かうセリーヌだが、
砦はすでに落とされていた！
第二騎士団と攻城戦に挑む彼女を、
魔獣の肉棒が責め苛む!!

バーンドベルグと砂漠都市とが手を組んだ。その情報をイセリアに伝えて欲しいと、氷継に頼み、セリーヌは単身北の戦場を目指す。

向かうはイセリアの最北端。

ノイル砦――。

「セリーヌ殿。この戦いに協力してくれることを感謝する」

と、第二騎士団団長、イグナシオ＝グストゥフは、隣を歩くセリーヌに頭を垂れた。

黒い短髪の、人のよさそうな男だ。柔和な顔には、けれど戦人たる傷の勲章が幾筋も駆け抜けている。

「国に仕える者の務めだろう。互いに、な」

艶やかな、ロイヤルブルーの髪を靡かせて、澄んだ美貌を横に振る。

先頭を歩くふたり。背後には、五百人ほどの軍団が付き従っている。

戦場へ向かっているのだ。

アヴァルスからノイル砦へ到着し、セリーヌが最初に目にしたのは、砦の頂上でひらめくバーンドベルグの国旗であった。近辺にて駐屯していた、イセリア軍第二騎士団から陥落の事実と奪還作戦を聞かされたセリーヌは、自らも戦陣に加わろうと、イグナシオに参加を申し出て、受理されたのだ。

「強襲部隊は、今？」

「ああ、通路に入ったと報告があった。ただ、砦の中に潜入するにはもう少し時間がかかるだろう」

ノイル砦には、緊急時の避難通路が地下に掘られている。通路の入口は魔術的な隠蔽が施されているため、魔法を不得手とするバーンドベルグの連中には見つかりにくいだろう。

現在、編成された強襲部隊が砦に向かい、その通路を進行中である。

「そうか、なら……」

セリーヌは、クラウソラスをぎゅっと握り締め、

「陽動部隊としては、なるべく派手に引っかき回すほうがいいだろう」

「そうだな。可能ならば、砦の内側でも一騒ぎ起こしたいところだ」

と、イグナシオは背後に並ぶ、第二騎士団の面々を見やる。

紫電騎士団とも呼ばれているこの一群は、イセリア一の高機動部隊だ。

動きやすさを重視してだろう、チェインメイルやハーフプレート程度の軽装だが、両脚に嵌めた無骨な鋼の足甲が奇妙に目を引く。

その特性から強襲性の高い任務を受けることの多い彼らは、今回、ここノイル砦の奪還を命令されていた。

「ノイル砦を守っていた者たちは？」

「……連絡は、途絶えている」

「……そうか。中で、どのような目に遭わされていることか……」

「ああ。できるだけ早く助けてやろう。もう、リーム砦のような惨劇は、繰り返したくないからな」

沈鬱に、イグナシオは言う。

旅の最中に、耳に届いていた。

「落ちたとは、聞いていたけれど」

リーム砦とは、イセリアの、最北防衛線であった砦である。陥落せしめたバーンドベルグの軍は、男は皆殺しにして、女は陵辱し、さらには周辺の村々から女を攫っては軍人や魔物たちの性処理用具と貶めているという。

未だ、その悪行は止まらない。

（許せない――）

怒りが、湧き上がる。呼応するように、クラウソラスが帯電していく。

ごおごおと、風がうねっている。

目前に、魔の騎馬団があった。人と魔物の混在軍団である。

魔物の乗るに足る、獰猛な巨馬による騎馬隊を中心に、穂先を揃えた長槍を構えてこちらを見据えている。

敵の総数は三千以上。しかしてこちらはただの一個隊、五百人程度の数だ。その中にあって、一際輝く白銀のセリーヌは、己の内部に滾りゆく「力」を全身に漲らせていた。

（ますます……強くなる）

循環する魔力は身体の奥底から指先まで流れ、筋繊維の一筋まで知覚できるかのようだ。

身体が、熱い。

戦場の高揚感に導かれるまま、セリーヌはクラウソラスを天に掲げた。

「では、開戦の狼煙を上げようか」

こくりと頷くイグナシオ。セリーヌは剣に魔力を込める。

「はぁぁぁぁぁぁぁ――!!」

クラウソラスに叩き込まれる膨大な魔力、紫電は稲妻となり大地を梳る。球体状の光が刀身を包み込み、セリーヌはそれを振りかぶると――。

「ライトニングエグゾダスッ!!」

轟、と。

空間を、音と光が蹂躙した。

「――っ！　――っっ!!」

魔物たちの悲鳴すらもかき消える。剣から一直線に駆け抜けた閃光は、数千の軍勢を凄まじい火力で断ち割った。

膨大な熱量に炙られた数十騎は悲鳴をあげることすらできずに焦がされ尽くし、刹那を遅れて襲いくる衝撃波が哀れなる魔物どもを塵芥のごとく吹き飛ばしていった。

「おお……」

と、呆然とするイグナシオの目の前。大地に焦げついた線を描いたその後に残るのは、砕け、えぐれ、引き裂かれた魔兵の残骸であった。

響く、断末魔の呻き声。

ただその一撃で、不遜であったバーンドベルグの軍は浮足立っていた。

味方の軍がどよめく。英雄騎士のその強さに、戦意が熱波と化して高揚していく。

「行くぞ、イグナシオどの」

「おおっ！　皆の者、かかれぇぇぇぇぇぇいっ！」

第二騎士団団長の号令とともに。

両軍が、激突した。

「くっ！　陣を組み直せっ！　馬鹿者どもがっ！」

混乱する騎馬軍団を落ち着けようと指揮官が声を張り上げる。けれど、セリーヌの一撃により恐慌をきたしているのは兵よりも馬であった。竿立ちになる馬が騎手を振り落とし、倒れ伏す兵の頭蓋を叩き潰す。

その、混乱のただ中へ。

「はぁあああああぁあっ!!」

白銀に輝く女騎士が雷神の槌のごとき一撃を剣に込めて飛び込んだ。

叩きつけられる魔力に空間が爆砕し地面にクレーターを穿って広がっていく。吹き飛ばされる兵士たち、弾け飛ぶ石くれすらも命を奪う弾丸と化して、人魔の肉を打ち抜いていく。

ばらばらと、腕が、脚が降り注ぐ、肉の雨の中心に立ち上がる女騎士。

「――どうした。私はここにいるぞ? この、セリーヌ=アヴァリアレスのそっ首が欲しければ、どこからでもかかってこいっ!」

さながら獅子の咆哮のごとく、戦場に響く大音声に、視線が集中する。

どこまでも青い髪が風に翻る。

白銀の鎧が煌めいている。

そのまなざしは、真っ直ぐに敵軍を射抜いていて。味方も、敵ですら、見惚れるほどの神々しさがあった。

「なっ何をしているっ! かかれっ」

指揮官の怒号が戦場の時計を進める。一斉に、狂ったような声をあげて飛びかかっていく兵士たち。

ただのニンゲンだ――。

たかが女ひとり――と。だが。

突き出される槍の穂先、唸りをあげるグレートソード、四方八方からの攻撃を、けれどセリーヌは避けることすらしなかった。

「ふぅうっ!」

振り回されるクラウソラス、剣先から放たれる衝撃波が、刃の群れを弾き飛ばす。返す刀とともに、一歩を踏み込んだセリーヌの振るう横薙ぎは、頑強な鋼の装甲ごと。

五体の魔物をまとめて両断した。

ぐるんぐるんと舞い上がる胴体、散りゆく血飛沫はまるで花びらのよう。

それを呆然と見上げる魔物たちへ、

「イセリアを、舐めるなぁあああぁぁあっ!!」

扇を描く斬撃が、さらに四体の魔物の臓物を撒き散らす。雨と降り注ぐ鮮血が、バーンドベルグの軍勢を真っ赤に染め上げていく。

一歩、

「げえっ!」「ぐぎゃあっ!」

一歩、

「たっ、たすっ」「ぶひぃいっ」

一歩、

「さっ、下がれっ!」「うげぇえぇ」

一歩と歩を進める度に。

まるで竜巻であった。一撃で、四体も五体も斬り伏せて、けれど邁進するロイヤルブルーに澱みはない。

彼女が真っ直ぐに進む先――。

「おのれっ、おのれぇえぇえっ!」

この一隊の指揮官であろう、バーンドベルグ騎士の狼狽した姿があった。

部下たちを馬の蹄で蹴り飛ばしながら、目前に迫る白銀の女騎士から少しでも遠ざかろうとしている。

ふわりと。

馬の首筋に、セリーヌが飛び乗った。

――青い髪が、緩やかに舞う。

「部下を押しのけて逃げるとは。貴様はそれでも騎士なのか」

呆然とする指揮官、その瞳はただ、目前の美貌に吸い寄せられている。

この世の終わりにそれを見て、

兜ごと両断する一撃が、鳩尾までをふたつに分けた。

「はっ。こりゃすげえや」

その人外染みた強さを、イグナシオは感嘆のまなざしで見ていた。

「負けてられねえなあ、お前ら?」

背後に控える第二騎士団に振り返る。頷き返す部下たちへ、にっと笑い返し、イグナシオは地響きすら立てこちらに向かう人魔軍を見据えた。

重装騎兵の突撃は土石流のごとくであり、猛る巨馬に押し潰されればそれだけで身体は肉片と化そう。

それに対し、第二騎士団の面々は、僅かに足を引き腰を落とした。今にも駆け出そうというその姿勢は、けれど逃走のための準備ではない。

彼らは皆、人魔に対している。

破壊的な重量軍は、今にも第二騎士団を飲み込もうとしていた。と。

「雷獣の舌よ、大地を舐めよ。我が行く手には剣。道を駈けよ、紫電」

小さな詠唱が騎士団の背後からもれ聞こえ、すると立ち並ぶ騎士たちの鋼の足甲がばちばちと帯電を始めたのだ。

「さあて、行くか」

イグナシオが両手のナイフを逆手に握る。そして。

「リニア・ドライブ――解放」

そう呟いた瞬間。ばちん! と何かが弾けるような音がして、

騎士たちの身体が、流れた。

「ぎゃげえっ!」「ぎひっっ!」

次の瞬間には鮮血を撒き散らして何匹かの魔物が倒れ伏している。ががっ、と、その後方で、イグナシオが地面を削りながら姿勢を制御していた。

「西方から東方! 第二波!」

叫ぶ。

叫びながらイグナシオが、鋼の足鎧で強く地面を踏みしめれば――彼の身体は地面の上を、凄まじい勢いで滑ってゆくのだ。

まさしく、氷の上を滑るように。

彼に従う騎士たちも同様であった。

道すがらに武器を振るうだけで事足りる。打ち下ろす剣も槍も間に合わず、バーンドベルグの兵士たちは咽を脇腹を心臓を、急所という急所を的確にえぐられて死んでゆく。

「はあっ! ひひぃい何だこいつらあっ!」「はっ、はええっ! ぶひぃいっ!」「ぎゃあぁっ!」

土の上を優雅に滑る第二騎士団――それは奇妙な光景であった。

魔術により地面からの磁力を増幅さ

せ、さらに逆ベクトルの磁力を付与させた足甲でその上を滑走する。
リニア・ドライブ。
この魔術こそが第二騎士団の特色であり、彼らが紫電騎士団と呼ばれるゆえんでもあった。
「遅いっ！　遅いおそいっ！」
二本のナイフを縦横に振るい、イグナシオは死体の山を築いていく。恐慌をきたしていく人魔たち、我先にと逃げ出す者までいる始末だ。
戦場の混迷は、いよいよ深まっていく――。

開いた。
右往左往する軍勢が、僅かに割れて、砦へ向かう一筋の道がセリーヌの目前に現れていた。
（ここはもう任せておいていいか）
彼女はそう判断すると、砦へ向かい剣を突きつけた。そして――。
「インペリアルダイブ!!」
超絶的な魔力がクラウソラスに充填される。両足に爆発的な力がこもり、大地を蹴りつけた瞬間、彼女は一筋の彗星と化して閉じられた門へと吸い込まれていった。
砦を揺らす轟音とともに、閂どころか門そのものが吹き飛んだ。そのまま中へと駆け込むセリーヌ、呆然としたままの直線上の兵士たちがごごごごんと吹き飛ばされていく。
勢いを殺し、立ち止まる。鉛のような疲弊感が全身を重くする。けれど。

「ふう、う……さあて」
ここでも、暴れてやるか。
砦内部に、魔物はいなかった。詰めているのは人間たちだけ――どいつもこいつも、中まで攻め込まれると思っていなかったのか、まともに剣を合わせることなく逃走していく。
（このまま砦を奪えるのでは？）
おおよその砦の構造は、作戦時、頭の中に叩き込まれていた。
指揮官室を、目指す。
そして飛び込んだその部屋に。
「――――――――な」
絶句する光景があった。
死体の山だ。
鎧を剥ぎ取られ、裸に剥かれた男女の死体。天を見上げ、大きく開かれた口蓋から、一本の杭が伸びていた。
股間から、口まで。
長い杭に、貫かれて、そんなものがずらりと壁際に並べられていたのだ。
顔面を、苦痛と苦悶に固めて、どろりと濁った瞳で中空を見据えたまま。
濃密な血のにおいが、鼻を刺す。
この砦を守っていた騎士たちだろう。
「何という……非道なっ……！」
幼げにも見える、騎士少女の串刺し死体がある。その唇に、股間に、白濁した欲望の汚液がべっとりとまとわりついていた。彼女だけではない、見える限りの女の死体の、そのすべてに。
穢されたのが、死ぬ前か、死んだ後か、それはわからない。けれど。
（許せない……このような、冒涜っ）

クラウソラスを握り締め、胸中に荒れ狂う憤怒を必死で抑えつける。そうでないと、このまま、砦ごと何もかもを吹き飛ばしてしまいそうになる。
「……貴様、かあ……」
怨嗟を込めて、セリーヌは問うた。
部屋の奥、大きなマホガニーの机の向こうに腰かけた、男へと。
「ホーッホッホ！　どぉお、いいオブジェでしょう？　生きたままぶっ刺すのが、いい顔を残すコツなのよぉ」
その、ひどく野太い声の持ち主は、膨れ上がった太鼓腹を揺さ振りながら愉快げに嗤っていた。
脂ぎった団子鼻がヒクヒクと震えている。巨大なナメクジの張りついたような唇が、卑しげに吊り上がっている。手入れの行き届いたさらりとした金髪のロン毛が、いっそ滑稽であった。
「い～い顔をとどめているでしょう？」
「……貴様が、ここの指揮官か？」
「バーンドベルグ、第二王子。ゴルヴァーナ＝オーギュスタンよ。ふふ」
立ち上がり、両手を重ね右頬に当て、しなまで作って自己紹介。
――吐き気がした。
「第二王子……だと。貴様がか？」
以前に会ったウォルガードとは似ても似つかぬ姿である。けれど、ゴルヴァーナはフンと鼻を鳴らし、
「そおぉよ。この高貴さと美しさ、王族でなければ醸し出せないわあ」
などと、頭の痛くなるようなことを言ってくる。呆れたように首を振るセリーヌへと、
「わたしはねえ、色んなものが欲しいのよ。富もそう、こぉんな、玩具もそう。でもね、一番欲しいのは、名声」
不意に、そんなことを口走った。
「あんた、英雄だの何だのと称えられているらしいわね？」
いいながら、男は、
「……ふふ、あんたを捕らえれば、この美しいわたしの名もバーンドベルグにいっそう轟くというものよ。ウォルガード兄様なんて、目じゃないわ」
何かを夢想するように、うっとりとした笑みを浮かべるのだ。
セリーヌは呆れたように息を吐く。
（ま、……まあいい）
潜入部隊を待つまでもない。ここでこの男を押さえれば砦を奪還できる。
そう思い、一歩を踏み出しかけた。
「おおっと。ちょっと待ちなさいな」
と。ゴルヴァーナは右手を掲げた。そこには、何やら黒い水晶球のようなものが鎮座している。彼はそれに向かい、何事かを呟くと――。
のそりと、彼の背後に、黒い山が立ち上がった。机の陰になっていて、見えなかったのだ。
強烈な、獣のにおいが漂ってくる。
（――何だ、あの化け物は）
現れた異形、その姿にセリーヌの瞳が見開かれる。
巨大な、豚に似た魔物であった。
たるみきった腹の下に、小さな脚が

著者近刊　『キャッスルプリズナー　雌将校隷属調教』『BLANGEL　輪になりて踊る愚者の夜』『ご主人さまでしょ！　ツン会長のメイド奮闘記』好評発売中！　好評発売中！

ちょこんとついている。牛ほどもあろうかという体躯、その身体にはいくつものイボが浮き上がり、体表は皮膚病の犬のように爛れていた。
目にするだけで眼球が腐れて落ちそうな、嫌悪感を催す異形。
ぼたぼたと、緩んだ口の端から、泡混じりの涎を滴らせている――。
「ぶるるぅぁぁるうぁあぅうう……」
口から赤黒い舌が這い出した。長い、長い長い、舌が。セリーヌの腕くらいに太いそれは、皮の鞭ほどの長さもあるだろうか。
その舌を伸ばす。魔獣の股座にある、目を背けたくなるほどに禍々しくどす黒い肉塊へと。ぎちぎちと勃起しきった、獣の肉根は、胴体に張りつくくらいに反り返っている。
まるで、棍棒のようだ。
先端まで、分厚い皮に覆われていて、その皮を押し上げるぶつぶつした隆起は、内部にまでイボが生えているのだろうか。荒縄のような血管が、どくどくと脈動し、それに合わせて男根自体がぴくっぴくっと跳ねている。
そして。そこに。
「――――ぅっ！　なっ……！　あっ、ああっ、あぁあああぁあっ!?」
鉄槌で、頭蓋を叩かれた気がした。
五人の、女が。
豚の腹の下に潜り込んで、一心不乱にその汚根をしゃぶり上げていた。
じゅるっ……ちゅぱりゅっ！　じゅるじゅるっ。ふはぁ……んくじゅ…。
「ああ……そんな。お前ら、は……」
赤毛の娘。黒毛の娘。あどけなさの残る少女。それに、それに……。
どの顔にも、見覚えがある。
第三騎士団の、女騎士たち。団長である槍騎士エルスの部下たちのはずだ。
なぜ、こんなところに。そして。
なぜ、そんな目に遭っているのだ。
半壊した鎧と、ぼろぼろの衣服。零れ出る乳房が痛々しく腫れていて、見え隠れする肌には無数の傷がある。饐えた臭気が、全身から染み出していた。陵辱の名残を感じさせるほどに。
けれど、何よりも。
その五人の騎士の、五人ともが。
赤子を孕んでいるであろう、膨れ上がった腹を抱えていることに、セリーヌは激しい衝撃を受けていた。
瞳に光はなく、表情もない。
「ふふ……メイズから召喚した魔物の手みやげよ。散々に犯されて、壊れちゃってるけどね。ホホ」
「おっ……！　お前らっ！　何をしているっ、やめろ、やめろぉっ！」
叫ぶ――けれど、女たちの耳には届かない。ちゅぶ、ちゅる、ちゅぱり……グロテスクな獣棒に、汚れた顔を擦りつけて、誇り高き女騎士たちはそれに愛撫を繰り返す。唇に、舌に、獣の恥垢をなすりつけながら。
「ふふっ……忘れられないのねぇ、その味が。まったく、はしたない」
ねえ……入れて、入れてよぉ……みるくぅ……赤ちゃんに、みるくぅう……ちょうだいっ！　……子宮にまたいっぱいちょうだいいいっ……！
喘ぎながら豚ペニスを啄ばむ姿は母豚の乳房に顔を寄せる子豚のようで。
「きっ……貴様ぁああ……きぃさまぁあぁぁああああっぁあああっ!!」
ばちばちぃ……ごぉうっ！
紫電が、激震が、室内を駆け巡る。天に靡くロイヤルブルー、迸る魔力を抑えようともせずに、一歩を踏み出すセリーヌ。ゴルヴァーナを守るように進み出る兵士たち、けれどセリーヌにはそんなもの、障害にすらなりえない。
「あらら？　いいのかしら？」
だが。ゴルヴァーナが、水晶球に向かい何事かを唱え、そして。
「あっ……ぎぃぃぃぃぃっ！」「いっ、な、暴れないでぇえっ！」「あごぉおおっ、お腹、破れるぅうううっ！」
のたうち回る女たち、何事かと見れば、その妊婦腹が、歪み、膨れ、たわんでいた。中で何かが暴れているように、蠢く薄皮は破裂寸前の風船のようで。破れてしまうのではないかという恐怖をセリーヌに叩きつける。
全身を汗塗れにして泡を吹き、白目を剥いて苦悶に転がる女騎士たち。
「子宮っ……ごわれるぅうううっ！」
「ほぉおら。このメスブタどもの命が惜しければ、剣を捨てなさい。でないと、腹の中の赤ちゃんに、女どもを内から食わせるわよぉ」
「……っ、くっ！　くぉお……っ」
こめかみが熱い。ぎりぎりと、奥歯を割れんばかりに噛み締める。
騎士とは、国のためなら、その身を捧げることも厭わない。自分だってそうだ。クレオラで、フィオナを守るためにこの身体を使った。
けれど、これは。
こんなのは、あんまりだ。
騎士どころか、人としての尊厳まで踏みにじられて、女としての在り方まで壊されて――。
「……わ、わかったっ……！」
クラウソラスを、床に置く。
このままゴルヴァーナを斬ることは容易い。けれど、それでは控える兵士たちにより、女の命は失われてしまうことだろう。
（助けたい――）
もう少し時間を稼げれば、潜入部隊がここに雪崩れ込むはずだ。
それまで、何とかすれば。
「ふふ。いいわね。素直な子は好きよ。それじゃあそこに跪きなさい」
「っ……くっ……！」
抵抗の殺意が込み上げて、必死で抑えつける。歯噛みしながら膝をつく。
「さて、それじゃあどうしてくれようかしら。忌々しいセリーヌ＝アヴァリアレス。人質にする前に、楽しませてもらわないとねぇ……」
にいいと笑うゴルヴァーナは水晶球に向かい、呟く。そして、
魔獣の瞳が、そのぎょろりとした眼球がセリーヌを射抜いた瞬間。
「うっ……くっ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/